

**IBM WebSphere Business Integration  
Connect Enterprise and Advanced Editions**



**インストール・ガイド**

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、89 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM WebSphere Business Integration Connect Advanced Edition (5724-E75) および Enterprise Edition (5724-E87) バージョン 4、リリース 2、モディフィケーション 2、および新しいバージョンで明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： IBM WebSphere Business Integration Connect Enterprise and  
Advanced Editions  
Installation Guide

発 行： 日本アイ・ピー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2004.7

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体\*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注\* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、  
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 2003, 2004. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2004

# 目次

まえがき	v
本書について	v
このリリースの新機能	v
対象読者	v
ハブ管理	vi
マネージャー管理者	vi
オペレーター管理者	vi
参加者管理	vi
表記上の規則と用語	vii
表記上の規則	vii
関連資料	vii
用語	viii
ヘルプの参照先	ix
ソフトウェアのサポート	ix
パスポート・アドバンテージ	ix
製品資料	ix
<b>第 1 章 始める前に</b>	<b>1</b>
プラットフォーム、ハードウェア、およびソフトウェアの要件	1
環境の計画	4
可用性	4
スケーラビリティ	5
データ・ストレージ	6
セキュリティ	6
ポートの計画	7
接続形態	8
統合接続形態	8
分割接続形態	8
分散接続形態	9
最良実例の設計	9
<b>第 2 章 Linux、Solaris、または AIX への Business Integration Connect のインストール</b>	<b>11</b>
インストールの概要	11
インストール前提条件の検査および構成	11
ユーザー・アカウントの追加	12
WebSphere MQ の構成	13
DB2 のインストールおよび構成	14
Oracle のインストールおよび構成	15
プリインストール・チェックリスト表	16
Business Integration Connect のインストール	17

DISPLAY 環境変数	17
LaunchPad	18
データベースの作成	19
インストール・ウィザードによるコンポーネントのインストール	27
コマンド行によるコンポーネントのインストール	40
オプション・ファイルの生成	41
サイレント・インストールの実行	42
Business Integration Connect のアップグレード	42
Oracle JDBC ドライバーの更新	47
Business Integration Connect の開始	48
インストール・システムのテスト	49
トラブルシューティング	50
Business Integration Connect のアンインストール	50

## 第 3 章 Windows 環境での Business Integration Connect のインストール . . . 53

インストールの概要	53
インストール済み前提条件の検証および構成	53
ユーザー・アカウントの追加	54
WebSphere MQ の構成	55
DB2 のインストールおよび構成	56
Oracle のインストールおよび構成	57
プリインストール・チェックリスト表	58
Business Integration Connect のインストール	59
LaunchPad	59
データベースの作成	60
インストール・ウィザードによるコンポーネントのインストール	67
コマンド行によるコンポーネントのインストール	80
オプション・ファイルの生成	81
サイレント・インストールの実行	82
Business Integration Connect のアップグレード	82
Oracle JDBC ドライバーの更新	82
Business Integration Connect の開始	83
インストール・システムのテスト	85
Business Integration Connect のアンインストール	86
トラブルシューティング	87

## 特記事項 . . . 89

プログラミング・インターフェース情報	91
商標	91



---

## まえがき

---

### 本書について

本書では、IBM WebSphere Business Integration Connect Advanced Edition バージョン 4.2.2 および IBM WebSphere Business Integration Connect Enterprise Edition バージョン 4.2.2 について説明し、以下の情報を提供します。

- Business Integration Connect をインストールする前に必要なインストール前提条件について説明します。
- インストール計画に役立つ情報を提供します。
- 使用できる幾つかのデプロイメント構成について説明します。
- Business Integration Connect のインストール・ウィザードの実行方法について説明します。
- Business Integration Connect を始動してログインする方法について説明します。
- Business Integration Connect のアンインストール方法について説明します。

Business Integration Connect のインストールが完了したら、コミュニティーのセットアップ手順について、「ハブ構成ガイド」を参照してください。

---

### このリリースの新機能

このセクションでは、最後のリリース (4.2.1) 以降、本ガイドに対して行われた変更内容を説明します。

- 製品には、製品資料、DBLoader、および Installer にアクセスするためのランチパッドが用意されています。詳しくは、18 ページの『LaunchPad』 (UNIX) または 59 ページの『LaunchPad』 (Windows) を参照してください。
- アップグレード情報は更新されています。42 ページの『Business Integration Connect のアップグレード』を参照してください。
- 新規のデータベース接続の確認用の画面が、WebSphere Business Integration Connect Installer の一部として用意されています。33 ページの図 17 (UNIX)、または 73 ページの図 36 (Windows) を参照してください。

---

### 対象読者

本書は、Business Integration Connect をインストールする責任を持つ IT の専門家を対象としており、読者が以下の点に精通していることを前提にしています。

- 少なくとも以下のいずれかのオペレーティング・システムについての知識が必要です。
  - Linux
  - Solaris
  - AIX
  - Windows 2000

- DB2 または Oracle 9i
- WebSphere MQ
- B2B の概念
- ビジネス・プロセス
- セキュリティー
- 環境の計画

Business Integration Connect 環境には、ハブ管理とオペレーター管理者 (コミュニティー・マネージャーの管理ユーザー)、マネージャー管理者 (コミュニティー・マネージャーの管理ユーザー)、および参加者管理 (参加者の管理ユーザー) の 4 つの管理ユーザー・タイプがあります。管理ユーザーは、以下の方法で製品のインストールと構成に参加します。

## ハブ管理

- 環境の計画を行って、スケーラビリティとロード・バランシングを最適化します。
- 前提条件が満たされていることを確認します。
- Business Integration Connect をインストールします。
- システム・パラメーターを構成します。

ハブを構成し、JMS を使用してイベントを外部キューに配信するよう計画する場合は、詳細について「ハブ構成ガイド」を参照してください。

## マネージャー管理者

コミュニティーにおけるコミュニティー・マネージャー部分の正常性およびメンテナンスの責任を持ちます。

## オペレーター管理者

- ハブ・コミュニティーで使用可能な接続を構成します。
- コミュニティー・オペレーターの従業員によってコンソールへのアクセスを管理します。

## 参加者管理

システム・パラメーターを構成します。

管理ユーザーの詳細については、「IBM WebSphere Business Integration Connect 管理者ガイド」を参照してください。

## 表記上の規則と用語

### 表記上の規則

本書は、次の規則に従って編集されています。

太字	ユーザー・インターフェースの中の選択対象を示します。また、初出語を示します。
Courier フォント	コマンド名、ファイル名、入力情報、システムが画面に出力した情報など、リテラル値を示します。
<i>italic</i> (イタリック)	変数名または相互参照を示します。PDF ファイル形式の IBM WebSphere InterChange Server 資料を表示すると、相互参照は青色のイタリックになります。相互参照をクリックすれば、目的の情報にジャンプすることができます。
イタリック <i>courier</i>	リテラル・テキストの中の変数名を示します。
<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">枠付きクーリエ</span>	コード・フラグメントをその他の本文と区別します。
青のアウトライン	オンラインで表示したときにのみ見られる青のアウトラインは、相互参照用のハイパーリンクです。アウトラインの内側をクリックすると、参照先オブジェクトにジャンプします。
{WBIC INSTALL DIR}	製品のインストール先ディレクトリーを表します。
{ }	構文の記述行の場合、中括弧 { } で囲まれた部分は、選択対象のオプションです。1 つのオプションのみを選択する必要があります。
	構文の記述行の場合、パイプによって一組のオプションを分離します。1 つのオプションのみを選択する必要があります。
[ ]	構文の記述行の場合、大括弧 [ ] で囲まれた部分は、オプションのパラメーターです。
...	構文の記述行の場合、省略符号 ... は直前のパラメーターが繰り返されることを示します。例えば、option[...] は、複数のオプションをコンマで区切って指定できることを意味します。
< >	不等号括弧によって名前の個々の要素を囲み、互いを区別します。例えば、<server_name><connector_name>tmp.log のようになります。
/, ¥	本書では、ディレクトリー・パスの規則として円記号 (¥) を使用します。UNIX をインストールしている場合は、スラッシュ (/) をバックスラッシュ \ で置換します。すべての製品パス名は、使用システムで WebSphere Business Integration Connect がインストールされているディレクトリーを基準とした相対パス名です。
UNIX:/Windows:	このいずれかの文字で始まるパラグラフは、オペレーティング・システムによる差をリストしたメモであることを示します。

## 関連資料

この製品に付属する資料一式には、WebSphere Business Integration Connect Enterprise and Advanced Editions の機能およびコンポーネントが説明されています。

以下のサイトから、資料をダウンロードするか、オンラインで直接読むことができます。

<http://www.ibm.com/software/integration/wbiconnect/library/infocenter/>

注: 本書の発行後に公開されたテクニカル・サポートの技術情報や速報に、本書の対象製品に関する重要な情報が記載されている場合があります。これらのページは、WebSphere Business Integration サポート Web サイトにあります。

<http://www.ibm.com/software/integration/websphere/support/>

関心のあるコンポーネント・エリアを選択し、「Technotes」セクションと「Flashes」セクションを参照してください。

---

## 用語

**ビジネス・プロセス (Business Process):** ビジネスの目的を達成するために必要とされるステップを表す、定義済みのビジネス・トランザクション。

**Community Console:** Community Console は、IBM WebSphere Business Integration Connect を構成するために使用される Web ベースのツール。ユーザーの会社とコミュニティ・マネージャーまたは参加者との間のビジネス・ドキュメントの流れを管理する。

**コミュニティ・マネージャー (Community Manager):** WebSphere Business Integration Connect を購入し、ハブ・コミュニティのメンバーに配布した会社。コミュニティ・マネージャーには、マネージャー管理者と呼ばれる一人の管理ユーザーがいる。マネージャー管理者は、コミュニティにおけるコミュニティ・マネージャーの部分の正常性およびメンテナンスの責任を持つ。

**コミュニティ・オペレーター (Community Operator):** ハブ全域において、システムの構成および全体的な正常性とメンテナンスの責任を持つ個人。

**コミュニティ参加者 (Community Participant):** コミュニティ参加者は、コミュニティ・マネージャーとの間でビジネス・トランザクションを送受信する。コミュニティ参加者は、コミュニティにおける参加者の役割を支援する Community Console の機能を使用できる。

**デジタル証明書 (Digital Certificate):** デジタル証明書は、電子バージョンの ID カード。インターネット上で B2B トランザクションを実行する場合に、ユーザーの識別情報を確認する。デジタル証明書は、認証局から取得できる。

**文書フロー定義 (Document flow definition):** 文書フロー定義とは、システムの文書処理能力を定義するメタ情報の集合のことである。ビジネス・ドキュメントをシステムが処理するためには、複数の文書フロー定義が、階層的にリンクされ、コンテキストを作成する必要がある。コンテキストには、システムがハブ・コミュニティからドキュメントを受信し、処理し、ハブ・コミュニティに送信する上で必要とする情報がすべて含まれる。

**資料 (Document):** 組織の規則に従った情報の集合体。このコンテキストでは、1 つのプロセスに複数の資料が存在する。

ゲートウェイ (Gateway): ゲートウェイとは、別のネットワークへの入り口点のことである。ハブ・コミュニティおよびコミュニティ参加者は、ゲートウェイを使用して、お互いのドキュメントを受信する。

ハブ・コミュニティ (Hub Community): コミュニティ・マネージャー、コミュニティ・オペレーター、およびコミュニティ参加者で構成される環境。

---

## ヘルプの参照先

### ソフトウェアのサポート:

[www.ibm.com/software/support/](http://www.ibm.com/software/support/)

### パスポート・アドバンテージ:

[www.ibm.com/software/howtobuy/passportadvantage/](http://www.ibm.com/software/howtobuy/passportadvantage/)

### 製品資料

[www.ibm.com/software/integration/wbiconnect/library/infocenter](http://www.ibm.com/software/integration/wbiconnect/library/infocenter)



## 第 1 章 始める前に

この章では、Business Integration Connect の Enterprise Edition および Advanced Edition のインストールと稼働に必要なプラットフォーム、ハードウェア、およびソフトウェアについて説明します。

『環境の計画』のセクションでは、最適なインストール・システムを作成できるように、インストール前に考慮すべき項目を示します。

最後に、この章では、Business Integration Connect のインストールに使用できるいくつかの配置構成について説明します。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『プラットフォーム、ハードウェア、およびソフトウェアの要件』
- 4 ページの『環境の計画』
- 7 ページの『ポートの計画』
- 8 ページの『接続形態』

### プラットフォーム、ハードウェア、およびソフトウェアの要件

次の表は、Business Integration Connect が現在サポートしているオペレーティング・システムのハードウェア要件とソフトウェア要件をリストするとともに、Business Integration Connect のインストール前にインストールしておく必要のある製品も示しています。

**注:** システムの実際の要件は、ユーザー特定の環境の複雑さ、スループット、およびデータ・オブジェクトのサイズによって大きくなる場合があります。

サーバー	バージョン	推奨するハードウェアは以下のとおりです
Red Hat Enterprise Linux Advanced Server (Intel)	アップデート 2 以降が適用された 2.1	<ul style="list-style-type: none"><li>• 2GHz Intel Xeon プロセッサ</li><li>• 最小 2GB の RAM</li><li>• アプリケーション用の、最小 300 MB の使用可能ディスク・スペース</li><li>• 文書保管用の追加ディスク・スペース、30 GB を推奨</li><li>• 容量および冗長度を追加するための追加サーバー</li><li>• マルチサーバーのインストール・システムでは、ネットワーク接続共用ストレージが必要</li><li>• DB2 8.1 FP2 または Oracle 9.2.0.1 をインストールし、データベース・インスタンスを作成していること</li></ul>

サーバー	バージョン	推奨するハードウェアは以下のとおりです
Microsoft Windows Server	Service Pack 3 以降が適用された 2000	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 2 GHz Intel Xeon プロセッサ</li> <li>• 最小 2GB の RAM</li> <li>• 300 MB 以上の使用可能ハード・ディスク・スペース</li> <li>• 文書保管用の追加ディスク・スペース、30 GB を推奨</li> <li>• 容量および冗長度を追加するための追加サーバー</li> <li>• マルチサーバーのインストール・システムでは、ネットワーク接続共用ストレージが必要</li> <li>• DB2 8.1 FP2 または Oracle 9.2.0.1 をインストールし、データベース・インスタンスを作成していること</li> </ul>
AIX	APAR IY44183 の付いた 5.2、 または推奨メン テナンス・パ ッケージ 5200-01 が適用 された、APAR IY44183 の付い た 5.2	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 600 MHz プロセッサ</li> <li>• 最小 2GB の RAM</li> <li>• 300 MB 以上の使用可能ハード・ディスク・スペース</li> <li>• 文書保管用の追加ディスク・スペース、30 GB を推奨</li> <li>• 容量および冗長度を追加するための追加サーバー</li> <li>• マルチサーバーのインストール・システムでは、ネットワーク接続共用ストレージが必要</li> </ul>
Solaris	8、2003 年 4 月 の推奨パッチ・ クラスターが適 用されたもの	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 750 MHz 以上の UltraSparc</li> <li>• 最小 2GB の RAM</li> <li>• 300 MB 以上の使用可能ハード・ディスク・スペース</li> <li>• 文書保管用の追加ディスク・スペース、30 GB を推奨</li> <li>• 容量および冗長度を追加するための追加サーバー</li> <li>• マルチサーバーのインストール・システムでは、ネットワーク接続共用ストレージが必要</li> </ul>

サーバー	バージョン	推奨するハードウェアは以下のとおりです
SuSE Linux Enterprise Server for x86	8.0、SuSE Linux カーネル 2.4 が適用されたもの	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 2GHz Intel Xeon プロセッサ</li> <li>• 最小 2GB の RAM</li> <li>• アプリケーション用の、最小 300 MB の使用可能ディスク・スペース</li> <li>• 文書保管用の追加ディスク・スペース、30 GB を推奨</li> <li>• 容量および冗長度を追加するための追加サーバー</li> <li>• マルチサーバーのインストール・システムでは、ネットワーク接続共用ストレージが必要</li> </ul>

次の表は、Business Integration Connect が使用しているか、またはその可能性のあるソフトウェアをリストしています。これらのアプリケーションは、ネットワーク上のどこに置いてかまいません。ただし、RDBMS と WebSphere MQ については、専用サーバー上に置くことをお勧めします。

項目	バージョン	注記
IBM DB2 Universal Database Enterprise Server Edition  または  Oracle 9i	フィックスパック 2 が適用された 8.1、またはそれ以降のもの  DB2 ユニバーサル JDBC ドライバー  Oracle JDBC シン・ドライバー 装備の 9.2.0.1	Business Integration Connect データを保持するために必要です。DB2 は専用サーバーにインストールする必要があります。  Business Integration Connect は、一組のデータベース・ストアド・プロシージャをインストールして使用します。DB2 インストール・システムが、ストアド・プロシージャのインストールと構成を行えるように設定されていることを確認してください。特に、DB2 は、C/C++ 言語コンパイラを使用できる必要があります。  JDBC ドライバーは、OTN Web サイトからダウンロードできます。それを Oracle 9i にインストールすることもできます。
次のものをもった WebSphere MQ <ul style="list-style-type: none"> <li>• Java™ Message Service (JMS)</li> <li>• MA0C MQSeries - パブリッシュ/サブスクライブ SupportPac</li> </ul>	CSD03 が適用された 5.3、またはそれ以降のもの	Business Integration Connect コンポーネント間のメッセージングの処理に必要です。WebSphere MQ は専用サーバーにインストールする必要があります。  CSD03 を入手するには、 <a href="http://www.ibm.com/software/integration/support/SupportPac/">http://www.ibm.com/software/integration/support/SupportPac/</a> にアクセスしてください。
Simple Mail Transport Protocol (SMTP) にもとづいた E メール中継サーバー		E メール・アラート、SMTP メッセージ配信、およびアウトバウンド・トランスポートに必要です。

項目	バージョン	注記
ProFTPD、またはその他の FTP サーバー		FTP を使用する場合にのみ必要です。ProFTPD は <a href="http://www.proftpd.org">www.proftpd.org</a> から入手できます。
Network Attached Storage (NAS) などの共用ネットワーク・ストレージ		マルチサーバー環境用にのみ必要です。

次の表には、Community Console にアクセスするクライアントに必要なソフトウェアをリストします。

項目	バージョン	注記
以下のいずれかのブラウザを使用してください。	6.0 以降のもの	Community Console を使用するために必要です。
Netscape Navigator	5.0 以降のもの	
Microsoft Internet Explorer		
画面解像度の設定		1024 x 768 を推奨

## 環境の計画

このセクションでは、Business Integration Connect のインストール前に考慮すべきいくつかの事項について説明します。計画によって、ユーザーの要件に正確に適合した配置接続形態を決定できます。

## 可用性

システム・ダウン時間は、ビジネスの生産性および収益性に深刻な影響を与えます。高可用性システムを構築すれば、システムが常に稼働しており、文書を受け取る準備のできている状態の、ハブ・コミュニティを実現できます。標準的な高可用性環境では、システムは 99.9 パーセントの稼働時間を実現しています。システムによっては、99.999 パーセントを実現しているものもあります。可用性レベルは、システム障害、システムの過負荷、ネットワーク輻輳、およびネットワーク・アタックなどによって低下する場合があります。可用性を最大化するには、システムに冗長性をもたせる必要があります。このためには、アーキテクチャー内の別個のサーバー上に、各論理機能 (Community Console、Receiver、および Document Manager) を 2 つ以上実装する必要があります。したがって、1 つのサーバー上に 3 つのコンポーネントをすべて置く場合は、冗長性を提供する別のサーバーが必要になります。各コンポーネントをユーザー自身のサーバー上に別々に配置する場合は、冗長性を提供する合計 6 つのサーバーが必要になります。さらに、災害時回復ロケーションに別のサーバー・セットを構築して、そのロケーションからシステムを稼働できるようにすることも考慮する必要があります。

高い可用性をもった Business Integration Connect を構築するには、それをサポートするインフラストラクチャー (ネットワーク、インターネット接続、および装置に入ってくる電力) も、高い可用性をもつ必要があります。高可用性は、MQ および RDBMS についてもあてはまりません。これらのサポート・ソフトウェアのいずれかに障害が発生すると、実稼働環境にも障害が発生します。

## スケーラビリティ

Business Integration Connect は水平に拡張します。これは、コンポーネントのインスタンスを追加すると、処理能力が高くなることを意味します。必要な実際の、サーバー数、特定コンポーネントのインスタンス、またはネットワーク機能は、次の要因によって異なります。

- **コミュニティ・サイズ** 多くのパートナーがハブに接続している状態は、より多くのユーザーがハブにアクセスすることを意味します。場合により、Community Console インスタンスの数を増やし、これをサポートするデータベースの機能を高める必要があります。
- **文書のボリューム** コミュニティ参加者およびコミュニティ・マネージャーが大量の文書を送信する場合は、Document Manager インスタンスの数を増やし、WebSphere MQ の機能を高める必要があります。
- **フローの複合度** プロセス・フローが複雑になると、それら进行处理する Document Manager インスタンスがより多く必要になります。
- **ファイル・サイズ** 大きなファイルは、小さなファイルに比べ、広いネットワーク帯域幅を必要とし、共用ファイル・サービスに大きな影響を与えます。
- **文書フロー** コミュニティ参加者がバッチ処理によってメッセージを送信する場合などによく発生しますが、受信中に文書数が急上昇すると、その急上昇中にメッセージの最大数进行处理するのに十分な Receiver インスタンスが必要になります。Receiver は、通常、Document Manager より 4 倍から 5 倍速いことに注意してください。
- **待ち時間** 文書のある場所から別の場所へ送るのにかかる時間。待ち時間を長くする原因には、伝送手段、文書サイズ、Document Manager の処理などが含まれます。Document Manager の数を増やせば、待ち時間を短くできます。しかし、業務時間の最後に行われるバッチ処理などでは、長い待ち時間を受け入れる選択をすることもできます。例えば、午後 3:00 から午後 5:00 の間にバッチ処理を受け取ることがわかっている場合、より多くの Document Manager を実装することによって、そのデータのすべてをすばやく処理するようにもできるし、Document Manager が待機メッセージの処理中には、その時間に待ち時間が長くなるようにすることもできます。

これらの要因が変化する場合は、コンポーネントの複数のインスタンスを追加することによって、Business Integration Connect を拡張できます。Receiver、Community Console、および Document Manager の各インスタンスは、独立して動作することができます。ただし、Business Integration Connect コンポーネントを冗長構成にする場合は、いくつかのことを考慮する必要があります。

- 複数の Document Manager を構築する場合、すべてのインスタンスは、同一の WebSphere MQ キュー・マネージャーと通信し、同一のデータベース・インスタンスを指し示す必要があります。
- 複数の Community Console および Receiver を構築する場合、これらのコンポーネントはインターネットからの接続を受け入れるため、このネットワークには、ロード・バランサーが必要になります。

Business Integration Connect を拡張する場合は、WebSphere MQ および RDBMS などの、サポート・インフラストラクチャーも拡張する必要があることに注意してください。

サーバーの構成が完了したら、システム・パフォーマンスをモニターして、要求に応じるために、いつ追加サーバーが必要なのか、また追加サーバーが必要かどうかを識別することが重要です。

## データ・ストレージ

データ・ストレージは、Business Integration Connect の前提条件であり、ユーザーの接続形態におけるキー・コンポーネントです。共用ストレージの要件をどのように扱うかは、使用するストレージの要件および次の質問に対する答えによって異なります。

- どのぐらいの期間データを保管する必要があるか。ユーザーの業界に特定のデータ保存要件が存在するか。
- 高可用性をもったデータ・ストレージが必要か。
- 主幹業務の冗長性が必要か。

これらの領域でユーザーの要件が低い場合は、1 つ以上の Business Integration Connect コンポーネントが置かれているのと同じサーバーに、共用ストレージを実装することができます。そうでない場合は、Business Integration Connect とは別のサーバーに置く必要があります。高可用性が必要な場合は、冗長性をもった NAS 製品の使用を考慮してください。この製品は、サーバーから独立して拡張することができます。RDBMS および WebSphere MQ を、NAS 上に置く必要はないことに注意してください。

## セキュリティー

Business Integration Connect は、標準的な機密保護機能のある環境内で動作します。ただし、以下のことに注意する必要があります。

- Business Integration Connect は、プロキシ・サーバーを明示的にサポートしませんが、独立のリバース・プロキシ・サーバーを、インバウンド・インターネット接続に使用することができます。Business Integration Connect がインターネットへのプロキシ・サーバーを使用できるのは、それらのサーバーが SSL 接続を妨害しない場合に限られます。その理由は、Business Integration Connect は、初期 SSL 接続を使用して、接続の確立に不可欠な情報を取得するからです。
- Business Integration Connect は、システムに入ってくる文書を検査する、アンチウィルスまたはファイアウォール・ソフトウェアによって悪い影響を受けます。パフォーマンスを最適化するには、Business Integration Connect サーバー上で、このタイプの検査を使用不可にすることを考えてください。

Community Console では、ロード・バランサーを使用する場合は、スティッキー・セッションを使用可能にしておく必要があります。多くの文書を送信する小さなコミュニティでスティッキー・セッションを使用可能にすると、Receiver インスタンスの追加による拡張に影響がでる場合があることに注意してください。

## ポートの計画

このセクションでは、インストールの計画に役立つデフォルトのポート情報を提供します。この情報により、Business Integration Connect をインストールする前に、ポートの可用性を確認できます。

表 1. インストーラーのデフォルトのポート - ユーザーから可視

ユーザーから可視	Console	Receiver	ルーター
HTTP	58080	57080	56080
HTTPS	58443	57443	56443

表 2. インストーラーのデフォルトのポート - ユーザーから不可視

ユーザーから不可視	Console	Receiver	ルーター
HTTP2	58090	57090	56090
HTTPS2	58043	57043	56043
SOAP_CONNECTOR	58880	57880	56880
BOOTSTRAP	58809	57809	56809

また、計画の際には、以下のポートについても考慮してください。

表 3. サード・パーティー接続用のデフォルトのポート

要件	デフォルトのポート
WebSphere MQ キュー・マネージャーの接続用ポート	9999
DB2 の接続用ポート	50000
Oracle の接続用ポート	1521
ルーターから E メール・サーバーへの SMTP 接続用ポート	25

### ファイアウォールの考慮事項

ファイアウォールを越えてインストールされている Business Integration Connect のすべてのコンポーネントへのポート・アクセスを構成する必要があります。ポート・アクセスの要件については、表 4 を参照してください。

表 4. ファイアウォール越しのコンポーネントの接続

コンポーネント	アクセスを必要とするコンポーネント
WebSphere MQ キュー・マネージャー	Console、Receiver、および Document Manager は、WebSphere MQ キュー・マネージャーにアクセスする必要があります。
DB2 または Oracle	Console、Receiver、および Document Manager は、DB2 または Oracle にアクセスする必要があります。
共通の共用ファイル	Console、Receiver、および Document Manager は、共通の共用ファイルにアクセスする必要があります。

表 4. ファイアウォール越しのコンポーネントの接続 (続き)

コンポーネント	アクセスを必要とするコンポーネント
Receiver	Document Manager は、同期応答するために Receiver の HTTP ポートにアクセスする必要があります。例えば、AS2 の同期 MDN などです。

## 接続形態

このセクションでは、Business Integration Connect とその前提条件ソフトウェアをインストールする前に考慮する必要のある、いくつかの接続形態 (配置構成) について説明します。選択する接続形態は、『環境の計画』で説明した要因にもとづいて選択する必要があります。このセクションで説明する接続形態は、統合接続形態、分割接続形態、および分散接続形態です。

### 統合接続形態

この接続形態は最も単純なものです。この接続形態は、Business Integration Connect コンポーネントの 3 つ (Receiver、Community Console、Document Manager) のすべてが稼働する単一サーバーで構成されます。このサーバー上に WebSphere MQ および RDBMS を置くこともできます。ただし、これらの製品は、別個の専用サーバーに置く必要があります。

### 分割接続形態

分割接続形態は、Receiver と Community Console の各コンポーネントを含むフロントエンド・サーバー、および Document Manager コンポーネントを含むバックエンド・サーバーで構成されます。この接続形態は、小規模実稼働環境用の基本レベルの接続形態であり、これを使用すると、ソフトウェア投資の効果を最大化できます。WebSphere MQ および RDBMS は、これらのサーバーを含め、どこにでも置くことができることに注意してください。専用サーバーへの実装が最善の方法です。

分割接続形態 (フロントエンド・サーバーおよびバックエンド・サーバー) では、3 つの Business Integration Connect コンポーネントのすべてのインスタンスは、同一のファイル共有システムによって通信を行う必要があります。大きなボリュームや高可用性を考慮する必要がない場合は、ストレージをバックエンドにホスティングすると安価なソリューションになります。パフォーマンスやセキュリティを考慮すると、フロントエンドよりもバックエンドの方が好ましい選択です。このソリューションを使用する場合、フロントエンド・サーバーは、NFS 接続または同等のファイル共有ソリューションを使用して、バックエンド・サーバーとファイルを共有できます。

**注:** 分割接続形態配置のすべてのマシンのシステム時刻は、できるだけ頻繁に同期してください。メッセージを受信するときに Receiver ホスト・マシンで発生するイベントは、受信側マシンからのタイム・スタンプを付けてログに記録されます。同じメッセージの処理に関するその他のイベントが Document Manager マシンでも発生する可能性があり、これらのイベントは、Document Manager マシンからのタイム・スタンプを付けてログに記録されます。完全な時刻同期は

不可能なので、コンソールのログ・レコードを表示する場合に順序付けに明らかな矛盾があっても、このことを認識しておけば理解に苦しまずに済みます。

## 分散接続形態

大規模インストール・システムに高い拡張性と冗長性をもった環境が必要な場合は、分散接続形態を構築します。この接続形態は、それぞれの Business Integration Connect コンポーネント (Receiver、Community Console、Document Manager) の、1 つ以上の専用サーバーで構成されます。例えば、冗長性のための 2 つの Receiver サーバー、多数の Community Console ユーザーをサポートする 4 つの Community Console サーバー、および文書処理用の 6 つの Document Manager を必要とする環境を構成できます。より高度な文書処理 (Document Manager)、より多くのユーザー (Community Consoles)、より多くの接続 (Receivers) を処理しなければならないコンポーネントでは、必要に応じてサーバーを追加することによってこの接続形態を拡張できます。

分散接続形態では、共用ストレージとして外部 NAS 装置を使用すると、いいソリューションになります。これによって、環境は、他のすべてのサーバーから独立した、ハイパフォーマンスの、冗長性のあるストレージ・デバイスをもつことができます。すべてのサーバーは、外部装置に対して、NFS 接続または同等のファイル共用ソリューションを確立できます。RDBMS および WebSphere MQ は専用サーバーに置く必要があります。また、それらのデータ・ストレージは NAS 装置に置く必要はありません。

## 最良実例の設計

接続形態を決定したら、次に、冗長性および災害時回復機能を提供する接続形態をどのように実装するかについて考慮する必要があります。ポッドにもとづいて設計することをお勧めします。この設計には、1 次実動ポッドがあります。このポッドには、実動ロードを処理するのに必要な、すべての Business Integration Connect コンポーネントが含まれます。また、2 次実動ポッドがあり、これも実動ロードを処理できます。さらに、これら 2 つを切り替えるロード・バランサーがあります。2 次実動ポッドは冗長性を提供します。10 ページの図 1 は、この 2 つのポッドを実装する方法を示しています。

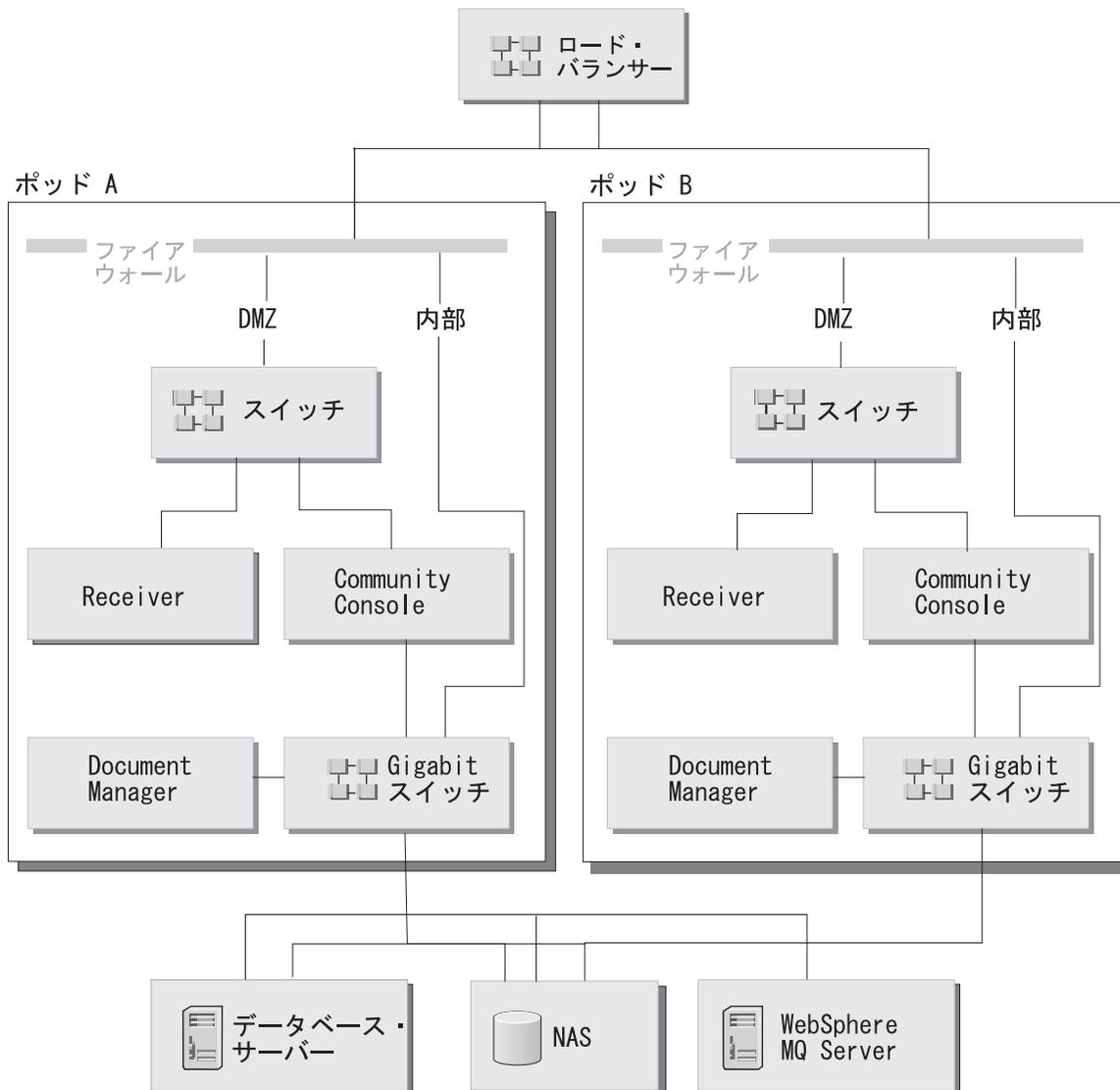


図 1. ポッドにもとづいた接続形態

実動ロードを処理できる別のポッドを災害時回復サイトに置くことができます。3 つすべてのポッドのフロントエンド・コンポーネントは、同一でなければなりません。ただし、災害時回復ポッド用のバックエンド・コンポーネントは、実動コンポーネントから分離する必要があります。したがって、別個のデータベース・サーバー、WebSphere MQ サーバー、およびファイル共有システムが必要です。実動コンポーネントと災害時回復バックエンド・コンポーネント間には、ある形式のデータ同期処理を実装する必要があります。Business Integration Connect は、常に、アクティブな実稼働環境を 1 つしかサポートしません。また、統合接続形態などの最小インプリメンテーションの、テスト・ポッドを追加することもできます。

---

## 第 2 章 Linux、Solaris、または AIX への Business Integration Connect のインストール

以下の手順では、Linux、Solaris、または AIX のいずれかのシステム上で、Business Integration Connect のインストールとアンインストール、アップグレード、始動、テスト、およびトラブルシューティングを行う方法を説明します。

この章の手順は Linux に特有のもので、AIX および Solaris の環境では、パスが少し異なる場合があります。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『インストールの概要』
- 『インストール前提条件の検査および構成』
- 17 ページの『Business Integration Connect のインストール』
- 40 ページの『コマンド行によるコンポーネントのインストール』
- 42 ページの『サイレント・インストールの実行』
- 42 ページの『Business Integration Connect のアップグレード』
- 47 ページの『Oracle JDBC ドライバーの更新』
- 48 ページの『Business Integration Connect の開始』
- 49 ページの『インストール・システムのテスト』
- 50 ページの『トラブルシューティング』
- 50 ページの『Business Integration Connect のアンインストール』

---

### インストールの概要

このセクションでは、Business Integration Connect のインストール・プロセスのハイレベルな概要について説明します。

この章では、以下の作業を詳細に説明します。

1. システムが、最低限のハードウェアおよびソフトウェアのインストール前提条件を満たしていることを確認します。
2. Business Integration Connect データベース表の作成と構成を行います。
3. Business Integration Connect ソフトウェアをインストールします。

---

### インストール前提条件の検査および構成

Business Integration Connect をインストールする前に、必要な前提条件がすべて整っていることを確認してください。このセクションのトピックでは、システムのハードウェアおよびソフトウェア要件、サポートされるデータベース、Business Integration Connect ソフトウェアの実行に必要なユーザー・アカウントの概要を説明します。

インストールの準備に活用できるように、このセクションの最後にプリインストール・チェックリストが用意されています。プリインストール・チェックリストは、Business Integration Connect のインストール前に実行しておく必要のある作業をリストしています。

- 表 1 は、Database Loader インストール・ウィザードを実行するときに入力する必要のある値をリストしています。インストールを計画している場合は、この表の必要なインストール情報を記録しておくことができます。例えば、データベースのインスタンス名や表スペースの情報などです。
- 表 2 は、Business Integration Connect インストール・ウィザードを実行するときに入力する必要のある値をリストしています。インストールの計画を立てるときに、WebSphere MQ サーバーのホスト名や、Community Console、Receiver、および Document Manager 用のポート番号などの必要なインストール情報を記録できます。

このセクションでは、以下のトピックについて説明します。

- 『ユーザー・アカウントの追加』
- 13 ページの『WebSphere MQ の構成』
- 14 ページの『DB2 のインストールおよび構成』
- 15 ページの『Oracle のインストールおよび構成』
- 16 ページの『プリインストール・チェックリスト表』

## ユーザー・アカウントの追加

データベースと接続する場合、Business Integration Connect には一組のオペレーティング・システムのユーザーが必要です。次の手順を実行し、オペレーティング・システムのユーザーをセットアップします。この手順ではデフォルト名を使用していますが、実際に使用するユーザー名やグループ名に置き換えることができます。お客様自身のグループ名およびユーザー名を使用する場合は、8 文字を超えることができないことに注意してください。

複数のマシン上に Business Integration Connect をインストールする場合は、ターゲット・マシン上のグループ ID (GID) およびユーザー ID (UID) が、他のすべてのマシン上のグループ GID およびユーザー UID に一致する必要があります。

次の手順では、Business Integration Connect のすべての機能とコンポーネントが、1 つのマシン上にインストールされていることを前提にしています。

ユーザー・アカウントを作成するには、以下のようになります。

1. Business Integration Connect ユーザーを含むグループを作成します。例えば、bcgroup とします。

Business Integration は、このグループのユーザーを使用して Business Integration Connect のコンポーネントを管理します。

2. ユーザーを作成します。

Business Integration Connect は、このユーザーを使用して、Business Integration Connect コンポーネントを管理します。インストール・ウィザードは、このユー

ザーとしてソフトウェアをインストールし、実行します。このユーザーは標準ユーザーであり、スーパーユーザーではありません。例えば、bcguser とします。

3. DB2 を使用する場合は、インストールするコンポーネントごとに、適切なユーザーを追加します。これらのユーザー ID は、DB2 サーバーでアクセス・データを制御するために必要です。

Community Console では、例えば、bcgcon とします。

Document Manager では、例えば bcgdoc とします。

Receiver では、例えば bcgrecev とします。

次のユーザーを bcgroup に追加します。bcguser、bcgcon、bcgdoc、および bcgrecev。

4. ユーザー名とパスワードを 16 ページの『プリインストール・チェックリスト表』の表に記録します。

## WebSphere MQ の構成

以下の手順では、インストール後に WebSphere MQ を構成する方法について説明します。適用する必要がある SupportPac およびアップデートのリストについては、1 ページの『プラットフォーム、ハードウェア、およびソフトウェアの要件』を参照してください。この手順で使用する特定のコマンドについては、WebSphere MQ の資料を参照してください。

**注:** デフォルトのキュー・マネージャー名は bcg.queue.manager、デフォルトのリスナー・ポートは 9999 です。これらのデフォルト値を変更する場合は、それらの値が使用されているすべての場所で確実に変更する必要があります。

WebSphere MQ を構成するには、以下のようにします。

1. 次のコマンドを入力して、ユーザーを mqm に変更します。

```
su - mqm
```

2. 次のように入力して、キュー・マネージャーを作成します。

```
crtmqm -q bcg.queue.manager
```

キュー・マネージャー構成ファイル *MQHomeInstallDir/mqm/qmgrs/bcg/qm.ini* の一番下に次の行を追加して、チャンネル・パラメーターを更新します。

```
Channels:  
  MaxChannels=1000  
  MaxActiveChannels=1000
```

MaxActiveChannels=1000 の下に空の行を入力して、構成ファイルの変更内容を保管します。

3. コンピューターに複数の CPU が存在する場合は、次のコマンドを入力します。

```
setmqcap <number of CPUs>
```

4. 次のコマンドでキュー・マネージャーを開始します。

```
strmqm bcg.queue.manager
```

5. 次のコマンドでリスナーを開始します。  

```
runmqlsr -t tcp -p 9999 -m bcg.queue.manager &
```
6. 約 10 秒間待ってから Enter を押して、コマンド・プロンプトに戻ります。
7. 次のように入力して、JMS Broker (パブリッシュ/サブスクライブ・ブローカー) を開始します。  

```
strmqbrk -m bcg.queue.manager
```
8. 次のコマンドで MQ コマンド・サービスを開始します。  

```
strmqcsv bcg.queue.manager
```
9. 次のように、Tools/MQSeries/create\_wbic\_queues.mqsc ファイルを使用して、キュー・マネージャーのキューおよびチャネルを定義します。  

```
runmqsc bcg.queue.manager <
<CD image>/Tools/MQSeries/create_wbic_queues.mqsc
```

<CD image> は、Business Integration Connect インストール CD のマウント・ロケーション、またはアンインストールされた Business Integration Connect インストール・ファイルのロケーションです。
10. 次のようにして、MQHomeInstallDir/mqm/java/bin/MQJMS\_PSQ.mqsc ファイルを使用して、JMS パブリッシュおよびサブスクライブ・キューを構成します。  

```
runmqsc bcg.queue.manager <
MQHomeInstallDir/mqm/java/bin/MQJMS_PSQ.mqsc
```
11. MQ ホスト名、キュー・マネージャー名、およびリスナー・ポートを 16 ページの『プリインストール・チェックリスト表』に記録します。

## DB2 のインストールおよび構成

実稼動環境で最高のパフォーマンスを引き出すには、Business Integration Connect データベースを専用サーバー上に置いてください。

WebSphere Business Integration Connect をインストールする場合は、Create\_db2.sql スクリプトを使用してデータベースを作成および構成できます。データベースは、DB2 UDB がマルチプロセッサ・マシン上で稼働していることを前提にして構成されます。特に、DFT\_DEGREE パラメーターは 4 に設定されます。これは、SQL 照会が並列動作の 4 個のサブプロセスとして実行されることを示します。DB2 UDB がシングル・プロセッサ・マシンで稼働している場合はこれが最適の構成ではなく、システム・メモリーと CPU の間で競合が発生する可能性があります。お客様のデータベース管理担当者と共にデータベースの構成を検討し、必要であれば変更を加えて個別のデータベース環境に適合させることをお勧めします。

既存の DB2 インストール・システムを変更する場合は、15 ページの『既存 DB2 インストール・システムの変更』を参照してください。

**注:** Business Integration Connect では分離ユーザー・オプションを使用しません。Business Integration Connect のインストールのときに、分離ユーザー ID を使用しないでください。

以下の手順に従って DB2 のインストールと構成を行います。

1. DB2 のインストール指示に従うか、DB2 Setup ウィザードを使用して、DB2 をインストールしてください。DB2 の特定のインストール指示については、DB2 の資料を参照してください。ウィザードを始動し、次の手順を実行します。
  - インストール・タイプを選択する画面で、「カスタム」インストールを選択します。次の画面で、「Application Development Toolkit」をデフォルトの選択に追加します。
  - 以後の画面では、デフォルト値を使用するか、ユーザー独自の値を使用します。インスタンス名、インスタンス所有者ユーザー ID、およびパスワードを調べ、このセクションの後半にある **Database Loader インストール・ウィザード**で必要とされる情報の表に記録します。
2. DB2 のインストールが完了したら、FixPackReadme.txt ファイルの指示に従って、FixPack2 をインストールします。
3. DB2 が稼働していない場合は、次のコマンドを実行して始動させます。

```
db2start
```

4. 正しい C++ コンパイラーがインストール済みであることを確認します。必要なパッケージ名およびバージョンについては、DB2 Application Development Toolkit の資料を参照してください。

**注:** C++ コンパイラー・システム環境変数をエクスポートして SQL を適正に実行し、ストアード・プロシージャを作成する必要があります。

## 既存 DB2 インストール・システムの変更

既存のインストール・システムを使用する場合は、次のようにしてください。

1. DB2 Application Development Toolkit がインストール済みであることを確認します。ツールキットのインストール方法については、DB2 の資料を参照してください。
2. include ディレクトリーが存在することを確認します。例えば、

```
DB2HomeInstallDir¥IBM¥SQLLIB¥include
```
3. 正しい C++ コンパイラーがインストール済みであることを確認します。必要なパッケージ名、バージョンなどについては、DB2 Application Development Toolkit の資料を参照してください。

**注:** C++ コンパイラー・システム環境変数をエクスポートして SQL を適正に実行し、ストアード・プロシージャを作成する必要があります。

すばやく参照するために、16 ページの『プリインストール・チェックリスト表』の表にある名前およびパスワードを記録しておきます。特に、デフォルト値を変更した場合は、デフォルト値も記録しておきます。

## Oracle のインストールおよび構成

本書には Oracle 9i のインストール手順の説明はありません。Oracle 9i のインストール手順については、該当する Oracle の資料を参照してください。

IBM では、Oracle のインストール中に、このセクションのガイドラインに従うことをお勧めします。

1. Oracle のインストール資料の説明に従って、Oracle システム環境変数をエクスポートします。Database Loader が、Business Integration Connect のインストール・プロセス中に自動的に SQL を実行する場合、root/管理者ユーザーにとってこの作業が必要になります。
2. ハブ・コンポーネントを実行するそれぞれのマシンで、Oracle 9i JDBC ドライバーを使用可能にする必要があります。JDBC ドライバーは、インストール済みの Oracle バージョンと同じレベルでなければなりません。

ユーザー名とパスワードを 16 ページの『プリインストール・チェックリスト表』の表に記録します。特に、デフォルト値を変更した場合は、デフォルト値も記録しておきます。

## プリインストール・チェックリスト表

以下の作業は、Business Integration Connect のインストール前に実行しておく必要があります。

**注:** 以下の作業は、単一マシンに対するインストールを前提にしています。

1. ユーザー・グループ `bcggroup` をオペレーティング・システムに作成します。オペレーティング・システムのユーザー `bcguser` を作成し、`bcggroup` のメンバーにします。DB2 を使用する場合は、オペレーティング・システム・ユーザー `bcgcon`、`bcgdoc`、および `bcgrezv` をすべて作成し、`bcggroup` のメンバーにします。Oracle を使用する場合は、オペレーティング・システム・ユーザー `bcgcon`、`bcgdoc`、および `bcgrezv` は不要です。
2. DB2 または Oracle をサーバーにインストールし、構成します。
3. WebSphere MQ をサーバーにインストールし、構成します。
4. SMTP サーバーを作成します (オプション)。
5. 複数のコンピューター接続形態を使用する場合は、共用ネットワーク・ストレージ (NAS、NFS など) を各コンピューターにインストールし、構成します。

次の表に、Database Loader および Business Integration Connect インストール・ウィザードを開始する前に用意しておく必要のある情報を示します。インストール・ウィザードを実行するときに、この表を参照してください。

必須情報	値
Business Integration Connect のユーザー名	(デフォルトは <code>bcguser</code> )
Business Integration Connect のユーザー・パスワード	
Business Integration Connect のグループ名	(デフォルトは <code>bcggroup</code> )
Community Console のユーザー名	(デフォルトは <code>bcgcon</code> )
Community Console のユーザー・パスワード	
Community Console のポート番号	(HTTP - デフォルトは 58080) (HTTPS - デフォルトは 58443)
Document Manager のユーザー名	(デフォルトは <code>bcgdoc</code> )

必須情報	値
Document Manager のユーザー・パスワード	
Document Manager のポート番号	(HTTP - デフォルトは 56080) (HTTPS - デフォルトは 56443)
Receiver のユーザー名	(デフォルトは bcgrece)
Receiver のユーザー・パスワード	
Receiver のポート番号	(HTTP - デフォルトは 57080) (HTTPS - デフォルトは 57443)
WebSphere MQ ホスト名	
WebSphere MQ キュー・マネージャー	(デフォルトは bcg.queue.manager)
リスナー用の WebSphere MQ ポート	9999
共用ロケーションのマウント・ポイント	
データベース・ホスト名	
データベース・ポート	(デフォルト・インスタンスを使用している場合のデフォルトは DB2=50000)(Oracle=1521)
データベース所有者 (DB2)	
所有者のパスワード (DB2)	
データベース名 (DB2)	
インスタンス名 (DB2)	
管理者ログイン ID (Oracle)	
管理者パスワード (Oracle)	
Oracle SID (Oracle)	
スキーマ所有者ログイン (Oracle)	
スキーマ所有者パスワード (Oracle)	
SMTP ホスト名	
SMTP ポート番号	(デフォルトは 25)

## Business Integration Connect のインストール

前のセクションで記述された前提条件をすべて満たしていると、Database Loader および WebSphere Business Integration Connect の各インストール・ウィザードを実行することができます。

### DISPLAY 環境変数

Database Loader とハブのインストール・ウィザードでは、UNIX の X Windows システムを使用してグラフィカル・ユーザー・インターフェースを表示します。X Windows システムでは、DISPLAY 環境変数をシステム環境にエクスポートする必要があります。以下のコマンド行により、DISPLAY 環境変数を Bourne シェルからの IP\_Address に設定します。

```
DISPLAY=IP_Address:0.0
```

```
export DISPLAY
```

シェルに適切な構文を使用して DISPLAY 環境変数を設定します。

**注:** xclock などの X クライアント・プログラムをコマンド行から実行して、DISPLAY システム環境変数と X Windows システムが正常に構成されていることを検査してください。xclock クライアントが X Server ウィンドウ (ローカルまたはリモート) に表示されれば、ウィザードも正常に表示されます。

## LaunchPad

Business Integration Connect には、製品概要、ReadME ファイル、製品資料、データベース・ローダー、および Business Integration Connect Installer に対するワンストップ・アクセスを提供するランチパッド・プログラム (図 2 を参照) が用意されています。別の方法として、提供されている setup\*. \* プログラムを使用して、データベース・ローダーおよびインストール・プログラムを始動することもできます。19 ページの『データベースの作成』および 27 ページの『インストール・ウィザードによるコンポーネントのインストール』を参照してください。

**注:** ランチパッドのオプションの中には、ブラウザーがインストールされ、システム・パスで使用可能になっていることを必要とするものがあります。

ランチパッド実行可能ファイルは、以下に配置されています。

```
{CD_ROM/MEDIA DIR}/LaunchPad.*
```

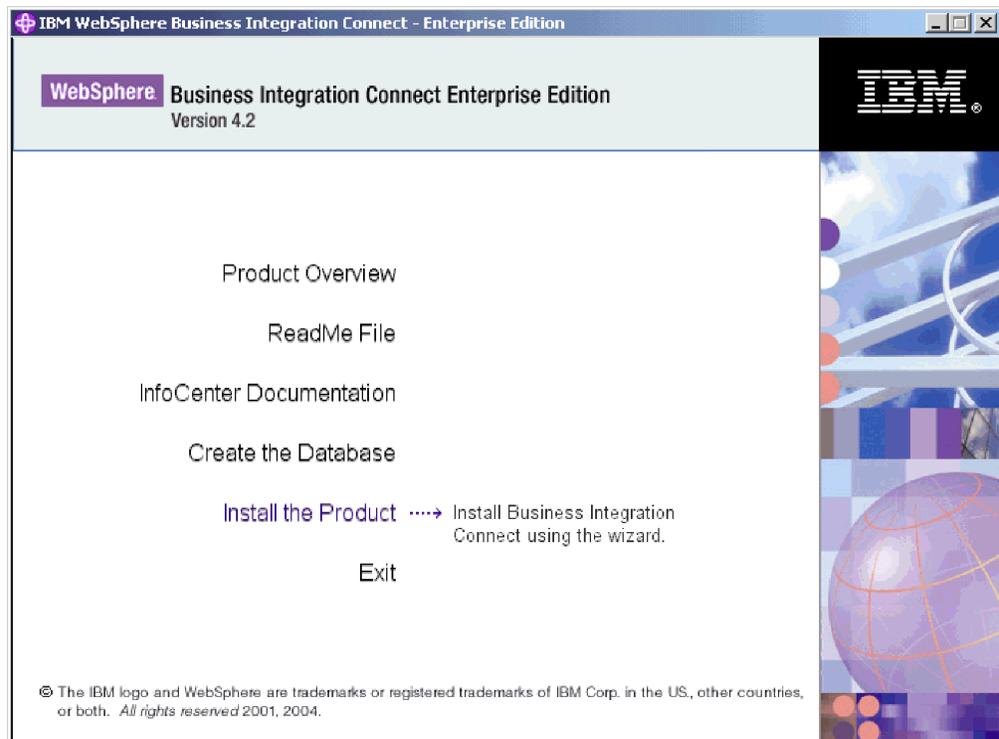


図 2. ランチパッド画面

## データベースの作成

Business Integration Connect には、データベース表をセットアップするインストール・ウィザードが含まれています。Database Loader ウィザードは、情報を収集して、表を作成し、表にデータを取り込んでくれます。また、表を作成するために使用する SQL ファイルを保存することもできます。その後、SQL ファイルを使用して表を作成し、データを取り込むことも可能です。SQL ファイルを手動で実行することにより、データベース管理者は、データを取り込む前にデータベース表を検討できます。

始める前に、ご使用のデータベース・サーバーがインストールされ、正しく構成され、稼働しているかどうかを検証します。

**注:** SQL が自動的に実行される場合は、データベースが常駐するのと同じサーバーで Database Loader を実行する必要があります。これにより、正しいホスト・アドレスが、データベースに対して設定されることが保証されます。

以下の手順では、Database Loader GUI を使用してデータベースを構成する方法について説明します。GUI を使用せずに Database Loader をインストールすることもできます。詳しくは、40 ページの『コマンド行によるコンポーネントのインストール』を参照してください。

データベース表をセットアップするには、次の手順を実行します。

1. root 管理者としてログインします。
2. Database Loader では、SQL を自動的に実行して表スペース・ディレクトリーの所有権を作成/変更するために、管理者特権が必要です。
3. Database Loader ディレクトリーから、ユーザーのプラットフォームに特定の表 5 にリストされているセットアップ実行可能ファイルを実行します。

```
cd DBLoader
```

表 5. インストーラー用のプラットフォーム固有の実行可能ファイル

プラットフォーム	実行可能ファイル
Linux	setupLinux
AIX	setupAIX
Solaris	setupSunOS

Database Loader ウィザードが始動し、「ようこそ」画面が表示されます。「次へ」をクリックして先へ進みます。

4. 「ソフトウェア・ライセンス契約 (Software License Agreement)」画面で、ソフトウェア・ライセンス契約を読みます。契約条件に同意する場合は、「**ライセンス契約の条件に同意します。(I accept the terms of the license agreement)**」を選択します。「次へ」をクリックして先へ進みます。
5. 「ディレクトリー名」画面で、データベースをセットアップするときに Database Loader が使用するディレクトリーのパスおよびディレクトリー名を入力します。埋め込みスペースや特殊文字は、ディレクトリー名に使用しないでください。20 ページの図 3 を参照してください。

データベースおよびデータベースに格納されるすべてのアプリケーション・データのために十分なスペースがあるロケーションを選択します。「次へ」をクリックして先へ進みます。

**注:** ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「ファイル名を入力 (Enter file name)」フィールドに「.」を1つ入力してください。「.」を入力しないと、「ディレクトリーを選択 (Select a directory)」画面から、この画面を起動した画面に戻りません。

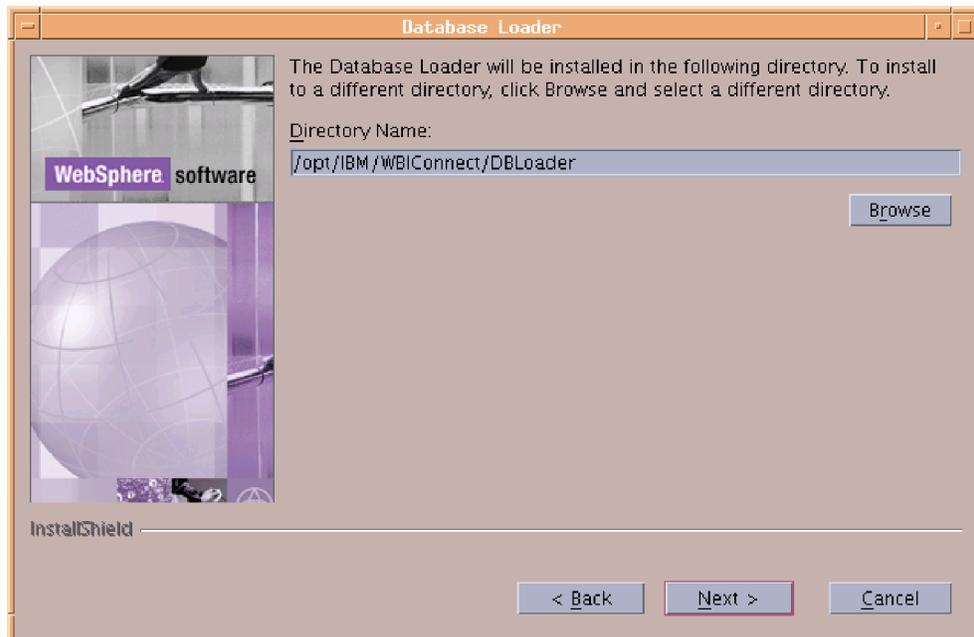


図3. 「ディレクトリー名」画面

6. 「データベース・タイプの選択 (Database Type Selection)」画面で、Business Integration Connect に使用するデータベース・サーバーを選択します。「次へ」をクリックして先へ進みます。21 ページの図4 を参照してください。



図4. 「データベース・タイプの選択 (Database Type Selection)」画面

7. 「データベース情報」画面 (22 ページの図5) で、次のデータベース情報を入力し、入力を終了してから「次へ」をクリックします。

**DB2:**

- データベース名
- インスタンス名
- グループ名
- 所有者名
- 所有者のパスワード

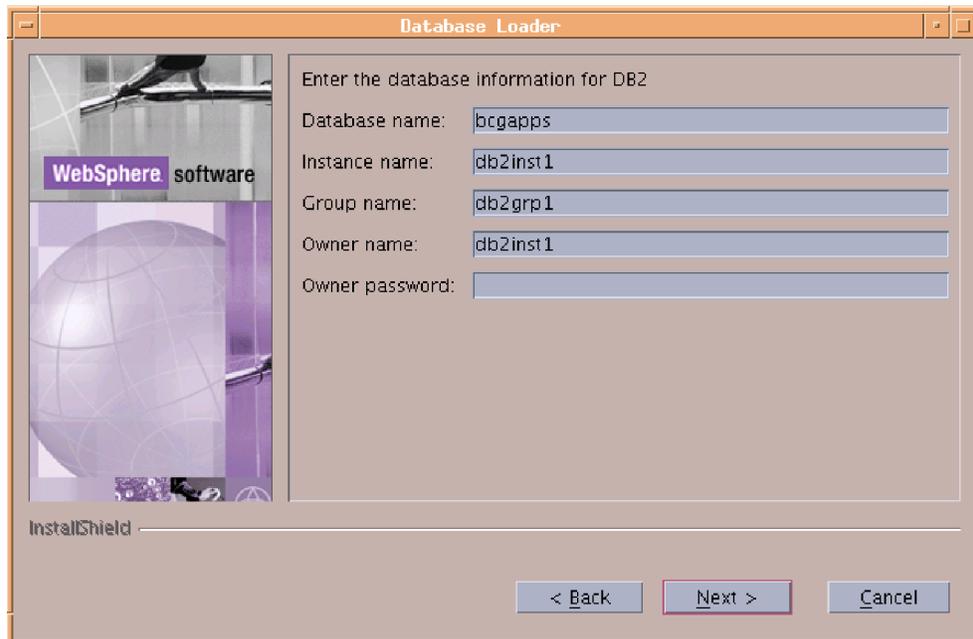


図5. 「DB2 データベース情報 (DB2 Database Information)」画面

**Oracle** の場合:

- 管理者ログイン ID
- 管理者パスワード
- Oracle SID
- スキーマ所有者ログイン
- スキーマ所有者パスワード

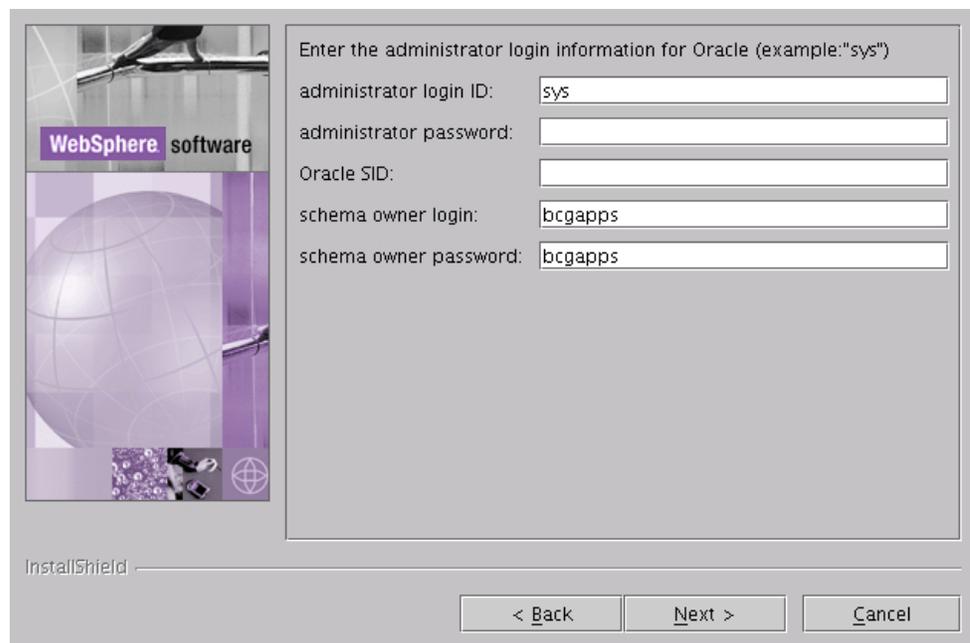


図 6. 「Oracle データベース情報 (Oracle Database Information)」画面

8. 「データベース・ロケーション (Database Location)」画面 (24 ページの図 7) で、データベース・サーバー上のデータベースおよびデータベースの各表スペースのロケーションの絶対パスを入力します。例えば、DB2 データベースのディレクトリー・パスは、次のようになります。

*DB2Home/IBM/WBICconnect/DBLoader/tables*

**注:** ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「ファイル名を入力 (Enter file name)」フィールドに「.」を 1 つ入力してください。「.」を入力しないと、「ディレクトリーを選択 (Select a directory)」画面から、この画面を起動した画面に戻りません。

これらの値のいずれかを変更した場合、SQL ファイルを実行する前に、それらの値がなければなりません。それらの値がない場合は、それらを手動で作成する必要があります。

必須情報を入力したら、「次へ」をクリックします。

**注:** データベースとすべてのアプリケーション・データを保持するのに十分なスペースのあるファイル・システム・ロケーションを選択します。データベースのサイズは、Business Integration Connect の稼動中に大きくなります。

## DB2:

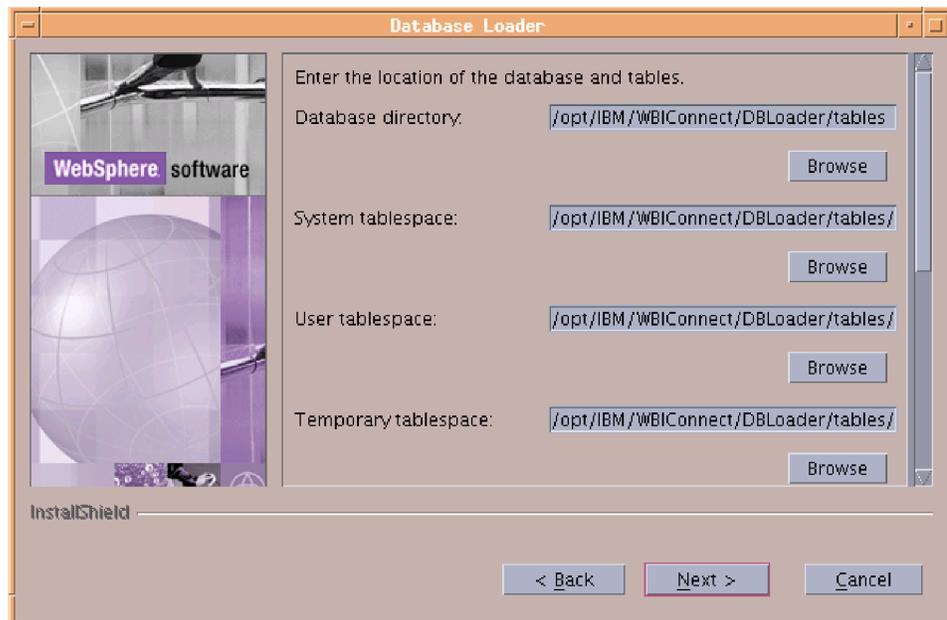


図7. 「DB2 データベース・ロケーション (DB2 Database Location)」画面

## Oracle の場合:

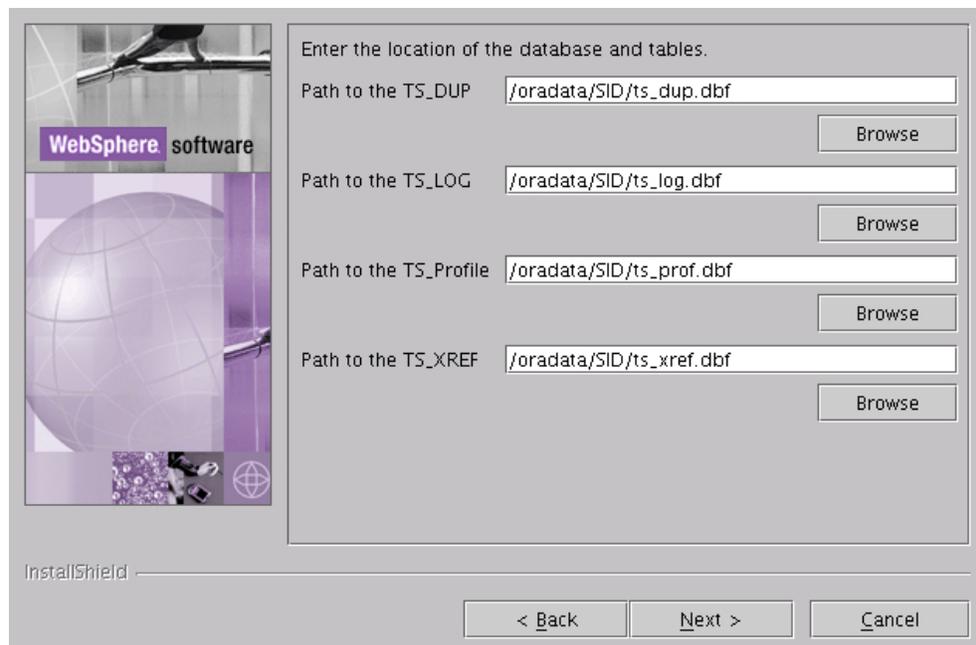


図8. 「Oracle データベース・ロケーション (Oracle Database Location)」画面

9. 「コンポーネントの構成 (Component Configuration)」画面 (25 ページの図9) で、Business Integration Connect コンポーネントのログイン情報、および共通の

共用ファイルのロケーションを入力します。完了したら「次へ」をクリックします。

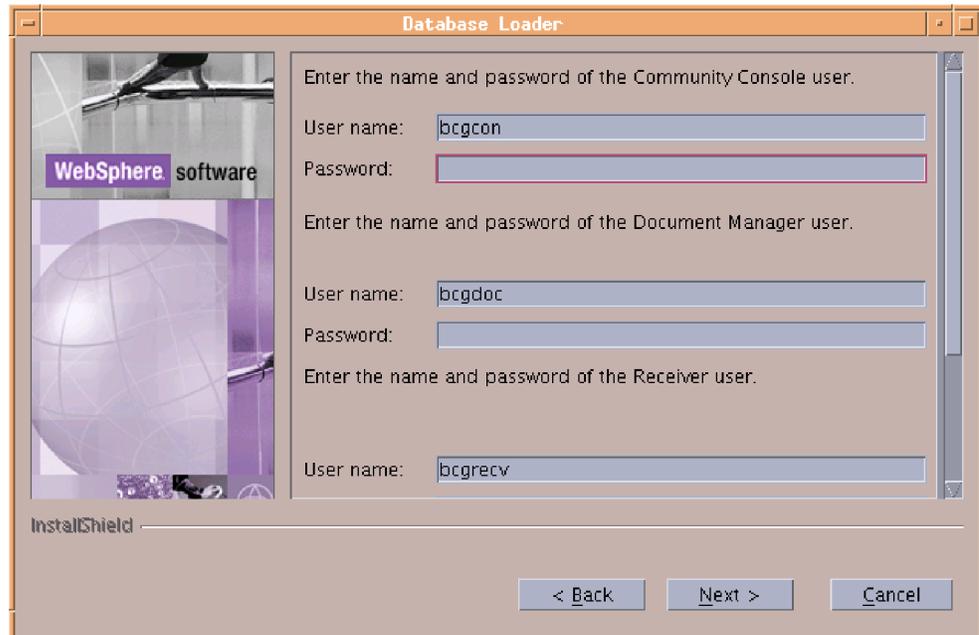


図9. 「コンポーネントの構成 (Component Configuration)」画面

Community Console、Document Manager、および Receiver の「ユーザー名」と「パスワード」の各テキスト・ボックスで、各コンポーネントについて、ユーザーの名前とパスワードを入力します。これらのユーザーは、サーバーを構成したときに作成されました。

「グループ名」テキスト・ボックスには、Business Integration Connect ユーザーを含むグループの名前を入力します。

システムが、共用情報のマウント・ポイント画面を表示します。

10. Business Integration Connect の主要コンポーネントが使用する共通の共用ファイルのロケーションを入力します。

**注:** ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「ファイル名を入力 (Enter file name)」フィールドに「。」を1つ入力してください。「。」を入力しないと、「ディレクトリーを選択 (Select a directory)」画面から、この画面を起動した画面に戻りません。

11. 「要約」画面が表示されます。Database Loader のインストール先を示している「要約」画面の情報を確認します。このロケーションが誤っている場合は、「戻る」をクリックして、前の画面へ戻ります。「要約」画面の情報が正しい場合は、「次へ」をクリックします。
12. ウィザードには、Database Loader が SQL ファイルの作成のみを行うようにするか、SQL ファイルを作成してから実行するようにするかを選択できる画面が表示されます。26 ページの図 10 を参照してください。

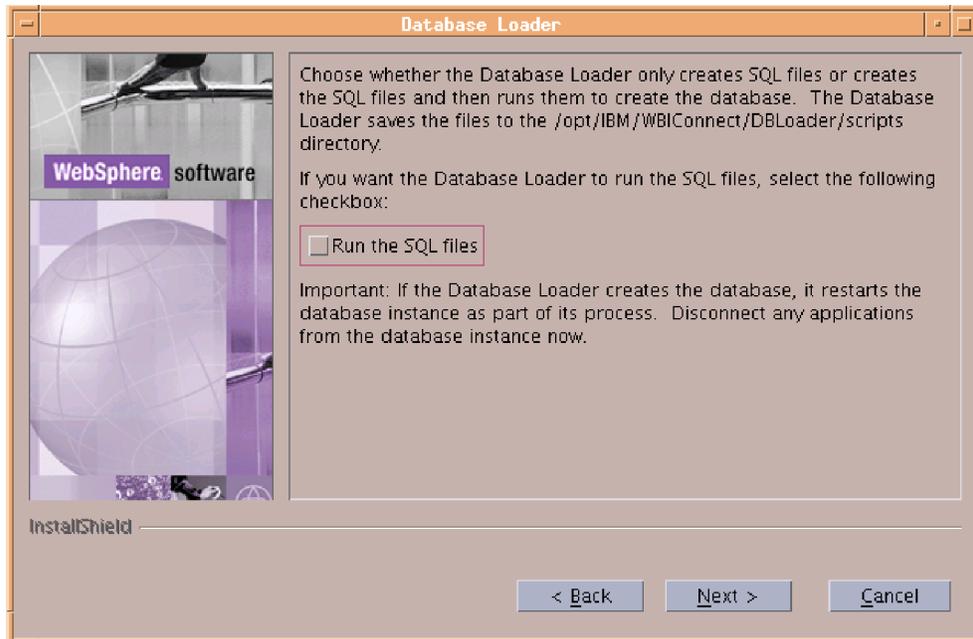


図 10. 「SQL ファイルの実行」画面

Database Loader が SQL ファイルを実行する場合は、次の作業を行います。

- 表スペースの作成
- スキーマの作成
- 表、ビュー、シーケンス、プロシージャ、および関数を作成し、それらにメタデータを取り込む
- 表への許可の割り当て
- ストアード・プロシージャの作成

Database Loader はルーチンの一部として DB2 インスタンスを再始動します。このため、Business Integration Connect データベースをセットアップする DB2 インスタンスを使用しているすべてのアプリケーションを切断する必要があります。

Database Loader にファイルを実行させたい場合は、「SQL ファイルの実行」チェック・ボックスにチェックマークを付けてください。

完了したら「次へ」をクリックします。

13. 「完了」ボタンが使用可能になったら、「完了」をクリックします。
14. SQL を手動で実行する場合の詳細については、SQL ディレクトリー (Database Loader インストール・ウィザードでインストールされる) にある Instructions.txt ファイルを参照してください。

Business Integration Connect データベースのセットアップが完了すると、Business Integration Connect のコンポーネントをインストールすることができます。

以下のセクションでは、InstallShield ウィザード GUI を使用してコンポーネントをインストールする方法について説明します。コンポーネントは、GUI を使

用しなくてもインストールできます。詳しくは、40 ページの『コマンド行によるコンポーネントのインストール』を参照してください。

## インストール・ウィザードによるコンポーネントのインストール

Business Integration Connect には、Community Console、Receiver、および Document Manager の 3 つの主要なコンポーネントがあります。3 つのコンポーネントはすべて、共通のコンテンツを共有します。単一サーバーにコンポーネントと共通コンテンツをインストールすることも、別々のサーバーに各コンポーネントをインストールすることも、これらの 2 つのオプションを組み合わせることもできます。最低でも 1 つのサーバーに、各コンポーネントの 1 つのインスタンスをインストールする必要があります。さまざまなコンポーネントを別々のサーバーに配置する計画の立て方については、4 ページの『環境の計画』および 8 ページの『接続形態』を参照してください。

**注:** 複数のマシンに Business Integration Connect をインストールする場合は、すべてのマシンの共有 common フォルダーで、同じマウント・ポイントとディレクトリ構造を使用する必要があります。

開始する前に、前提条件ソフトウェアのインストールと構成が正しく行われていることを確認してください。ソフトウェアの前提条件については、1 ページの『プラットフォーム、ハードウェア、およびソフトウェアの要件』の、すべての Business Integration Connect サーバーの要件についての表を参照してください。また、ソフトウェアの構成方法については、11 ページの『インストールの概要』を参照してください。また、Business Integration Connect データベースのセットアップも完了している必要があります。詳しくは、19 ページの『データベースの作成』を参照してください。最後に、キュー・マネージャーとリスナーを含め、ご使用のデータベース・サーバーと WebSphere MQ が稼動している必要があります。

統合接続形態を使用する場合以外は、共通コンポーネントは 1 度しかインストールする必要はありません。

**注:** Linux プラットフォームを使用する場合は、次のステップに従ってメモリー・リークを防止してください。

- a. データベース・サーバー上で、最大セマフォ・カーネル・パラメーターを 32000 から 256000 に変更します。
- b. Linux カーネルを 2.4.9-e.27 以上にアップグレードします。

Business Integration Connect をインストールするには、以下のようになります。

1. root としてログインします。

ハブ・インストーラーでは、ネイティブ・ソフトウェア・レジストリーと統合するために、root/管理者特権が必要です。

2. ハブ・ディレクトリーで、ユーザーのプラットフォームに固有の 28 ページの表 6 にリストされているセットアップ実行可能ファイルを実行します。

cd hub

表6. インストーラー用のプラットフォーム固有の実行可能ファイル

プラットフォーム	実行可能ファイル
Linux	setupLinux
AIX	setupAIX
Solaris	setupSolaris

ウィザードが始動し、「ようこそ」画面が表示されます。「次へ」をクリックして先へ進みます。

3. 「ソフトウェア・ライセンス契約 (Software License Agreement)」画面で、ライセンス契約を読みます。契約条件に同意する場合は、「**ライセンス契約の条件に同意します。(I accept the terms of the license agreement)**」をクリックします。「次へ」をクリックして先へ進みます。
4. 「ディレクトリー名」画面 (図 11) で、Business Integration Connect をインストールするときにウィザードが使用するディレクトリーのパスと名前を入力します。埋め込みスペースや特殊文字は、ディレクトリー名に使用しないでください。「次へ」をクリックして先へ進みます。

**注:** ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「**ファイル名を入力 (Enter file name)**」フィールドに「**.**」を 1 つ入力してください。「**.**」を入力しないと、「**ディレクトリーを選択 (Select a directory)**」画面から、この画面を起動した画面に戻りません。

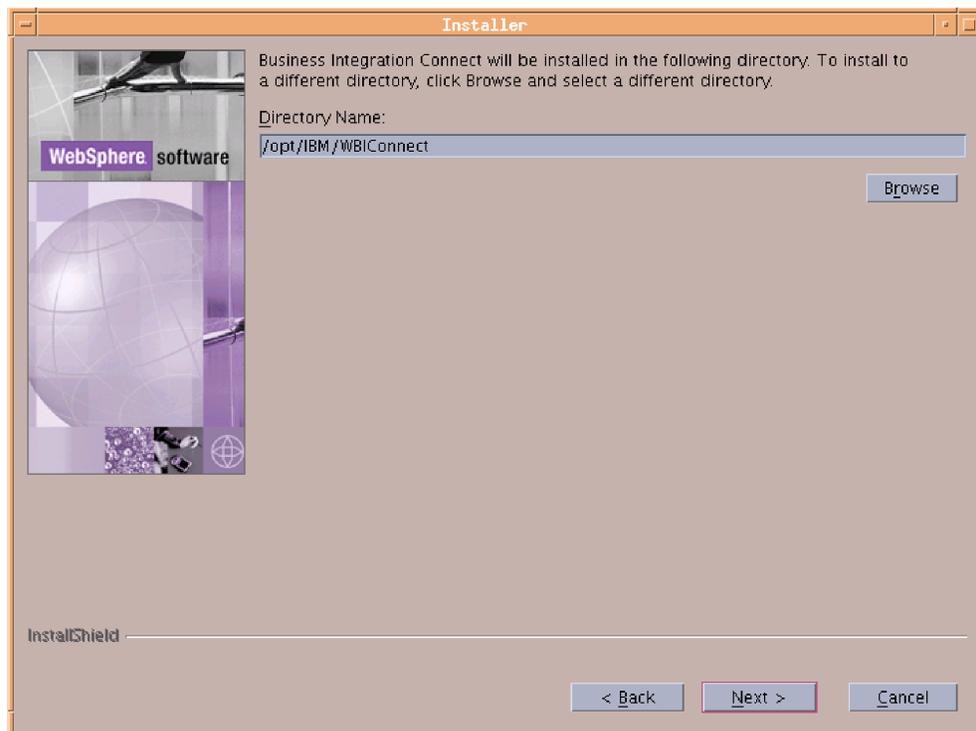


図 11. 「ディレクトリー名」画面

5. 「コンポーネント選択」画面 (図 12) で、サーバーにインストールするコンポーネントを選択します。複数のコンポーネントを選択できます。「次へ」をクリックして先へ進みます。

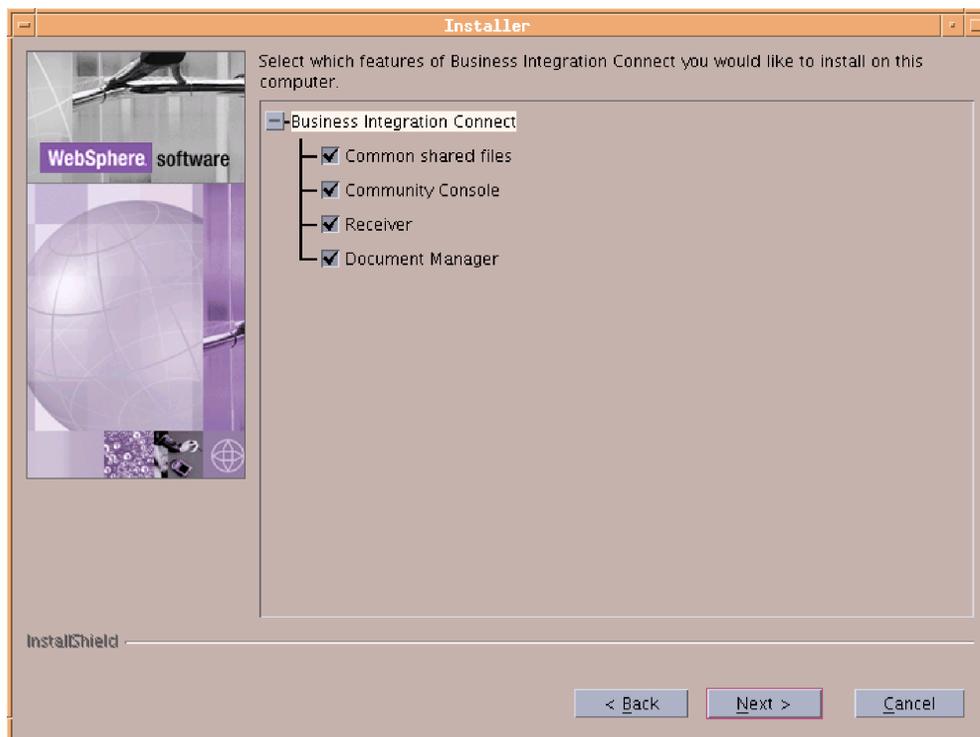


図 12. 「コンポーネント選択」画面

残りの手順では、すべてのコンポーネントをサーバーにインストールすることを前提に説明します。すべてのコンポーネントをインストールしない場合、残りの手順で説明する一部の画面は表示されません。

6. 「データベース・サーバーの選択 (Database Server Selection)」画面 (30 ページの図 13) で、使用するデータベース・サーバーを選択します。DB2 8.1.2 以降、または Oracle 9i.9.2.0 以降を選択できます。「次へ」をクリックして先へ進みます。

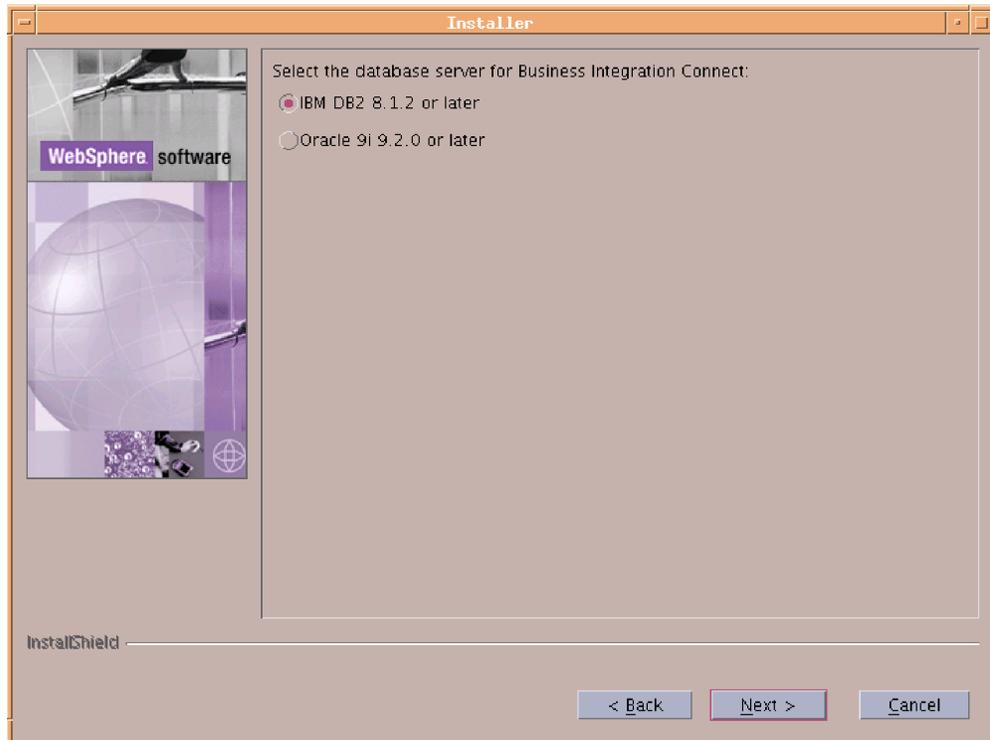


図 13. 「データベース・サーバーの選択 (Database Server Selection)」画面

7. 「データベース情報」画面が表示されます。データベース・サーバーとして DB2 を選択した場合は、この手順の DB2 に固有な指示に従ってください。データベース・サーバーとして Oracle を選択した場合は、この手順の Oracle に固有な指示に従ってください。

#### **DB2:**

DB2 を選択した場合は、「DB2 データベース情報 (DB2 Database Information)」画面が表示されます。31 ページの図 14 を参照してください。

現行システムに DB2 がインストールされていない場合は、DB2 を稼働するコンピュータのホスト名を、「localhos」から DB2 を含むシステムの名前に置き換えることによって入力します。

「ポート」テキスト・フィールドで、DB2 インスタンスが使用するポート番号を入力します。DB2 インスタンスが使用するポートを調べるには、DB2 Control Center (GUI) を使用してプロパティを確認するか、DB2 構成コマンド、`db2 get dbm cfg` をコマンド・プロンプトに入力します。この DB2 構成情報は、Database Loader によって、`system temp/WBICconnect/logs` ディレクトリーにも保管されています。デフォルトのポートは 50000 です。

「ユーザー名」、「パスワード」、「データベース名」、および「インスタンス名」の各テキスト・フィールドで、所有者名、所有者のパスワード、データベース名、およびインスタンス名をそれぞれ入力します。これらは、データベースを定義するために、Database Loader のインストールで使用された名前です。19 ページの『データベースの作成』を参照してください。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

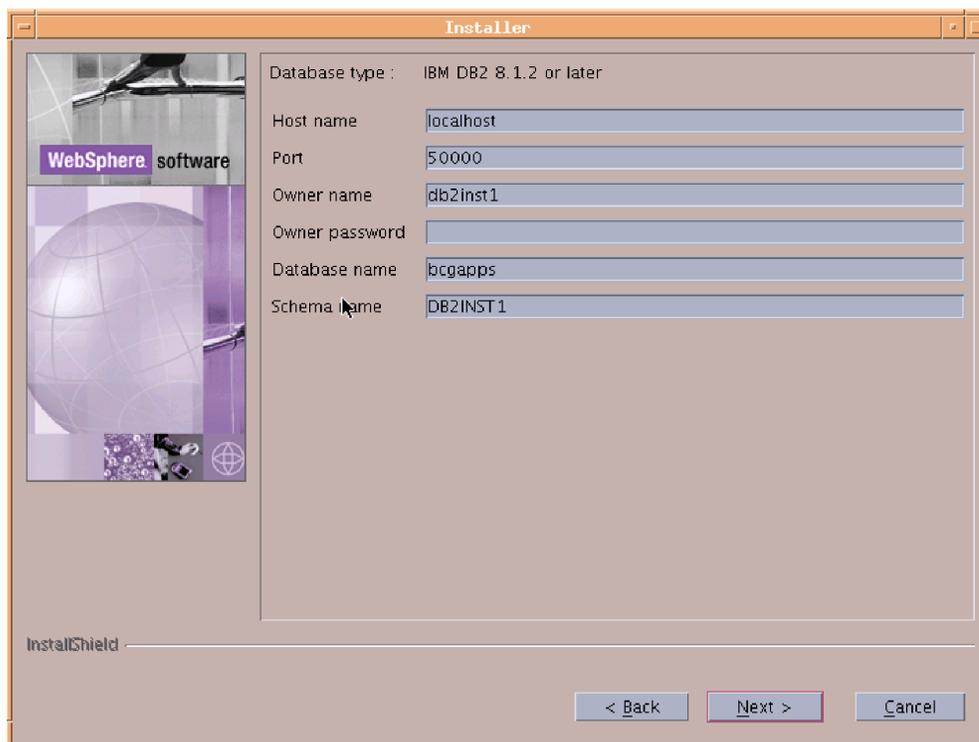


図 14. 「DB2 データベース情報 (DB2 Database Information)」画面

#### Oracle の場合:

Oracle を選択すると、「データベース情報」画面が表示されます。32 ページの図 15 を参照してください。

Oracle データベースに関する必須情報を入力します。デフォルトのポートは 1521 です。

JDBC ドライバーの絶対パスと名前は、このコンピューター上のドライバーの正しいバージョンを指し示している必要があります。ドライバーは、Oracle 9i インストール・ディレクトリーにあります。ドライバーは、<http://otn.oracle.com/software/tech/java/sqlj-jdbc/index.html> からダウンロードできます。「JDBC Driver Downloads」のセクションで、「Oracle 9i Release 2 drivers」をクリックします。必ず、稼働する Oracle 9i (9.2.0) サービス・バージョンに一致するドライバー・バージョンを選択してください。

**注:** ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「ファイル名を入力 (Enter file name)」フィールドに「.」を 1 つ入力してください。「.」を入力しないと、「ディレクトリーを選択 (Select a directory)」画面から、この画面を起動した画面に戻りません。

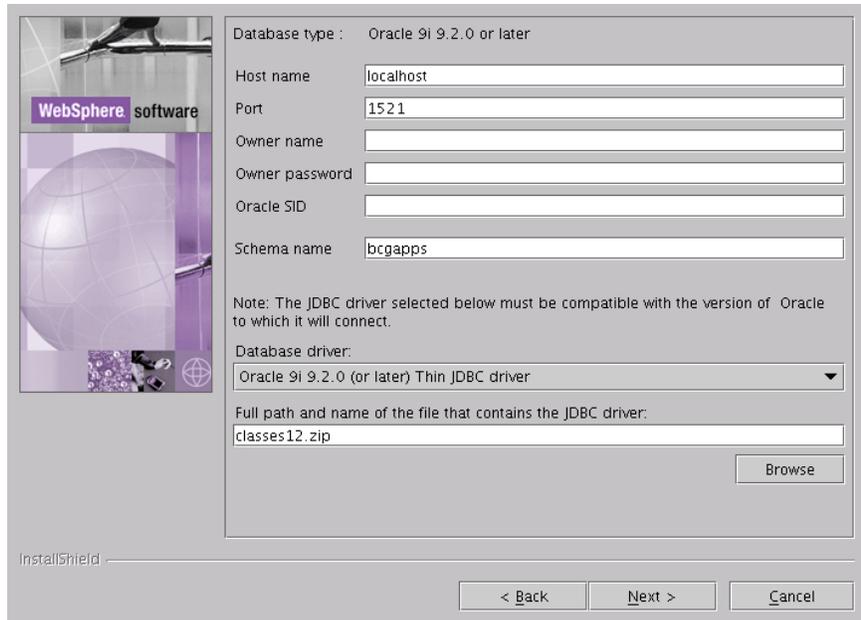


図 15. 「Oracle データベース情報 (Oracle Database Information)」画面

「データベース接続確認 (Database Connection Confirmation)」画面が表示されます。図 16 を参照してください。接続が正常に行われた場合、「Table (表)」、「ビュー (View)」、「関数 (Function)」、および「プロシージャ (Procedure)」のカウンタ情報に注意し、確認します。接続が失敗した場合は、情報画面の指示を検討するか、データベース資料を参照するかしてエラー・コードに対応します。33 ページの図 17 を参照してください。

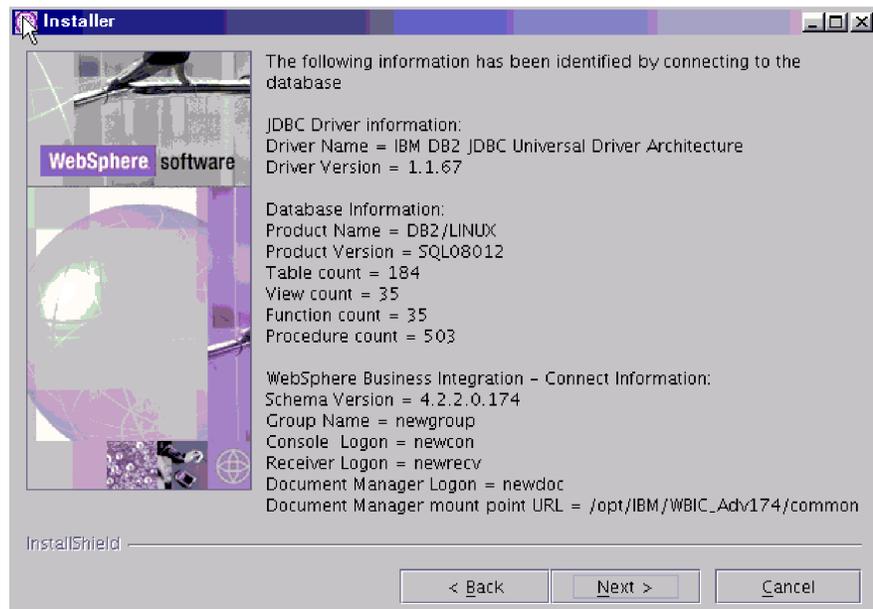


図 16. 「データベース接続確認 (Database connection confirmation)」画面

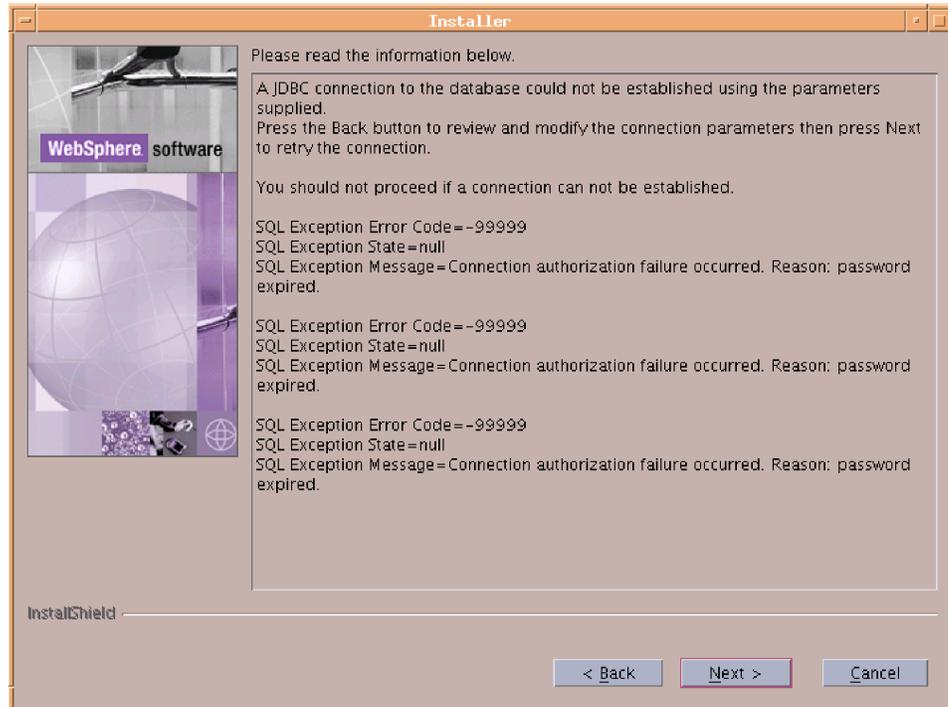


図 17. 「データベース接続失敗 (Database connection failure)」画面

8. 「ユーザー情報 (User Information)」画面で、インストールの責任を持つ管理者のユーザー名、パスワード、およびグループ名を入力します。

**注:** この情報は、Database Loader のインストール時に使用した情報と一致する必要があります。

9. 「共通情報ディレクトリー」画面で、コンポーネントによって共用される共通情報の場所を入力します。「次へ」をクリックして先へ進みます。

**注:** ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「ファイル名を入力 (Enter file name)」フィールドに「。」を 1 つ入力してください。「。」を入力しないと、「ディレクトリーを選択 (Select a directory)」画面から、この画面を起動した画面に戻りません。

10. WebSphere MQ がこのコンピューターにインストールされていない場合、「WebSphere MQ Server」画面 (34 ページの図 18) で、WebSphere MQ が稼働しているコンピューターのホスト名を入力します。デフォルト名を使用しなかった場合は、必ず、キュー・マネージャーの名前を変更してください。34 ページの図 18 を参照してください。

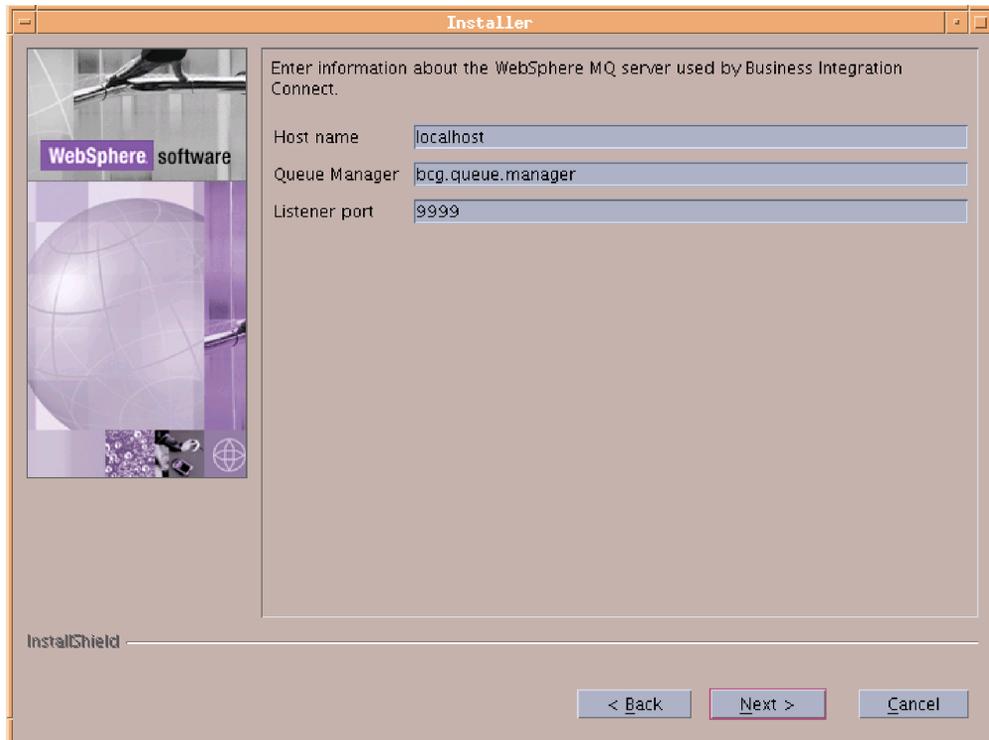


図 18. 「WebSphere MQ Server」画面

WebSphere MQ が現在のマシンに収容されていない場合は、「ホスト名」テキスト・ボックスで、「localhost」を WebSphere MQ が収容されているシステム名に置き換えます。

「キュー・マネージャー」テキスト・ボックスで、デフォルト名を、WebSphere MQ を構成するときに使用した名前に置き換えます (13 ページの『WebSphere MQ の構成』の 2 を参照)。

「リスナー・ポート」テキスト・ボックスには、リスナーが使用するポートを入力します (13 ページの『WebSphere MQ の構成』を参照)。デフォルトのポートは 9999 です。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

11. Community Console のインストールを選択した場合は、「Community Console の構成 (Community Console configuration)」画面を使用して構成します。35 ページの図 19 を参照してください。

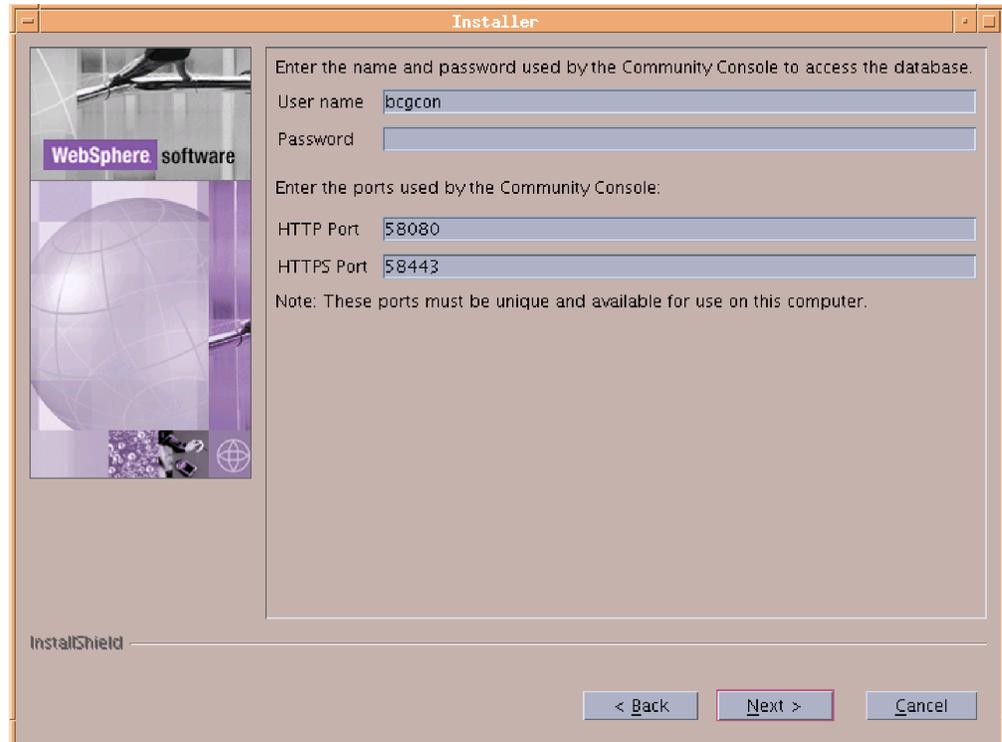


図 19. 「Community Console の構成 (Community Console configuration)」画面

「ユーザー名」テキスト・ボックスで、Community Console コンポーネントがデータベースにログインするときに使用するユーザー ID を入力します。

「パスワード」テキスト・ボックスには、ユーザー名に関連したパスワードを入力します。必ず正しいパスワードを入力してください。パスワードが間違っていると、Community Console は動作しません。

「HTTP ポート (HTTP port)」テキスト・ボックスで、コンポーネントがメッセージを listen するポートの名前を入力します。Community Console、Receiver、および Document Manager には固有のポート番号が割り当てられ、それらのポートはこのコンピューターで使用可能な状態になっている必要があります。デフォルトのポートは 58080 です。

「HTTPS ポート (HTTPS port)」テキスト・ボックスで、コンポーネントがメッセージを listen するセキュア・ポートの名前を入力します。Community Console、Receiver、および Document Manager には固有のポート番号が割り当てられ、それらのポートはこのコンピューターで使用可能な状態になっている必要があります。デフォルトのポートは 58443 です。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

**注:** データベース接続が失敗すると、データベース情報画面が表示されます。データベース情報画面の指示を検討するか、データベース資料を参照して、エラー・コードに対応します。

12. Receiver コンポーネントまたは Document Manager コンポーネントを選択した場合は、それぞれの構成画面を使用して構成します。これらの画面には、

「Community Console の構成 (Community Console Configuration)」画面と同じフィールドがあります。3 つのコンポーネント (Community Console、Receiver、および Document Manager) すべてで、別々の HTTP ポートと HTTPS ポートを使用する必要があります。図 20 および 37 ページの図 21 を参照してください。

**注:** 別々のマシンに Receiver と Document Manager をインストールする場合は、Receiver マシンに Document Manager マシンによって解決可能なホスト名を付ける必要があります。

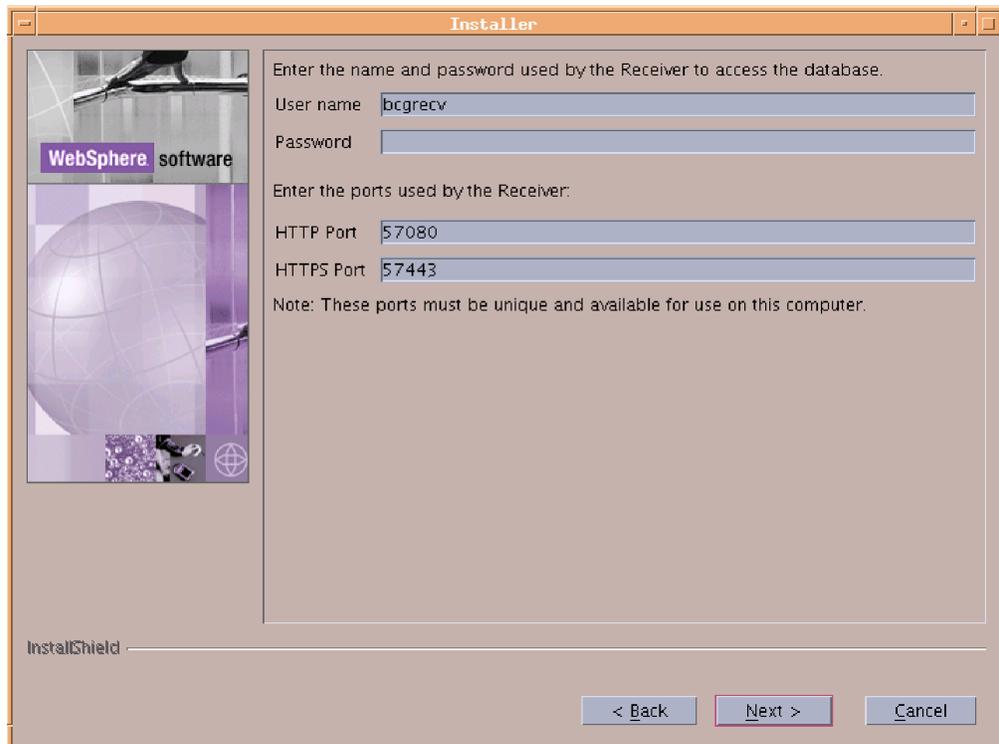


図 20. 「Receiver の構成 (Receiver Configuration)」画面

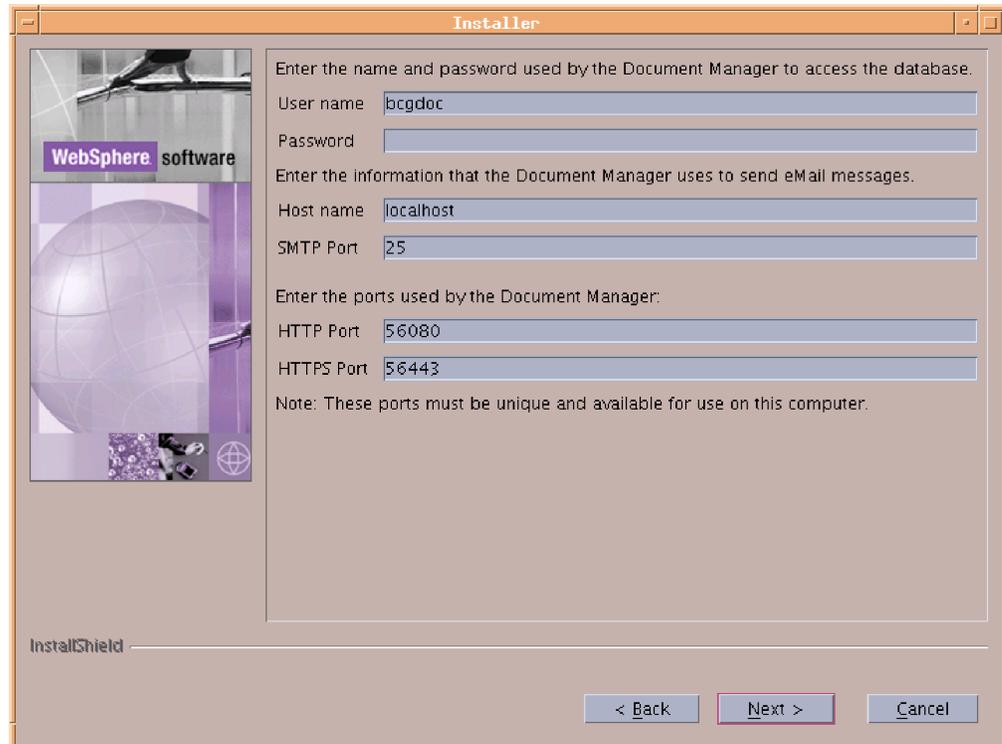


図 21. 「Document Manager の構成 (Document Manager Configuration)」画面

13. 「RosettaNet の構成 (RosettaNet Configuration)」画面 (38 ページの図 22) で、RosettaNet メッセージの連絡先情報を入力します。正しい値がわからない場合は、必須のデフォルト値を使用します。この情報は、RosettaNet を使用する場合に必要であり、すべてのインストールで入力することをお勧めします。

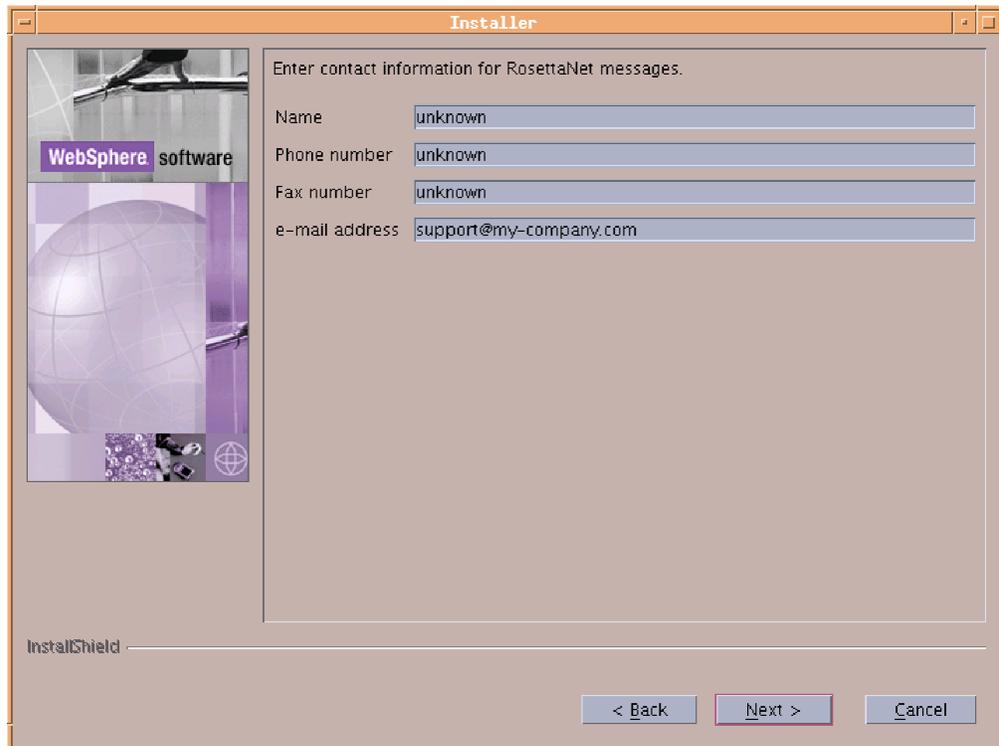


図 22. 「RosettaNet の構成 (RosettaNet Configuration)」画面

「名前」テキスト・ボックスで、RosettaNet の問題が発生した場合の連絡先担当者の名前を入力します。

「電話番号」および「FAX 番号」テキスト・ボックスで、RosettaNet 連絡先の電話番号および FAX 番号を入力します。

「E メール・アドレス」テキスト・ボックスには、RosettaNet 連絡先担当者の E メール・アドレスを入力します。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

14. 「アラート通知 (Alert Notification)」画面 (39 ページの図 23) で、Business Integration Connect を構成して、E メールでアラートを送信できるようにします。以下のデフォルト値は必須です。正しい値がわからない場合は、それらの値を使用してください。

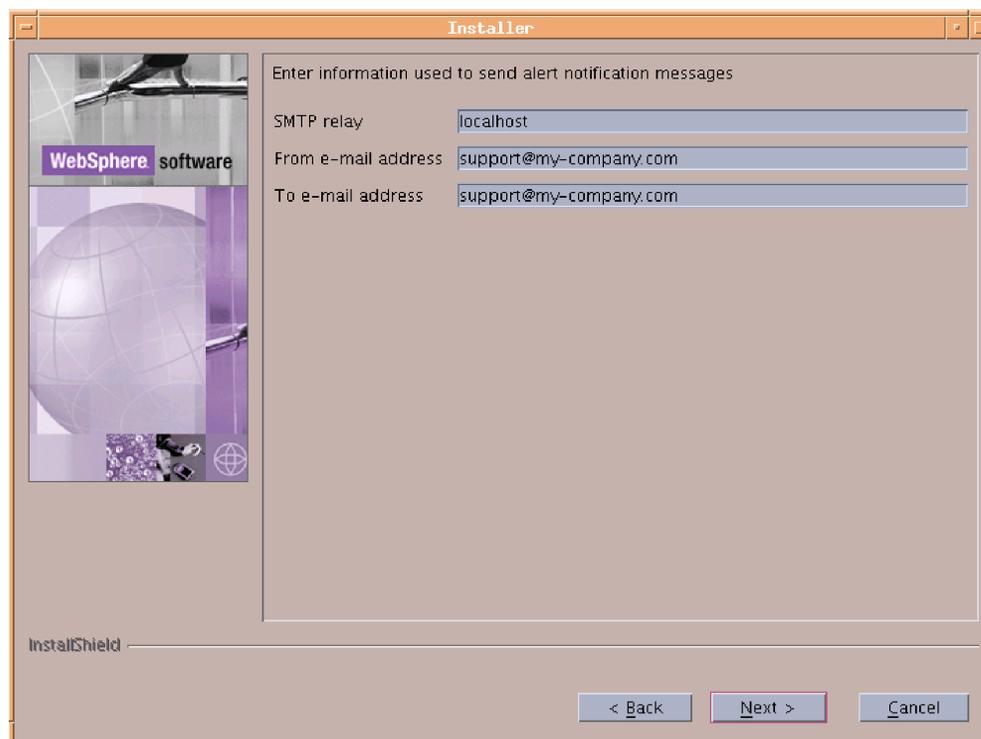


図 23. 「アラート通知 (Alert Notification)」画面

SMTP がこのコンピューター上で実行されていない場合は、「SMTP リレー」テキスト・ボックスで、そのホスト名を入力します。

「送信元 E メール・アドレス」テキスト・ボックスで、E メールを送信するときに Business Integration Connect が使用する E メール・アドレスを入力します。

「送信先 E メール・アドレス」テキスト・ボックスで、アラート通知に対応するユーザーが、E メールを送信するときに使用する宛先の E メール・アドレスを入力します。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

15. 「要約」画面では、インストールされるコンポーネントを示す情報を確認します。表示された情報のいずれかに誤りがある場合は、「戻る」をクリックして前の画面に戻ります。「要約」画面の情報がすべて正しい場合は、「次へ」をクリックします。
16. Business Integration Connect インストーラーにより、選択されたコンポーネントがインストールおよび構成されます。このタスクが完了すると、インストーラーで「完了」ボタンが使用可能になります。「完了」をクリックします。

Business Integration Connect コンポーネントをインストールする各サーバー上で、この手順を繰り返します。共通コンテンツは、一度しかインストールする必要はありません。ファイル共有システムによって、すべてのコンピューターで使用可能になるためです。

すべての Business Integration Connect コンポーネントのインストールが完了したら、48 ページの『Business Integration Connect の開始』を参照してください。

---

## コマンド行によるコンポーネントのインストール

Business Integration Connect には、コマンド行を使用してコンポーネントをインストールする方法もあります。この機能では、すべてのインストール・オプションの値を提供するオプション・ファイルが必要です。提供されたサンプル ISS ファイルを変更するか、GUI を使用してインストールを実行し、選択項目を記録して、カスタム・オプション・ファイルを作成するかのいずれかを行うことができます。41 ページの『オプション・ファイルの生成』を参照してください。

Database Loader のサンプル・ファイルは、CD の Database Loader ディレクトリーか、アーカイブされていないインストール・イメージ内にあります。また、Business Integration Connect サンプル・ファイルは、CD のハブ・ディレクトリーか、アーカイブされていないインストール・イメージ内にあります。

ファイルの各オプションは別の行に表示されています。また、それらの前には、設定を説明し、オプション例を示すコメントが付いています。サンプル・ファイルのオプション値は、GUI に示されるデフォルト値です。パスワードやホスト名などのいくつかの設定では、ローカル構成に関する情報が必要です。

インストールまたはアンインストールのプログラムを実行しているときに、ユーザー独自のオプション・ファイルを生成することもできます。したがって、このファイルを使用して、インストールおよびアンインストールを繰り返すことができます。詳しくは、次のセクションの 42 ページの『サイレント・インストールの実行』を参照してください。

コマンド行を使用して Database Loader または Business Integration Connect をインストールするには、以下のようにします。

1. root 管理者としてログインします。
2. コードをインストールするマシン上で、コマンド行を開きます。
3. インストール実行可能プログラムのロケーションに移動します。例えば、次のようになります。

```
cd DBLoader
```

または

```
cd hub
```

4. ユーザーのオペレーティング・システムに固有の、下記コマンドを入力します。

Linux の場合は、次のように入力します。

```
./setupLinux -options <options file name>
```

AIX の場合は、次のように入力します。

```
./setupAIX -options <options file name>
```

Solaris の場合は、次のように入力します。

```
./setupSunOS -options <options file name>
```

<options file name> は、インストーラーが使用するオプション値を含むファイルを示します。

このコマンドを使用すると、インストーラーに標準の GUI インストールに表示されるすべての画面が表示され、それぞれの画面のフィールドすべてには、オプション・ファイルにリストされている値が入力されています。

## オプション・ファイルの生成

ユーザーのインストール・システムに固有の設定を含むオプション・ファイルを生成するには、以下のステップに従います。

1. root 管理者としてログインします。
2. コードをインストールするマシン上で、コマンド行を開きます。
3. インストール実行可能プログラムのロケーションに移動します。例えば、次のようになります。

```
cd DBLoader
```

または

```
cd hub
```

4. ユーザーのプラットフォームに固有の、下記コマンドを入力します。

Linux の場合は、次のように入力します。

```
./setupLinux -options-record "<options file name>"
```

AIX の場合は、次のように入力します。

```
./setupAIX -options-record "<options file name>"
```

Solaris の場合は、次のように入力します。

```
./setupSolaris -options-record "<options file name>"
```

<options file name> は、インストーラーが使用するオプション値を含むファイルを示します。*options-record* パラメーターの後にディレクトリー名を指定することもできます。

インストーラーは、GUI を使用して実行されます。インストーラーは、Database Loader または Business Integration Connect をインストールし、指定されたオプション・ファイルをインストール・ディレクトリー (デフォルト値を使用した場合は *{WBIC INSTALL DIR}/IBM/WBICConnect/DBLoader* または *{WBIC INSTALL DIR}/IBM/WBICConnect/*) に置きます。テキスト・エディターでこのファイルを編集するか、それを変更せずに使用して、製品をもう一度インストールすることができます。または、別のマシンに重複のインストール・システムを作成することもできます。

製品をインストールせずにオプション・ファイルだけを生成するには、*options-record* パラメーターを、*-options-template* コマンドに置き換えます。このコマンドは、製品のインストールに必要なすべての記入項目を含んだオプション・ファイルを作成します。ただし、これらの各記入項目は、ユーザーに固有のインストール設定に変更する必要があります。

---

## サイレント・インストールの実行

Database Loader および Business Integration Connect は、GUI やユーザー対話のいずれも使用せずに、インストールおよびアンインストールを行うことができます。サイレント・インストールは、複数システムに同じ設定でコンポーネントをインストールする場合、ソフトウェア配布製品を使用する場合、またはグラフィカル環境が使用できない場合に、特に有効です。

Database Loader または Business Integration Connect のサイレント・インストールを行うには、以下のステップに従います。

1. root 管理者としてログインします。
2. コードをインストールするマシン上で、コマンド行を開きます。
3. インストール実行可能プログラムのロケーションに移動します。例えば、次のようになります。

```
cd DBLoader
```

または

```
cd hub
```

4. ユーザーのプラットフォームに固有の、下記コマンドを入力します。

Linux の場合は、次のように入力します。

```
./setupLinux -options "<options file name>" -silent
```

AIX の場合は、次のように入力します。

```
./setupAIX -options "<options file name>" -silent
```

Solaris の場合は、次のように入力します。

```
./setupSolaris -options "<options file name>" -silent
```

<options file name> は、インストーラーが使用するオプション値を含むファイルを示します。

インストーラーは、ユーザー対話または GUI なしに動作します。インストールが完了すると、インストーラーは、コマンド・プロンプトに戻ります。

---

## Business Integration Connect のアップグレード

このアップグレード手順では、新規のバージョンに対して、同一バージョンの MQSeries キュー・マネージャー構成を含め、同一環境を使用することを前提としています。また、Business Integration Connect の同じエディション (例えば、エンタープライズ・バージョン 4.2.x からエンタープライズ・バージョン 4.2.x へ) についてアップグレードを行うものとします。

Business Integration Connect を最新バージョンにアップグレードするには、以下のようになります。

旧バージョンを次のようにシャットダウンします。

1. ご使用のオペレーティング・システムに対応する shutdown\_bcg.\* スクリプトを使用して、Receiver を停止します。shutdown\_bcg.\* スクリプトは、以下のディレクトリーに配置されています。

```
{WBIC INSTALL DIR}/receiver/was/bin
```

Console の Document Viewer を検査して、進行中の文書が処理を終了していることを確認します。

2. ご使用のオペレーティング・システムに対応する shutdown\_bcg.\* スクリプトを使用して、Document Manager を停止します。shutdown\_bcg.\* スクリプトは、以下のディレクトリーに配置されています。

```
{WBIC INSTALL DIR}/router/was/bin
```

3. ご使用のオペレーティング・システムに対応する stopServer.\* スクリプトを使用して、Community Console を停止します。stopServer.\* スクリプトは、{WBIC INSTALL DIR}/console/was/bin ディレクトリーに配置されています。サーバー名として、server1 を指定します。例えば、次のようになります。

```
{WBIC INSTALL DIR}/console/was/bin/stopServer.* server1
```

旧バージョンを次のようにバックアップします。

1. データベースをバックアップします。これを実行する方法については、データベース管理者に問い合わせるか、データベースの資料を参照してください。このステップは、再作成が困難な Business Integration Connect データをデータベースが格納しているため重要です。
2. {WBIC INSTALL DIR}/common に配置されている共用の共通ディレクトリー・ツリーをバックアップします。このステップは、否認防止ディレクトリーやメッセージ格納ディレクトリーなどの再作成が困難な Business Integration Connect データを共用の共通ツリーが含んでいるため重要です。
3. 直前の Business Integration Connect インストール・ディレクトリーをバックアップします。例: {WBIC INSTALL DIR}/console、{WBIC INSTALL DIR}/receiver、および {WBIC INSTALL DIR}/router。  
代替方法として、以下のステップを繰り返して、指定された構成データのみをバックアップすることもできます。
  - a. ご使用のオペレーティング・システムに対応する was/bin/backupConfig.\* スクリプトを呼び出して、埋め込み WAS 構成をバックアップします。  
WebSphereConfig\*.zip バックアップ・ファイルをバックアップ・ロケーションにコピーします。
  - b. was/jndi/WBIC サブディレクトリー・ツリーをバックアップします。
  - c. was/wbic/config サブディレクトリー・ツリーをバックアップします。

**DBLoader インストーラーを実行します。**

1. 以下のコマンドを (Windows では管理者ユーザー、UNIX では root ユーザーの立場で) 入力して、Database Loader をアンインストールします。

```
{WBIC INSTALL DIR}/DBLoader/_uninst/uninstall
```

**重要:** アンインストールの間は、「データベースを除去します」を選択しないでください。バックアップされていない場合は、データベースを除去するとデータを損失します。既存のデータベースは、以下のステップでアップグレードされます。

2. ご使用のオペレーティング・システムに特定の `setup*` ランチャーを使用して、メディア・ロケーションから `upgraded Database Loader` を実行します。例えば、次のようになります。

```
{CD_ROM/MEDIA DIR}/DBLoader/setup*
```

**注:** Windows の場合は、データベースの所有ユーザーとしてログインしていることを確認してください。所有ユーザーは通常 `DB2ADMIN` です。

以下のガイドラインに従ってください。

- a. アップグレードする前のバージョンで使用されている入力値と同じものを指定します。例: ユーザー ID、パスワード、データベース・ベンダーなど。
  - b. 構成デフォルトを検査し、必要に応じてオーバーライドします。
  - c. 「SQL ファイルを自動的に実行 (Run the SQL Files automatically)」を選択しないでください。
3. `{WBIC INSTALL DIR}/DBLoader/scripts/DB2` ディレクトリーまたは `{WBIC INSTALL DIR}/DBLoader/scripts/Oracle` ディレクトリーに存在する `BCGUpgrade*.sql` スクリプトを実行します。

**注:** 各 `BCGUpgrade_from-ver_to-ver.sql` スクリプトは、ご使用のシステムに適用される最も古いバージョンから始め、次のバージョンへと順番に実行する必要があります。

## DB2

以下のコマンドを実行します。

- a. UNIX: `su - db2inst1`  
Windows: `DB2CLP` を開始します

**注:** Windows の場合は、データベースの所有ユーザーとしてログインしていることを確認してください。所有ユーザーは通常 `DB2ADMIN` です。

- b. `db2start` (データベースが開始しない場合)
- c. `db2 connect to bcgapps` (「`bcgapps`」はデータベース名)
- d. `cd {WBIC INSTALL DIR}/DBLoader/scripts/DB2`
- e. 既存のバージョンに従って、以下のスクリプトのいずれかを実行して、データベースをアップグレードします。

4.2.0 から 4.2.1 まで:

```
db2 -td! -f BCGUpgrade_420_421.sql -z  
/tmp/WBIConnect/logs/BCGUpgrade_420_421.log
```

4.2.1.0 から 4.2.1 まで (Fix Pack 1 は未インストール):

```
db2 -td! -f BCGUpgrade_421_421FP1.sql -z  
/tmp/WBIConnect/logs/BCGUpgrade_421_421FP1.log
```

4.2.1.1 から 4.2.2 まで:

```
db2 -td! -f BCGUpgrade_421FP1_422.sql -z  
/tmp/WBIConnect/logs/BCGUpgrade_421FP1_422.log
```

- f. `save_inputs.sql` スクリプトを実行して、`DBLoader` ユーザー入力をデータベースに読み込みます。例えば、次のようになります。

```
db2 -td! -f save_inputs.sql -z
/tmp/WBICConnect/logs/save_inputs.log
```

## Oracle

以下のコマンドを実行します。

**注:** Windows の場合は、管理者ユーザーとしてログインする必要があります。

- a. `cd {WBIC INSTALL DIR}/DBLoader/scripts/Oracle`
- b. 既存のバージョンに従って、以下のスクリプトのいずれかを実行して、データベースをアップグレードします。

4.2.1.0 から 4.2.1 まで (Fix Pack 1 は未インストール):

```
sqlplus -L bcgapps/password @BCGUpgrade_421_421FP1.sql
>/tmp/WBICConnect/logs/BCGUpgrade_421_421FP1.log
```

4.2.1.1 から 4.2.2 まで:

```
sqlplus -L bcgapps/password @BCGUpgrade_421FP1_422.sql
>/tmp/WBICConnect/logs/BCGUpgrade_421FP1_422.log
```

- c. `save_inputs.sql` スクリプトを実行して、DBLoader ユーザー入力をデータベースに読み込みます。例えば、次のようになります。

```
sqlplus -L bcgapps/password @save_inputs.sql
>/tmp/WBICConnect/logs/save_inputs.log
```

## MQSeries/JMS キュー構成を更新します。

**注:** Windows の場合は、管理者ユーザーとしてログインする必要があります。

1. UNIX の場合: `su -mqm`
2. 以下のコマンドを実行します。

```
runmqsc bcg.queue.manager < {CD_ROM/MEDIA DIR}
/Tools/MQSeries/BCGUpgrade_Queue_v422.mqsc
```

`bcg.queue.manager` が MQSeries キュー・マネージャー名である場合。

## 旧バージョンの Business Integration Connect をアンインストールします。

1. Windows の管理者ユーザーまたは UNIX の root ユーザーとして、以下のコマンドを入力して、旧バージョンをアンインストールします。

```
{WBIC INSTALL DIR}/_uninst/uninstaller
```

アンインストールの対象として、すべての機能を選択します。「このシステム上にファイルが存在し、インストール後に変更されました。このファイルを除去しますか。(a file exists on this system and it has been modified since installation. Do you want to remove this file?)」というメッセージのプロンプトが出されたら、「いいえ」をクリックします。

2. 残りのディレクトリー・ツリーを削除します。

**重要:** {WBIC INSTALL DIR}/ 共通ツリーは削除しないでください。ここには、多くのランタイム文書およびデータが保管されています。バックアップされていない場合は、共通ツリーを削除するとデータを損失します。

## Business Integration Connect をインストールします。

Windows の管理者ユーザーまたは UNIX の root ユーザーとして、ご使用のオペレーティング・システムに対応する `setup*` ランチャーを使用して、`Business Integration Connect` をインストールします。例: `CD_ROM/MEDIA DIR}/hub/setup*`

1. アップグレードする前のバージョンで使用されている入力値と同じものを指定します。例: ユーザー ID、パスワード、データベース・ベンダーなど。
2. 構成デフォルトを検査し、必要に応じてオーバーライドします。
3. 共通の共用ディレクトリー・ツリーが正しいことを確認します。

#### カスタム構成の復元:

アップグレード前のバージョンでカスタマイズした構成を復元します。バージョン 4.2.2 の `Receiver` と `Document Manager` の構成ファイルには変更点があります。新しい 4.2.2 構成ファイルを使用する必要があります。バックアップ・ディレクトリーからの旧バージョンで、4.2.2 バージョンの構成ファイルを置き換えないでください。

ご使用の 4.2.1 バージョンに加えられた可能性のある構成ファイルの変更点を確認するには、4.2.1 バックアップ・ディレクトリーと 4.2.2 インストール・ディレクトリーにあるそれぞれの構成ファイルの内容を比較します。変更点がある場合は、手で 4.2.2 ファイルにマージしてください。

**注:** これらのディレクトリーにある `version.properties` ファイルは、変更しないでください。

以下のディレクトリーに配置されているファイルの内容を比較します。

```
console/was/wbic/config  
receiver/was/wbic/config  
router/was/wbic/config
```

`router/was/wbic/config/bcg.properties` ファイルには、`bcg.alertNotifications.mail*` プロパティー、および `bcg.A01.from*` プロパティーに配置される `RosettaNet` 連絡先情報が記述されています。4.2.2 ハブのインストール時にこれらの値が正しく入力されなかった場合は、4.2.1 の `bcg.properties` ファイルから新しい 4.2.2 の `router/was/wbic/config/bcg.properties` ファイルに値をコピーできます。

**注:** ベースの `RosettaNet V02.00` パッケージに対する変更では、以前に変更内容がインストールされている場合は、コンソールを使用してそれを再ロードする必要があります。

#### **Business Integration Connect** を始動します。

UNIX の場合は、48 ページの『`Business Integration Connect` の開始』を参照してください。

Windows の場合は、83 ページの『`Business Integration Connect` の開始』を参照してください。

## Oracle JDBC ドライバーの更新

何らかの理由で、Oracle のサービス・レベルを変更した場合、例えば、フィックスパックを適用した場合などは、Oracle JDBC ドライバーの互換性を確認する必要があります。必要であれば、このセクションの手順に従って、Oracle JDBC ドライバーを更新してください。

Oracle JDBC ドライバーを置き換えるには、以下のようにします。

Oracle JDBC ドライバーを変更するが、ドライバー・ファイルへのディレクトリーおよび絶対パス名は元のままにする場合は、以下のようにします。

1. Business Integration Connect の Console、Receiver、および Document Manager を停止します。
2. Oracle JDBC ドライバー・ファイル classes12.zip を置き換えます。
3. Business Integration Connect の Console、Receiver、および Document Manager を開始します。

Oracle JDBC ドライバーを置き換えると、ドライバー・ファイルの絶対パス名が変更される場合は、次の手順を実行します。

1. Business Integration Connect の Console、Receiver、および Document Manager を停止します。
2. Console、Receiver、および Document Manager の各コンポーネントごとに、bcgdatabase.jacl を使用して 既存の JDBC データ・ソースを除去します。

JDBC データ・ソースを除去します。bcgdatabase.jacl から情報を呼び出すには、次のようにします。

```
./wsadmin.sh -f bcgdatabase.jacl -conntype NONE uninstall [db2 | oracle]
<nodeName> <serverName>
```

次の値を使用してください：

```
./wsadmin.sh -f bcgdatabase.jacl -conntype NONE uninstall oracle
DefaultNode server1
```

3. Console、Receiver、および Document Manager の各コンポーネントについて、bcgdatabase.jacl を呼び出して、JDBC データ・ソースを作成します。

JDBC データ・ソースを作成します。bcgdatabase.jacl から情報を呼び出すには、次のようにします。

```
./wsadmin.sh -f bcgdatabase.jacl -conntype NONE
install <dbType> <dbName> <dbHostname> <dbPort> <dbUserId>
<dbPassword> <nodeName> <serverName> <dbZipFile> <jndiName>
```

<> 内の値を、インストール時に指定した値と置き換えることを忘れないようにしてください。

4. Oracle オプションによって作成されたファイルを使用してインストールする場合は、dbZipFile が、データベースに接続するときに使用する必要のある Oracle JDBC ドライバーの絶対パス名です。通常、そのファイル名は、classes12.zip です。

```
./wsadmin.sh -f bcgdatabase.jacl -conntype NONE install oracle <dbName>  
<dbHostname> <dbPort> <dbUserId> <dbPassword> DefaultNode server1  
<dbZipFile> datasources/OracleDS
```

5. Console、Receiver、および Document Manager を開始します。

---

## Business Integration Connect の開始

Business Integration Connect のインストールが完了したら、以下の手順に従って、それを開始できます。

Business Integration Connect を開始するには、以下のようになります。

1. 次のように入力して、一般の Business Integration Connect ユーザーに変更します。

```
su - bcguser
```

2. 次のようにして、Community Console スクリプト・ディレクトリーに移動します。

```
cd {WBIC_INSTALL_DIR}/IBM/WBICConnect/console/was/bin
```

3. 次のコマンドを入力して、Community Console を開始します。

```
./startServer.sh server1
```

4. 次のコマンドを入力して、Receiver スクリプト・ディレクトリーに移動します。

```
cd {WBIC_INSTALL_DIR}/IBM/WBICConnect/receiver/was/bin
```

5. 次のコマンドを入力して、Receiver を開始します。

```
./startServer.sh server 1
```

6. 次のように入力して、Document Manager スクリプト・ディレクトリーに移動します。

```
cd {WBIC_INSTALL_DIR}/IBM/WBICConnect/router/was/bin
```

7. 次のコマンドを入力して Document Manager を開始します。

```
./startServer.sh server 1
```

8. Web ブラウザーを開いて以下の URL を入力し、コンソールを表示します。

非セキュアの場合は、次のようになります。

```
http://<hostname>.<domain>:58080/console
```

セキュアの場合は、次のようになります。

```
https://<hostname>.<domain>:58443/console
```

<hostname> および <domain> は、Community Console コンポーネントをホスティングするコンピューターの名前およびロケーションです。

### 注:

- a. これらの URL では、デフォルトのポート番号が使用されていることを想定しています。デフォルトのポート番号を変更した場合は、デフォルト番号を指定した値で置き換えてください。

- b. WBI Connect Community Console では、Cookie のサポートをオンにしてセッション情報を維持する必要があります。Cookie に個人情報が保管されることはなく、ブラウザが閉じられると Cookie も有効期限切れになります。
  9. Web ブラウザーにウェルカム・ページが表示されます。次の情報を使用して、Business Integration Connect にログインします。
    - 「ユーザー名」フィールドには次のように入力します。  
hubadmin
    - 「パスワード」フィールドには次のように入力します。  
Pa55word
    - 「会社名」フィールドには次のように入力します。  
Operator
- 「ログイン」をクリックします。
10. 初回にログインする場合は、新規パスワードを作成する必要があります。新規パスワードを入力してから、「検証」テキスト・ボックスにもう一度新規パスワードを入力します。
  11. 「保管」をクリックします。システムは、Console の初期入力画面を表示します。
  12. 次の Web アドレスによって、Document Manager に接続します。  
`http://<hostname>.<domain>:56969`

これで、Business Integration Connect へのログインが完了しました。次の操作については「*Getting Started*」ガイドを参照してください。また、インストール・システムのテスト方法については『インストール・システムのテスト』を参照してください。

---

## インストール・システムのテスト

次の手順に従って、Business Integration Connect の稼働中にインストール・システムをテストしてください。

1. ユーザーのログイン・イベントにもとづいたアラートを作成し、アラートの連絡先としてユーザー自身を設定します。アラートの作成と、アラートに連絡先を追加する方法について詳しくは、「*Community Console User's Guide*」の『Managing Alerts』を参照してください。
  - a. 「アラート所有者」ドロップダウン・リストで、「ハブ・オペレーター (Hub Operator)」を選択します。
  - b. 「参加者」ドロップダウン・リストで、「ハブ・オペレーター (Hub Operator)」を選択します。
  - c. 「イベント・タイプ」ドロップダウン・リストで、「情報」を選択します。
  - d. 「イベント名」ドロップダウン・リストで、「102002 ユーザーのログインは成功しました (102002 User Login was successful)」を選択します。
2. ログアウトし、ハブ管理ユーザーとしてもう一度ログインします。
3. E メールでアラート・メッセージをチェックします。

---

## トラブルシューティング

Database Loader のインストール中に問題が発生した場合は、system temp/WBICConnect/logs ディレクトリーの Database Loader ログで問題に関する情報を参照してください。問題が解決したら、次の手順を実行し、作成されたデータベースを削除します。

1. Database Loader アンインストーラーを実行して、データベースを除去します。
2. データベースの削除が完了したら、Database Loader ウィザードを再実行します。

Business Integration Connect コンポーネントのインストール中に問題が発生する場合は、以下のコンポーネント・インストール・ログを検討してください。

```
{WBIC INSTALL DIR}/IBM/WBICConnect/console/logs
```

```
{WBIC INSTALL DIR}/IBM/WBICConnect/receiver/logs
```

```
{WBIC INSTALL DIR}/IBM/WBICConnect/router/logs
```

以下のランタイム・ログも調べる必要があります。

```
{WBIC INSTALL DIR}/IBM/WBICConnect/console/was/logs/server1
```

```
{WBIC INSTALL DIR}/IBM/WBICConnect/receiver/was/logs/server1
```

```
{WBIC INSTALL DIR}/IBM/WBICConnect/router/was/logs/server1
```

---

## Business Integration Connect のアンインストール

以下の手順に従って、Business Integration Connect または Database Loader をアンインストールしてください。

**注:** オプション・ファイルを保管した後、コンポーネントを再度インストールする予定のある場合は、共通ディレクトリー・ツリーだけでなく、Console、Receiver、Document manager の各ディレクトリーもバックアップしてください。また、Database Loader アンインストーラーを使用する前に、データベースをバックアップする必要もあります。

1. 以下の順序で WebSphere Business Integration Connect サーバーをシャットダウンします。
  - a. `{WBIC INSTALL DIR}/console/was/bin` ディレクトリーに移動し、次のコマンドを実行します。

```
./stopServer.sh server1
```
  - b. `{WBIC INSTALL DIR}/receiver/was/bin` ディレクトリーに移動し、次のコマンドを実行します。

```
./shutdown_bcg.sh
```
  - c. `{WBIC INSTALL DIR}/router/was/bin` ディレクトリーにナビゲートし、以下のコマンドを実行します。

```
./shutdown_bcg.sh
```
2. `_unist directory` で、次のように入力して、アンインストーラー実行可能ファイルを実行します。

```
cd _uninst
```

```
./uninstaller
```

アンインストーラー・ウィザードが始動し、「ようこそ」画面が表示されます。「次へ」をクリックして先へ進みます。

3. **Business Integration Connect** をアンインストールする場合は、「コンポーネント選択」画面でこのシステムから取り外すコンポーネントを選択します。複数のコンポーネントを選択できます。

共通の共用ファイルのアンインストールについては、注意が必要です。共通の共用ファイルと同じロケーションにもう一度インストールしないと、プロパティ・ファイルおよびデータベースの多くの構成を変更しなければならなくなります。

**注:** **Business Integration Connect** は、各コンポーネントの 1 つ以上のインスタンスを必要とします。コンポーネントの唯一のインスタンスを除去する場合は、別のシステムにコンポーネントをインストールすることが必要になります。例えば、ネットワークを構成する **Document Manager** の唯一のインスタンスを削除する場合は、別のシステムに **Document Manager** をインストールし、同じデータベースとキュー・マネージャーを使用するように構成する必要があります。

「次へ」をクリックして先へ進みます。アンインストーラーの画面に「要約」画面が表示されます。

4. 「要約」画面には、アンインストーラーによって除去されるコンポーネントがリストされます。この情報を確認します。表示された情報のいずれかに誤りがある場合は、「戻る」をクリックして前の画面に戻ります。「要約」画面の情報がすべて正しい場合は、「次へ」をクリックします。

**注:** アンインストーラーは、インストール時に作成されたファイルのみ除去します。インストール後に作成されたファイルやフォルダーは一切除去しません。アンインストールの完了後に残りのファイルまたはフォルダーを手動で除去します。

5. アンインストーラーにより、選択されたコンポーネントが除去されます。すべてのコンポーネントが除去されると、アンインストーラーの「完了」ボタンが使用可能になります。「完了」をクリックします。
6. ディレクトリ構造に残っているファイルを確認してから、ディレクトリ・ツリーの除去を繰り返します。

**注:** サイレント・アンインストーラーを使用する場合は、サイレント・アンインストール応答ファイルの作成用に提供されたサンプル・ファイルを使用する必要があります。



---

## 第 3 章 Windows 環境での Business Integration Connect のインストール

以下の手順では、Windows システム上で、Business Integration Connect のインストールとアンインストール、アップグレード、始動、テスト、およびトラブルシューティングを行う方法を説明します。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『インストールの概要』
- 『インストール済み前提条件の検証および構成』
- 59 ページの『Business Integration Connect のインストール』
- 82 ページの『サイレント・インストールの実行』
- 80 ページの『コマンド行によるコンポーネントのインストール』
- 82 ページの『Business Integration Connect のアップグレード』
- 85 ページの『インストール・システムのテスト』
- 86 ページの『Business Integration Connect のアンインストール』
- 82 ページの『Oracle JDBC ドライバーの更新』
- 87 ページの『トラブルシューティング』

---

### インストールの概要

このセクションでは、Business Integration Connect のインストール・プロセスのハイレベルな概要について説明します。

この章では、以下の作業を詳細に説明します。

1. システムが、最低限のハードウェアおよびソフトウェアのインストール前提条件を満たしていることを確認します。
2. Business Integration Connect データベース表の作成と構成を行います。
3. Business Integration Connect ソフトウェアをインストールします。

---

### インストール済み前提条件の検証および構成

Business Integration Connect をインストールする前に、必要な前提条件がすべて整っていることを確認してください。このセクションのトピックでは、システムのハードウェアおよびソフトウェア要件、サポートされるデータベース、Business Integration Connect ソフトウェアの実行に必要なユーザー・アカウントの概要を説明します。

インストールの準備に活用できるように、このセクションの最後にプリインストール・チェックリストが用意されています。プリインストール・チェックリストは、Business Integration Connect のインストール前に実行しておく必要のある作業をリストしています。

- 表 1 は、Database Loader インストール・ウィザードを実行するときに入力する必要がある値をリストしています。インストールを計画している場合は、この表の必要なインストール情報を記録しておくことができます。例えば、データベースのインスタンス名や表スペースの情報などです。
- 表 2 は、Business Integration Connect インストール・ウィザードを実行するときに入力する必要がある値をリストしています。インストールの計画を立てるときに、WebSphere MQ サーバーのホスト名や、Community Console、Receiver、および Document Manager 用のポート番号などの必要なインストール情報を記録できます。

このセクションでは、以下のトピックについて説明します。

- 『ユーザー・アカウントの追加』
- 55 ページの『WebSphere MQ の構成』
- 56 ページの『DB2 のインストールおよび構成』
- 57 ページの『Oracle のインストールおよび構成』
- 58 ページの『プリインストール・チェックリスト表』

## ユーザー・アカウントの追加

データベースと接続する場合、Business Integration Connect には一組のオペレーティング・システムのユーザーが必要です。次の手順を実行し、オペレーティング・システムのユーザーをセットアップします。この手順ではデフォルト名を使用していますが、実際に使用するユーザー名やグループ名に置き換えることができます。グループ名とユーザー名は、8 文字以内にします。

**注:** 1 ユーザーのみを設定する場合は、グループを作成する必要はありません。

ユーザー・アカウントを作成するには、次の手順を実行します。

1. 「スタート」 > 「設定」 > 「コントロール パネル」をクリックし、「管理ツール」 > 「コンピューターの管理」 > 「ローカル ユーザーとグループ」をダブルクリックします。

「ローカル ユーザーとグループ」ダイアログ・ボックスが表示されます。「ユーザー」を右マウス・ボタンでクリックして「新しいユーザー」を選択します。

「新しいユーザー」ダイアログ・ボックスが表示されます。

bcguser、bcgcon、bcgdoc、および bcgreiv の各ユーザーを追加します。さらに、「パスワードを無期限にする」オプションを選択します。

**注:** Oracle ユーザーの場合は、bcguser ユーザーを作成することのみが必要です。

2. Business Integration は、このグループのユーザーを使用して Business Integration Connect のコンポーネントを管理します。
3. 「ローカル ユーザーとグループ」ダイアログ・ボックスで「グループ」を右マウス・ボタンでクリックし、「新しいグループ」を選択します。
4. 「新しいグループ」ダイアログ・ボックスが表示されます。bcggroup グループを追加します。

5. bcggroup に、bcguser、bcgcon、bcgdoc、および bcgrecv の各ユーザーを追加します。

**注:** Oracle ユーザーの場合は、bcguser ユーザーを bcggroup に追加することのみが必要です。

6. 「コンピューターの管理」を終了します。
7. ユーザー名とパスワードを 58 ページの『プリインストール・チェックリスト表』の表に記録します。

## WebSphere MQ の構成

以下の手順では、インストール後に WebSphere MQ を構成する方法について説明します。適用する必要がある SupportPac およびアップデートのリストについては、1 ページの『プラットフォーム、ハードウェア、およびソフトウェアの要件』を参照してください。この手順で使用する特定のコマンドについては、WebSphere MQ の資料を参照してください。

**注:** デフォルトのキュー・マネージャー名は bcg.queue.manager、デフォルトのリスナー・ポートは 9999 です。これらのデフォルト値を変更する場合は、それらの値が使用されているすべての場所で確実に変更する必要があります。

WebSphere MQ を構成するには、次の手順を実行します。

1. 管理者または管理者グループのメンバーであるユーザーとして、オペレーティング・システムにログインしていることを確認します。
2. 次のキュー・マネージャーを作成します。

```
crtmqm -q bcg.queue.manager
```

3. この手順でプロパティを変更し、チャンネルのパラメーターをアップデートします。MQServices でユーザーのキュー・マネージャーを右マウス・ボタンでクリックし、プロパティとチャンネルを選択します。

次の値を使用してチャンネルのプロパティをアップデートします。

```
MaxChannels=1000
```

```
MaxActiveChannels=1000
```

4. コンピューターに複数の CPU が存在する場合は、次のコマンドを入力します。

```
setmqcap <number of CPUs>
```

5. 次のコマンドでキュー・マネージャーを開始します。

```
strmqm bcg.queue.manager
```

6. 次のコマンドでリスナーを開始します。

```
runmqtsr -t tcp -p 9999 -m bcg.queue.manager
```

7. リスナーはこのウィンドウで実行されるので、開いたままにしておきます。

8. 新しいウィンドウを開き、次のコマンドを使用して JMS Broker (パブリッシュ/サブスクライブ・ブローカー) を始動します。

```
strmqbrk -m bcg.queue.manager
```

9. 次のコマンドで MQ コマンド・サービスを開始します。

```
strmqcsv bcg.queue.manager
```

10. `Tools\MQSeries\create_wbic_queues.mqsc` ファイルを使用して、キュー・マネージャーのキューとチャンネルを定義します。

```
runmqsc bcg.queue.manager <  
<CD image>\Tools\MQSeries\create_wbic_queues.mqsc
```

<CD image> は、Business Integration Connect CD のロケーション、またはアーカイブされていない Business Integration Connect のインストール・ファイルのロケーションです。

11. `MQHomeInstallDir\java\bin\MQJMS_PSQ.mqsc` ファイルを使用して、JMS のパブリッシュ・キューとサブスクライブ・キューを構成します。

```
runmqsc bcg.queue.manager <  
MQHomeInstallDir\mqm\java\bin\MQJMS_PSQ.mqsc
```

12. MQ ホスト名、キュー・マネージャー名、およびリスナー・ポートを 58 ページの『プリインストール・チェックリスト表』に記録します。

## DB2 のインストールおよび構成

実稼動環境で最高のパフォーマンスを引き出すには、Business Integration Connect データベースを専用サーバー上に置いてください。

WebSphere Business Integration Connect をインストールする場合は、`Create_db2.sql` スクリプトを使用してデータベースを作成および構成できます。データベースは、DB2 UDB がマルチプロセッサ・マシン上で稼働していることを前提にして構成されます。特に、`DFT_DEGREE` パラメーターは 4 に設定されます。これは、SQL 照会が並列動作の 4 個のサブプロセスとして実行されることを示します。DB2 UDB がシングル・プロセッサ・マシンで稼働している場合はこれが最適の構成ではなく、システム・メモリーと CPU の間で競合が発生する可能性があります。お客様のデータベース管理担当者と共にデータベースの構成を検討し、必要であれば変更を加えて個別のデータベース環境に適合させることをお勧めします。

**注:** Business Integration Connect では分離ユーザー・オプションを使用しません。Business Integration Connect のインストールのときに、分離ユーザー ID を使用しないでください。

以下の手順に従って DB2 のインストールと構成を行います。

1. 提供されるインストールの指示に従い、DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、DB2 をインストールします。ウィザードを始動し、次の手順を実行します。
  - インストール・タイプを選択する画面で、「**カスタム**」インストールを選択します。次の画面で、「**Application Development Toolkit**」をデフォルトの選択に追加します。
  - 以後の画面では、デフォルト値を使用するか、ユーザー独自の値を使用します。インスタンス名、インスタンス所有者ユーザー ID、およびパスワードを調べ、このセクションの後半にある **Database Loader インストール・ウィザードで必要とされる情報**の表に記録します。これらのオプションの情報については、DB2 のインストール・ガイドを参照してください。

2. DB2 のインストールが完了したら、FixPackReadme.txt の指示に従って FixPack2 をインストールします。
3. DB2 が稼働していない場合は、次のコマンドを実行して始動させます。

db2start

4. 正しい C++ コンパイラーおよびライブラリーがインストール済みであることを確認します。システム環境変数 (%PATH、%LIB、%INCLUDE) が、C++ コンパイラーを指すように設定されていることを確認します。システム環境変数を設定する場合は、一度 Windows 2000 からログアウトして再度ログインし、すべての新しいプロセスに関してシステム環境が更新されていることを確認してください。必要なパッケージ名およびバージョンについては、DB2 Application Development Toolkit の資料を参照してください。

既存のインストール・システムを使用する場合は、次のようにしてください。

1. DB2 Application Development Toolkit がインストール済みであることを確認します。ツールキットのインストール方法については、DB2 の資料を参照してください。
2. include ディレクトリーが存在することを確認します。例えば、  
`DB2HomeInstallDir¥IBM¥SQLLIB¥include`
3. 正しい C++ コンパイラーおよびライブラリーがインストール済みであることを確認します。システム環境変数 (%PATH、%LIB、%INCLUDE) が、C++ コンパイラーを指すように設定されていることを確認します。システム環境変数を設定する場合は、一度 Windows 2000 からログアウトして再度ログインし、すべての新しいプロセスによってシステム環境が更新されていることを確認してください。必要なパッケージ名およびバージョンについては、DB2 Application Development Toolkit の資料を参照してください。

ユーザー名とパスワードを 58 ページの『プリインストール・チェックリスト表』の表に記録します。

## Oracle のインストールおよび構成

本書には Oracle 9i のインストール手順の説明はありません。インストール手順については、適切な Oracle の資料を参照してください。

IBM は、お客様が Oracle データベースをインストールする際には、次の指針に従うようお勧めします。

1. Oracle のインストール資料の説明に従って、Oracle システム環境変数をエクスポートします。この操作は、Business Integration Connect のインストール・プロセス中に Database Loader が SQL を自動的に実行する場合に、管理者ユーザーが実行する必要があります。
2. ハブ・コンポーネントを実行するそれぞれのマシンで、Oracle 9i JDBC ドライバーを使用可能にする必要があります。JDBC ドライバーは、インストール済みの Oracle バージョンと同じレベルでなければなりません。

ユーザー名とパスワードを 58 ページの『プリインストール・チェックリスト表』の表に記録します。変更された場合は特に、デフォルト値も記録します。

## プリインストール・チェックリスト表

以下の作業は、Business Integration Connect のインストール前に実行しておく必要があります。

**注:** 以下の作業は、単一マシンに対するインストールを前提にしています。

1. ユーザー・グループ `bcggroup` をオペレーティング・システムに作成します。オペレーティング・システムのユーザー `bcguser` を作成し、`bcggroup` のメンバーにします。DB2 を使用している場合は、オペレーティング・システムのユーザー `bcgcon`、`bcgdoc` & `bcgrezv` をすべて作成し、`bcggroup` のメンバーにします。Oracle を使用している場合は、O/S ユーザー `bcgcon`、`bcgdoc`、および `bcgrezv` は不要です。
2. DB2 または Oracle をサーバーにインストールし、構成します。
3. WebSphere MQ をサーバーにインストールし、構成します。
4. SMTP サーバーを作成します (オプション)。
5. 複数のコンピューターが使用されている場合は、各コンピューターでネットワーク・ファイルの共有を作成する必要があります。これにより、コンピューターすべてが、ネットワーク全体の共用ファイルにアクセスして共用できます。

次の表に、Database Loader および Business Integration Connect インストール・ウィザードを開始する前に用意しておく必要のある情報を示します。インストール・ウィザードを実行するときに、この表を参照してください。

必須情報	値
Business Integration Connect のユーザー名	(デフォルトは <code>bcguser</code> )
Business Integration Connect のユーザー・パスワード	
Business Integration Connect のグループ名	(デフォルトは <code>bcggroup</code> )
Community Console のユーザー名	(デフォルトは <code>bcgcon</code> )
Community Console のユーザー・パスワード	
Community Console のポート番号	(HTTP - デフォルトは 58080) (HTTPS - デフォルトは 58443)
Document Manager のユーザー名	(デフォルトは <code>bcgdoc</code> )
Document Manager のユーザー・パスワード	
Document Manager のポート番号	(HTTP - デフォルトは 56080) (HTTPS - デフォルトは 56443)
Receiver のユーザー名	(デフォルトは <code>bcgrezv</code> )
Receiver のユーザー・パスワード	
Receiver のポート番号	(HTTP - デフォルトは 57080) (HTTPS - デフォルトは 57443)
WebSphere MQ ホスト名	

必須情報	値
WebSphere MQ キュー・マネージャー	(デフォルトは bcg.queue.manager)
リスナー用の WebSphere MQ ポート	9999
共用ロケーションのマウント・ポイント	
データベース・ホスト名	
データベース・ポート	(デフォルト・インスタンスを使用している場合のデフォルトは DB2=50000)(Oracle=1521)
データベース所有者 (DB2)	
所有者のパスワード (DB2)	
データベース名 (DB2)	
インスタンス名 (DB2)	
管理者ログイン ID (Oracle)	
管理者パスワード (Oracle)	
Oracle SID (Oracle)	
スキーマ所有者ログイン (Oracle)	
スキーマ所有者パスワード (Oracle)	
SMTP ホスト名	
SMTP ポート番号	(デフォルトは 25)

## Business Integration Connect のインストール

前のセクションで記述された前提条件をすべて満たしていると、Database Loader および WebSphere Business Integration Connect の各インストール・ウィザードを実行することができます。

### LaunchPad

Business Integration Connect には、製品概要、ReadME ファイル、製品資料、データベース・ローダー、および Business Integration Connect Installer に対するワンストップ・アクセスを提供するランチパッド・プログラム (60 ページの図 24 を参照) が用意されています。別の方法として、提供されている setup\*. \* プログラムを使用して、データベース・ローダーおよびインストール・プログラムを始動することもできます。60 ページの『データベースの作成』および 67 ページの『インストール・ウィザードによるコンポーネントのインストール』を参照してください。

**注:** ランチパッドのオプションの中には、ブラウザーがインストールされ、システム・パスで使用可能になっていることを必要とするものがあります。

ランチパッド実行可能ファイルは、以下に配置されています。

```
{CD_ROM/MEDIA DIR}/LaunchPad.*
```

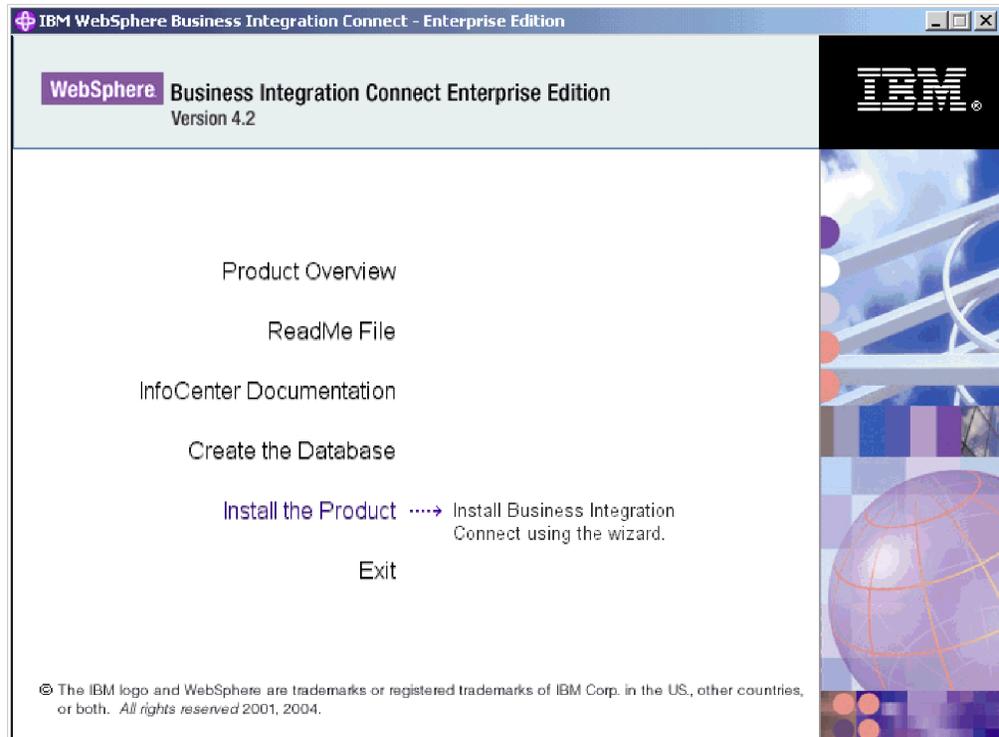


図 24. ランチパッド画面

## データベースの作成

Business Integration Connect には、データベース表をセットアップするインストール・ウィザードが含まれています。Database Loader ウィザードは、情報を収集して、表を作成し、表にデータを取り込んでくれます。また、表を作成するために使用する SQL ファイルを保存することもできます。その後、SQL ファイルを使用して表を作成し、データを取り込むことも可能です。SQL ファイルを手動で実行することにより、データベース管理者は、データを取り込む前にデータベース表を検討できます。

始める前に、ご使用のデータベース・サーバーがインストールされ、正しく構成され、稼働しているかどうかを検証します。

**注:** SQL が自動的に実行される場合は、データベースが常駐するのと同じサーバーで Database Loader を実行する必要があります。これにより、正しいホスト・アドレスが、データベースに対して設定されることが保証されます。

以下の手順では、Database Loader GUI を使用してデータベースを構成する方法について説明します。GUI を使用せずに Database Loader をインストールすることもできます。

**注:** データベース・サーバーとして DB2 を使用することを計画している場合は、DB2ADMIN Windows ユーザーとして SQL を (手動または自動で) 実行する必要があります。

データベース表をセットアップするには、次の手順を実行します。

1. データベースとして DB2 を使用している場合は、DB2ADMIN としてログインします。
2. WebSphere Business Integration Connect システム・プロダクト CD にある Database Loader CD-MediaDir¥DBLoader¥setup.exe ファイルを実行します。

Database Loader ウィザードが始動し、「ようこそ」画面が表示されます。「次へ」をクリックして先へ進みます。

3. 「ソフトウェア・ライセンス契約 (Software License Agreement)」画面で、ソフトウェア・ライセンス契約を読みます。契約条件に同意する場合は、「**ライセンス契約の条件に同意します。(I accept the terms of the license agreement)**」を選択します。「次へ」をクリックして先へ進みます。
4. 「ディレクトリー名」画面で、データベースをセットアップするときに Database Loader が使用するディレクトリーのパスおよびディレクトリー名を入力します。62 ページの図 25 を参照してください。

データベースおよびデータベースに格納されるすべてのアプリケーション・データのために十分なスペースがあるロケーションを選択します。

**注:** ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「**ファイル名を入力 (Enter file name)**」フィールドに「。」を 1 つ入力してください。「。」を入力しないと、「**ディレクトリーを選択 (Select a directory)**」画面から、この画面を起動した画面に戻りません。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

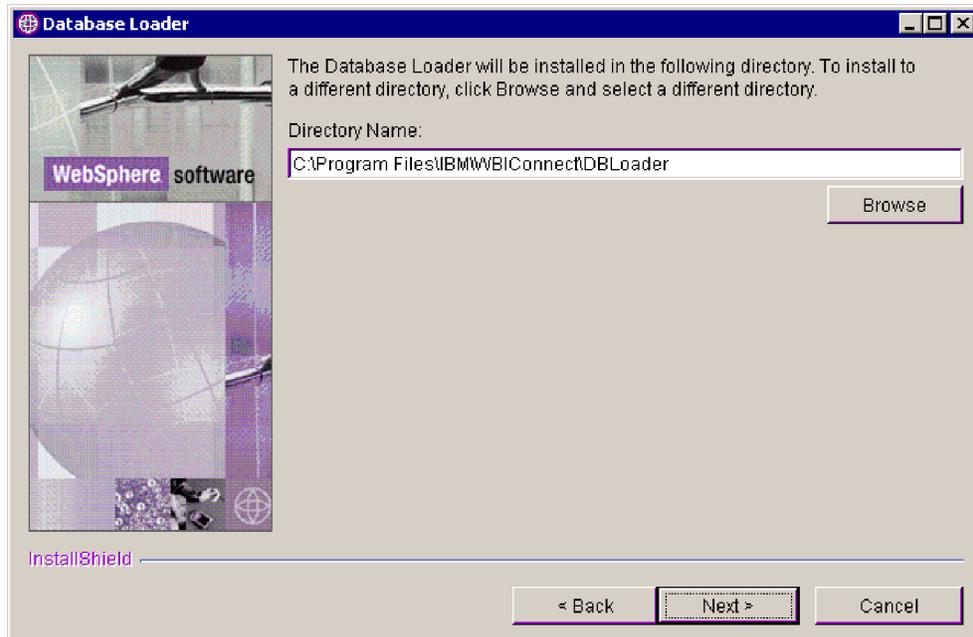


図 25. 「ディレクトリー名」画面

5. 「データベース選択 (Database Selection screen)」画面で、DB2 または Oracle のいずれか一方を選択してから、「次へ」をクリックします。図 26 を参照してください。

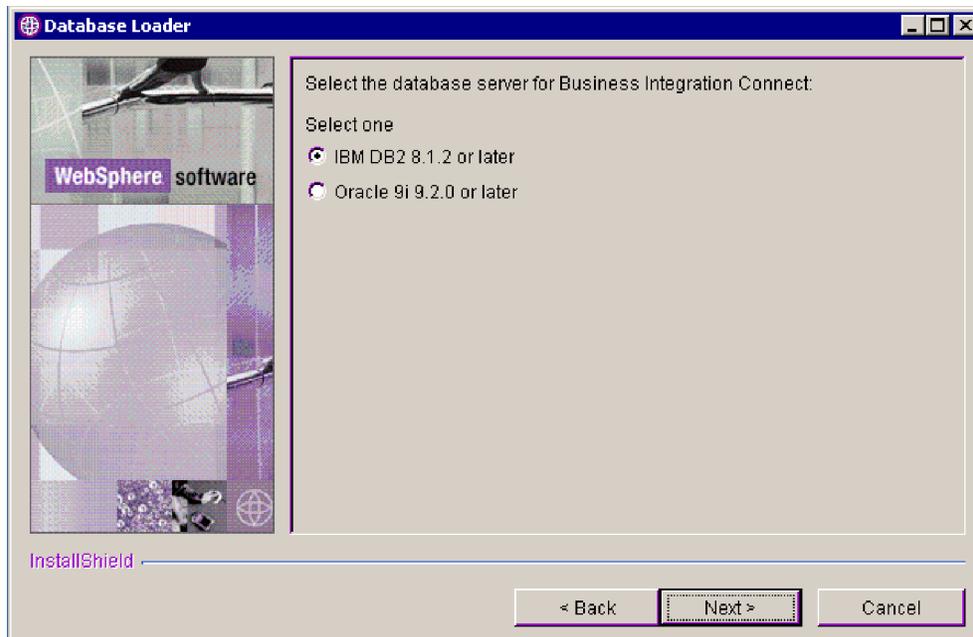


図 26. 「データベース・タイプの選択 (Database Type Selection)」画面

6. 「データベース情報」画面で、次のデータベース情報を入力し、入力を終えたら「次へ」をクリックします。

**DB2:**

DB2 を選択した場合は、「DB2 データベース情報 (DB2 Database Information)」画面が表示されます。以下の DB2 データベース情報を入力します。

- データベース名
- インスタンス名
- グループ名
- 所有者名
- 所有者のパスワード

**注:** これらの値のいずれかを変更した場合、SQL ファイルを実行する前に、それらの値がなければなりません。それらの値がない場合は、それらを手動で作成する必要があります。

**Oracle** の場合:

Oracle を選択すると、「Oracle データベース情報 (Oracle Database Information)」画面が表示されます。以下の Oracle データベース情報を入力します。

- 管理者ログイン ID
- 管理者パスワード
- Oracle SID
- スキーマ所有者ログイン
- スキーマ所有者パスワード

**注:** これらの値のいずれかを変更した場合、SQL ファイルを実行する前に、それらの値がなければなりません。それらの値がない場合は、それらを手動で作成する必要があります。

#### 7. 「データベース・ロケーション (Database Location)」画面が表示されます。

**注:** データベースとすべてのアプリケーション・データを保持するのに十分なスペースのあるファイル・システム・ロケーションを選択します。データベースのサイズは、Business Integration Connect の稼動中に大きくなります。

**DB2:**

「データベース・ロケーション (Database Location)」画面 (64 ページの図 27) で、RDBMS サーバー上のデータベースおよびデータベースの各表スペースのロケーションを入力します。テキスト・ボックスには絶対パスが入力されている必要があります。「次へ」をクリックして先へ進みます。

**注:** ディレクトリーを選択するためにブラウザする場合は、インストール・パスを選択した後で、「ファイル名を入力 (Enter file name)」フィールドに「。」を 1 つ入力してください。「。」を入力しないと、「ディレクトリーを選択 (Select a directory)」画面から、この画面を起動した画面に戻りません。

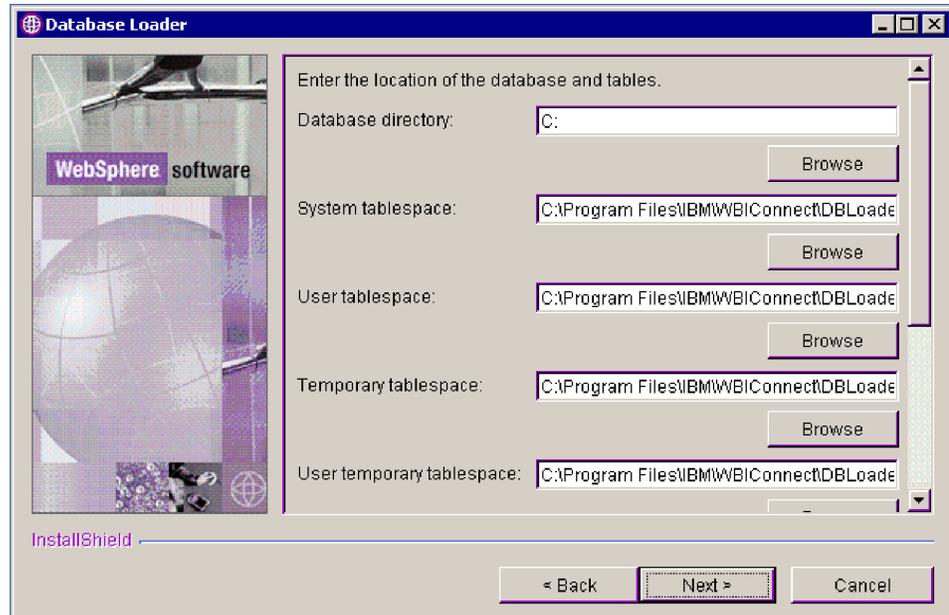


図 27. 「DB2 データベース・ロケーション (DB2 Database Location)」画面

**Oracle** の場合:

「データベース・ロケーション (Database Location)」画面 (65 ページの図 28) で、RDBMS サーバー上のデータベースおよびデータベースの各表スペースのロケーションを入力します。テキスト・ボックスには絶対パスが入力されている必要があります。「次へ」をクリックして先へ進みます。

**注:** ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「ファイル名を入力 (Enter file name)」フィールドに「。」を 1 つ入力してください。「。」を入力しないと、「ディレクトリーを選択 (Select a directory)」画面から、この画面を起動した画面に戻りません。

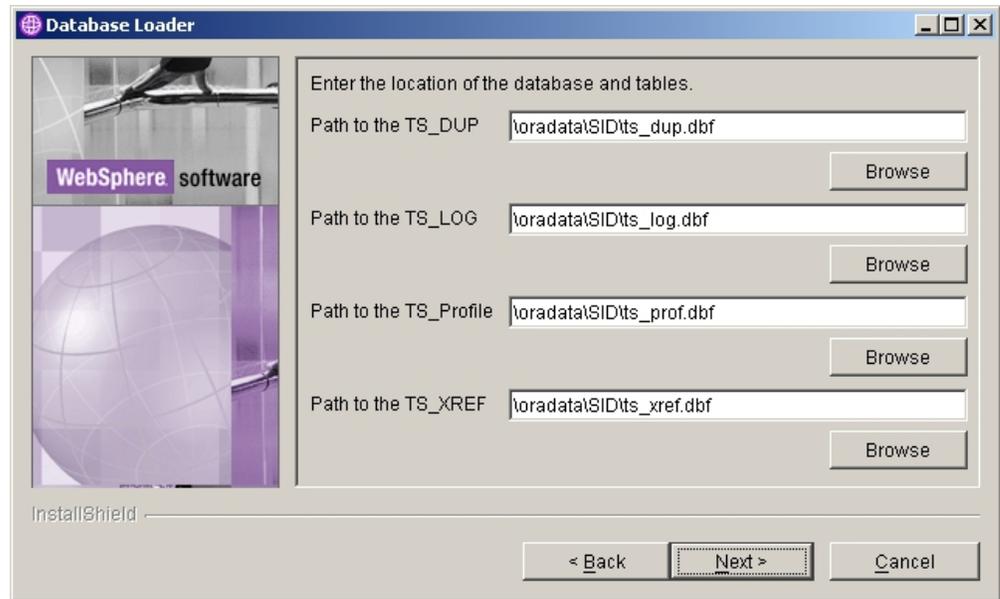


図 28. 「Oracle データベース・ロケーション (Oracle Database Location)」画面

8. 「コンポーネントの構成 (Component Configuration)」画面 (図 29) で、Business Integration Connect コンポーネントのログイン情報、および共通の共用ファイルのロケーションを入力します。

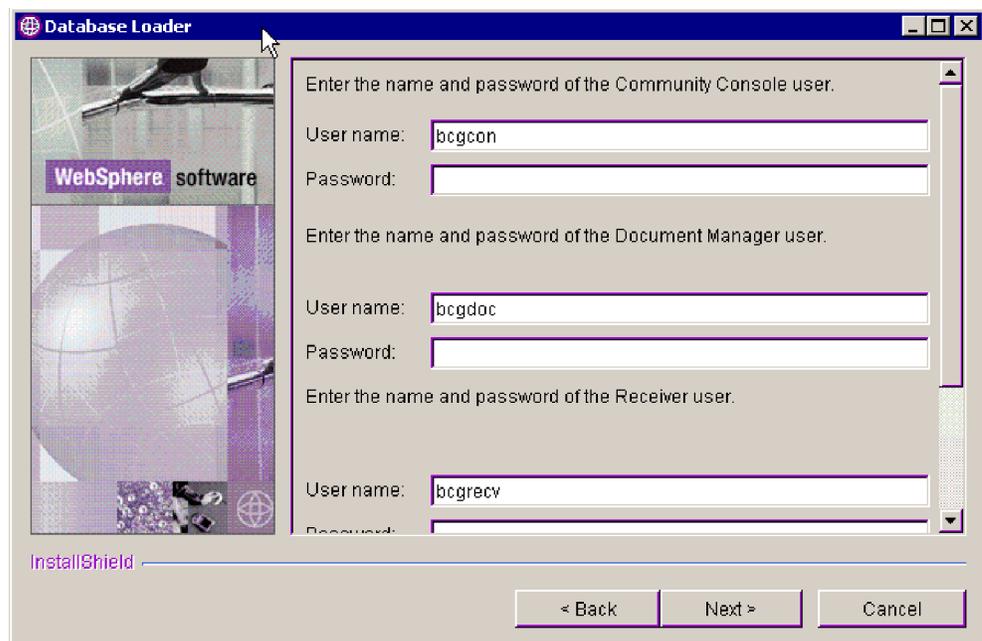


図 29. 「コンポーネントの構成 (Component Configuration)」画面

Community Console、Document Manager、および Receiver の「ユーザー名」テキスト・ボックスと「パスワード」テキスト・ボックスには、それぞれのコンポーネントのユーザー名とパスワードを入力します。これらのユーザーは、サーバーを構成したときに作成されました。

「グループ名」テキスト・ボックスには、Business Integration Connect ユーザーを含むグループの名前を入力します。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

システムが、共用情報のマウント・ポイント画面を表示します。

9. Business Integration Connect の主要コンポーネントが使用する共通の共用ファイルのロケーションを入力します。

注: ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「ファイル名を入力 (Enter file name)」フィールドに「.」を 1 つ入力してください。「.」を入力しないと、「ディレクトリーを選択 (Select a directory)」画面から、この画面を起動した画面に戻りません。

10. 「要約」画面が表示されます。Database Loader のインストール先を示している「要約」画面の情報を確認します。このロケーションが誤っている場合は、「戻る」をクリックして、前の画面へ戻ります。「要約」画面の情報が正しい場合は、「次へ」をクリックします。
11. ウィザードが表示する画面 (図 30) で、ユーザーは、Database Loader が SQL ファイルを作成するのみか、または作成した後、自動的に実行するかどうかを選択することができます。デフォルトの振る舞いは、SQL ファイルを作成するのみです。

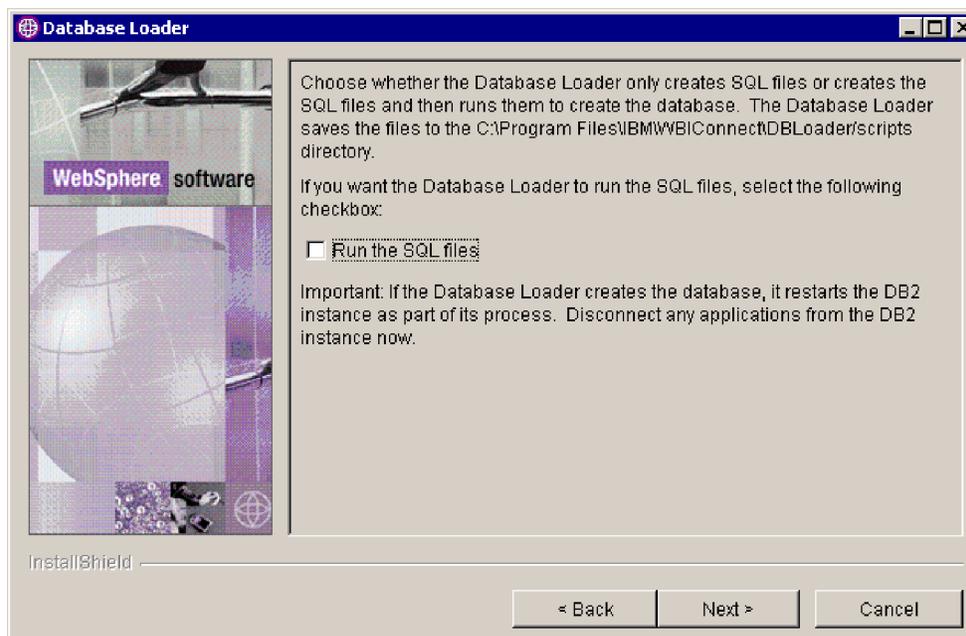


図 30. 「SQL ファイルの実行」画面

Database Loader が SQL ファイルを実行する場合は、以下の動作を行います。

- 表スペースの作成
- スキーマの作成
- 表、ビュー、シーケンス、プロシージャ、および関数を作成し、それらにメタデータを取り込む

- 表への許可の割り当て
- ストアード・プロシージャの作成

Database Loader はルーチンの一部として DB2 インスタンスを再始動します。このため、Business Integration Connect データベースをセットアップする DB2 インスタンスを使用しているすべてのアプリケーションを切断する必要があります。

ユーザーに代わって Database Loader にファイルを実行させる場合は、「**SQL ファイルの実行**」チェック・ボックスを選択します。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

12. Database Loader によって「完了」ボタンが使用可能にされたら、ボタンをクリックします。
13. SQL を手動で実行している場合の詳細については、(Database Loader によってインストールされる) SQL ディレクトリーの Instructions.txt ファイルを参照してください。

Business Integration Connect データベースのセットアップが完了すると、Business Integration Connect のコンポーネントをインストールすることができます。

## インストール・ウィザードによるコンポーネントのインストール

Business Integration Connect には、Community Console、Receiver、および Document Manager の 3 つの主要なコンポーネントがあります。3 つのコンポーネントはすべて、共通のコンテンツを共有します。コンポーネントおよび共通のコンテンツを単一のサーバーにインストールするか、各コンポーネントを別々のサーバーにインストールすることができます。最低でも 1 つのサーバーに、各コンポーネントの 1 つのインスタンスをインストールする必要があります。さまざまなコンポーネントを別々のサーバーに配置する計画の立て方については、4 ページの『環境の計画』および 8 ページの『接続形態』を参照してください。

**注:** 複数のマシンに Business Integration Connect をインストールする場合は、すべてのマシンの共用 common フォルダで、同じドライブ名とディレクトリー構造を使用する必要があります。

開始する前に、前提条件ソフトウェアのインストールと構成が正しく行われていることを確認してください。ソフトウェアの前提条件については、1 ページの『プラットフォーム、ハードウェア、およびソフトウェアの要件』の、すべての Business Integration Connect サーバーの要件についての表を参照してください。また、ソフトウェアの構成方法については、53 ページの『インストール済み前提条件の検証および構成』を参照してください。

また、Business Integration Connect データベースのセットアップも完了している必要があります。詳しくは、60 ページの『データベースの作成』を参照してください。最後に、キュー・マネージャーとリスナーを含め、ご使用のデータベース・サーバーと WebSphere MQ が稼動している必要があります。

以下の手順では、InstallShield ウィザード GUI を使用してコンポーネントをインストールする方法について説明しています。

**注:** コンポーネントは、コマンド行を使用してもインストールできます。詳しくは、80 ページの『コマンド行によるコンポーネントのインストール』を参照してください。

Business Integration Connect をインストールするには、次のステップ手順を実行します。

1. 管理者特権のユーザーとしてログインします。

ハブ・インストーラーでは、Windows サービスを正しく作成するために管理者特権が必要です。

2. WebSphere Business Integration Connect システム・プロダクト CD にある CD-MediaDir\hub\setup.exe ファイルを実行します。

ウィザードが始動し、「ようこそ」画面が表示されます。「次へ」をクリックして先へ進みます。

3. 「ソフトウェア・ライセンス契約 (Software License Agreement)」画面で、ライセンス契約を読みます。契約条件に同意する場合は、「**ライセンス契約の条件に同意します。(I accept the terms of the license agreement)**」をクリックします。「次へ」をクリックして先へ進みます。
4. 「ディレクトリー名」画面 (69 ページの図 31) で、Business Integration Connect がインストールされているディレクトリーのパスとディレクトリー名を入力します。「次へ」をクリックして先へ進みます。

**注:** ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「**ファイル名を入力 (Enter file name)**」フィールドに「。」を 1 つ入力してください。「。」を入力しないと、「**ディレクトリーを選択 (Select a directory)**」画面から、この画面を起動した画面に戻りません。

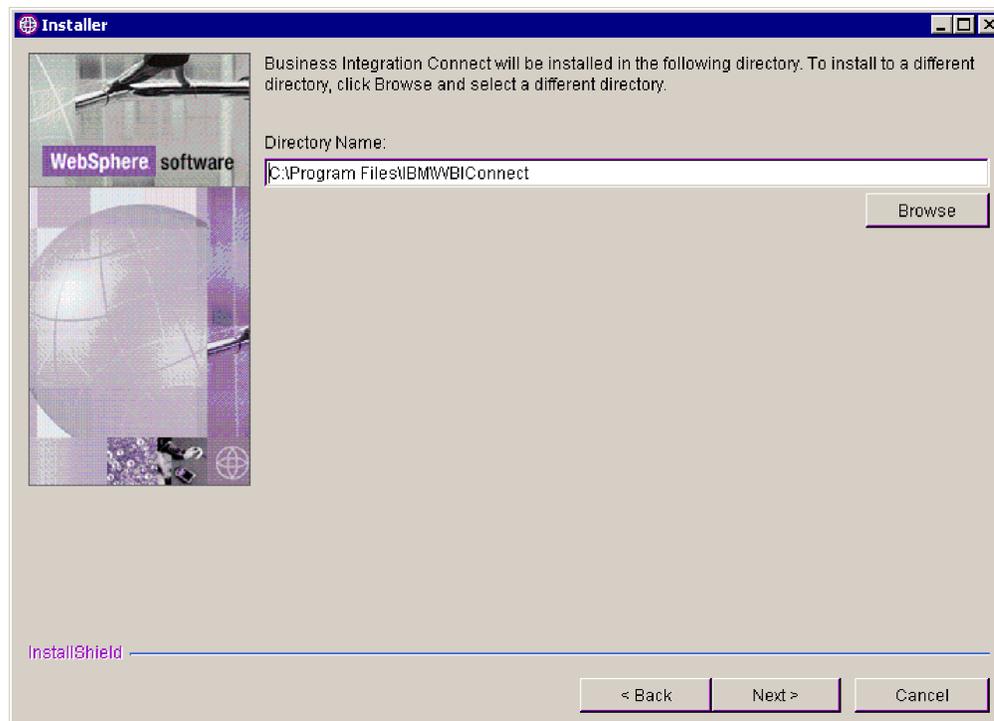


図 31. 「ディレクトリー名」画面

5. 「コンポーネント選択」画面 (図 32) で、サーバーにインストールするコンポーネントを選択します。複数のコンポーネントを選択できます。「次へ」をクリックして先へ進みます。

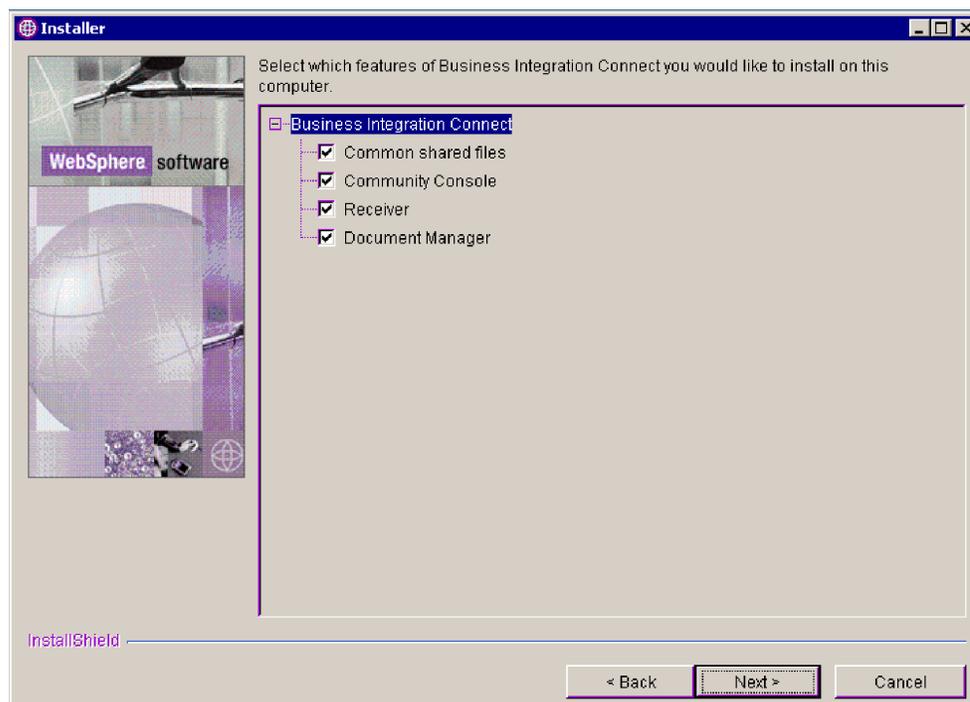


図 32. 「コンポーネント選択」画面

残りの手順では、すべてのコンポーネントをサーバーにインストールすることを前提に説明します。すべてのコンポーネントをインストールしない場合、残りの手順で説明する一部の画面は表示されません。

6. 「データベース・サーバーの選択 (Database Server Selection)」画面 (図 33) で、使用するデータベース・サーバーを選択します。DB2 8.1.2 以降、または Oracle 9i.9.2.0 以降を選択できます。「次へ」をクリックして先へ進みます。

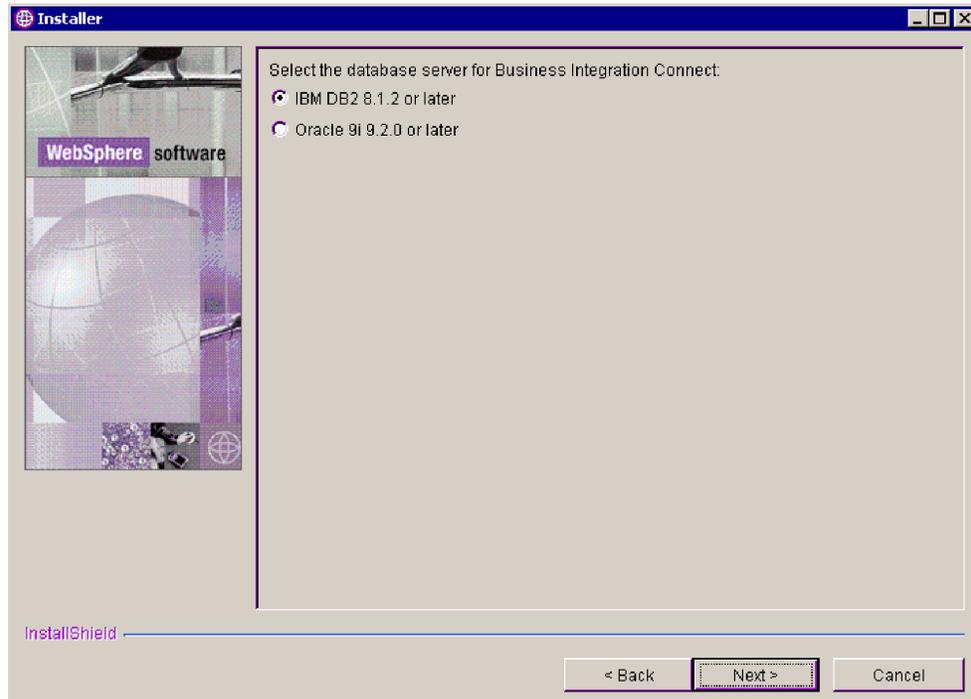


図 33. 「データベース・サーバーの選択 (Database Server Selection)」画面

7. 「データベース情報」画面が表示されます。使用するデータベースとして DB2 を選択した場合は、この手順の DB2 に固有の指示に従って操作します。使用するデータベースとして Oracle を選択した場合は、この手順の Oracle に固有の指示に従って操作します。

#### **DB2:**

DB2 を選択した場合は、「DB2 データベース情報 (DB2 Database Information)」画面が表示されます。71 ページの図 34 を参照してください。

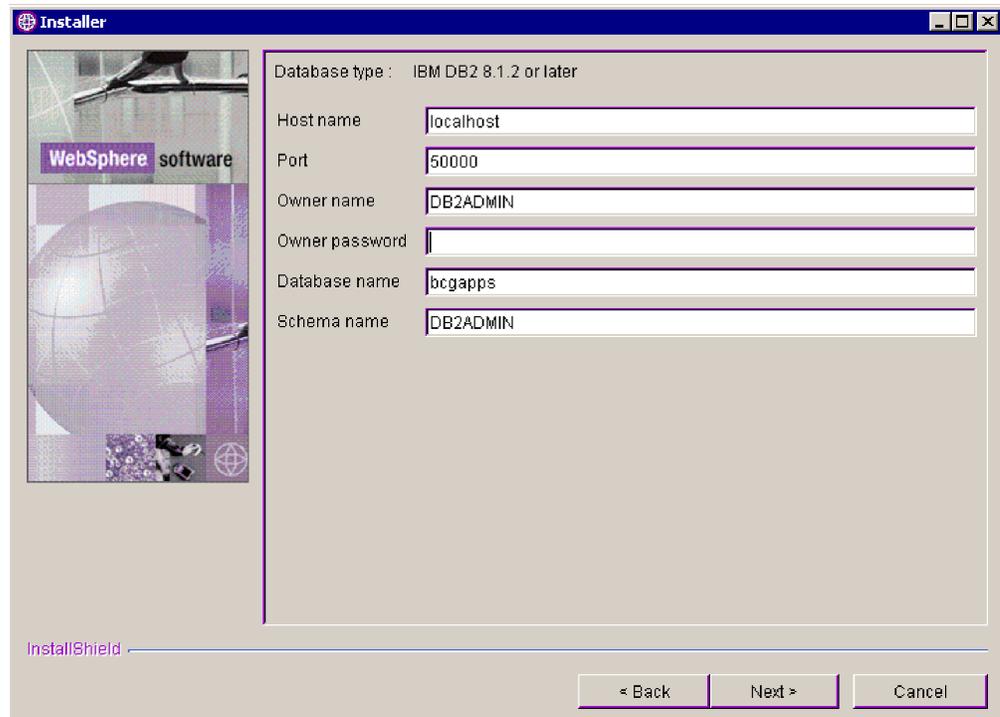


図 34. 「DB2 データベース情報 (DB2 Database Information)」画面

DB2 データベースに関する要求情報を入力します。

DB2 が現在のシステムに収容されていない場合は、「ホスト名」テキスト・ボックスで、「localhost」を DB2 が収容されているシステム名に置き換えます。

「ポート」テキスト・フィールドには、DB2 インスタンスが使用しているポートを入力します。DB2 インスタンスが使用しているポートを調べるには、DB2 Control Center (GUI) を使用してプロパティを判別するか、コマンド行 `db2 get dbm cfg` を入力します。この情報 (DB2 構成) は、Database Loader によって "system temp"/WBICconnect/logs ディレクトリーにも保管されます。デフォルトのポートは 50000 です。

DB2 の場合のパスは次のとおりです。

```
C:\Documents and Settings\db2admin\Local Settings\Temp\WBICconnect\logs
```

Oracle の場合のパスは次のとおりです。

```
C:\Documents and Settings\Administrator\Local Settings\Temp\WBICconnect\logs
```

「所有者名」、「所有者パスワード」、「データベース名」、および「スキーマ名」テキスト・フィールドに、要求情報を入力します。これらの情報は、Database Loader のインストール時にデータベースを定義するために使用された名前です。60 ページの『データベースの作成』を参照してください。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

## Oracle の場合:

Oracle を選択すると、「Oracle データベース情報 (Oracle Database Information)」画面が表示されます。図 35 を参照してください。

Oracle データベースに関する必須情報を入力します。デフォルトのポートは 1521 です。

**注:** JDBC ドライバーの絶対パスと名前は、このコンピューター上のドライバーの正しいバージョンを指し示している必要があります。ドライバーは、Oracle 9i がインストールされたディレクトリー・ツリーにあります。ドライバーは、<http://otn.oracle.com/software/tech/java/sqlj-jdbc/index.html> からダウンロードできます。「JDBC Driver Downloads」のセクションで、「Oracle 9i Release 2 drivers」をクリックします。稼働している Oracle 9i 9.2.0 サービス・バージョンに一致するドライバー・バージョンを間違わずに選択してください。

**注:** ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「ファイル名を入力 (Enter file name)」フィールドに「.」を 1 つ入力してください。「.」を入力しないと、「ディレクトリーを選択 (Select a directory)」画面から、この画面を起動した画面に戻りません。

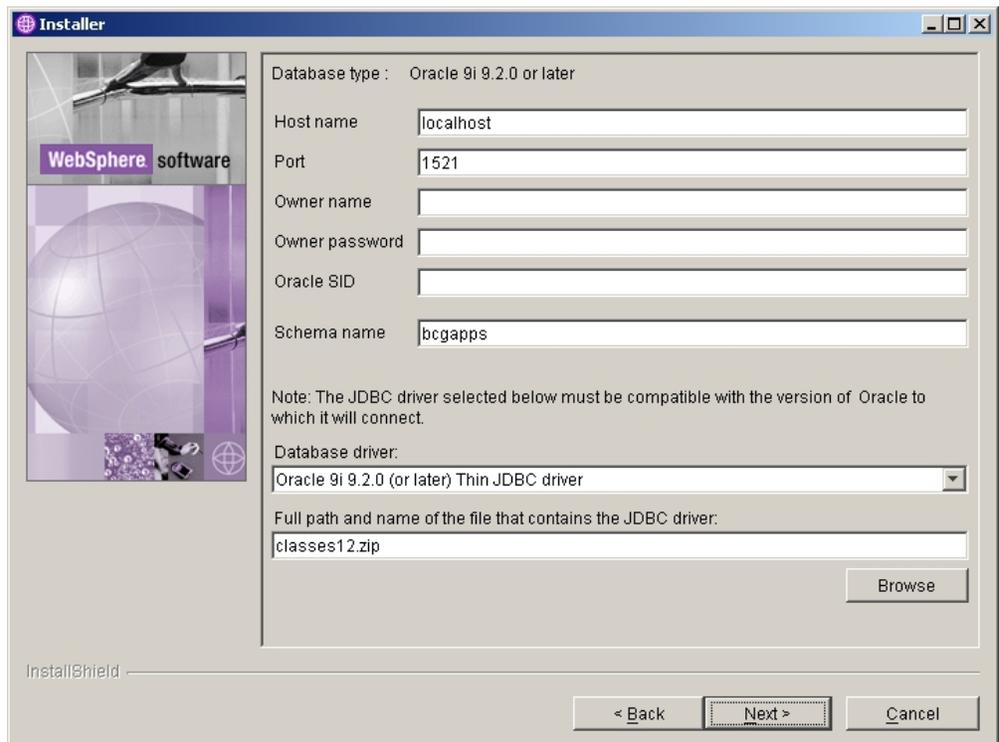


図 35. 「Oracle データベース情報 (Oracle Database Information)」画面

「データベース接続確認 (Database Connection Confirmation)」画面が表示されます。73 ページの図 36 を参照してください。接続が正常に行われた場合、「Table (表)」、「ビュー (View)」、「関数 (Function)」、および「プロシージ

ヤー (Procedure)」のカウンタ情報に注意し、確認します。接続が失敗した場合は、情報画面の指示を検討するか、データベース資料を参照するかしてエラー・コードに対応します。

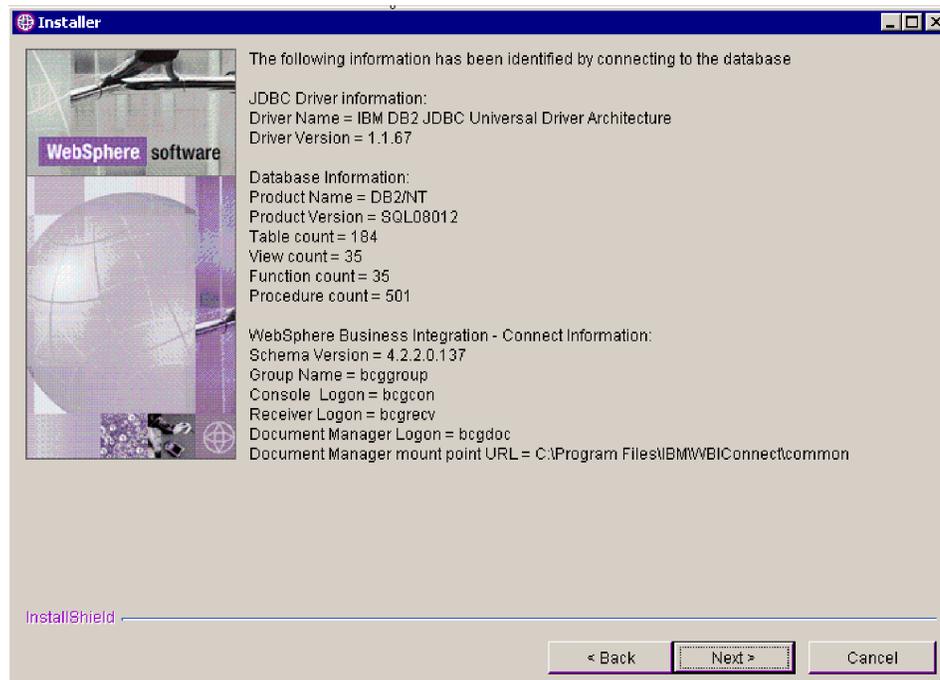


図 36. 「データベース確認 (Database confirmation)」画面

8. 「共通情報ディレクトリー」画面で、共通の共用コンポーネントのロケーションを入力します。この値は、Database Loader のインストールの際に使用されたディレクトリー・ロケーションと一致しなければなりません。

**注:** ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「ファイル名を入力 (Enter file name)」フィールドに「.」を 1 つ入力してください。「.」を入力しないと、「ディレクトリーを選択 (Select a directory)」画面から、この画面を起動した画面に戻りません。

9. 「WebSphere MQ Server」画面で、ご使用の WebSphere MQ サーバーに関する情報を入力します。74 ページの図 37 を参照してください。

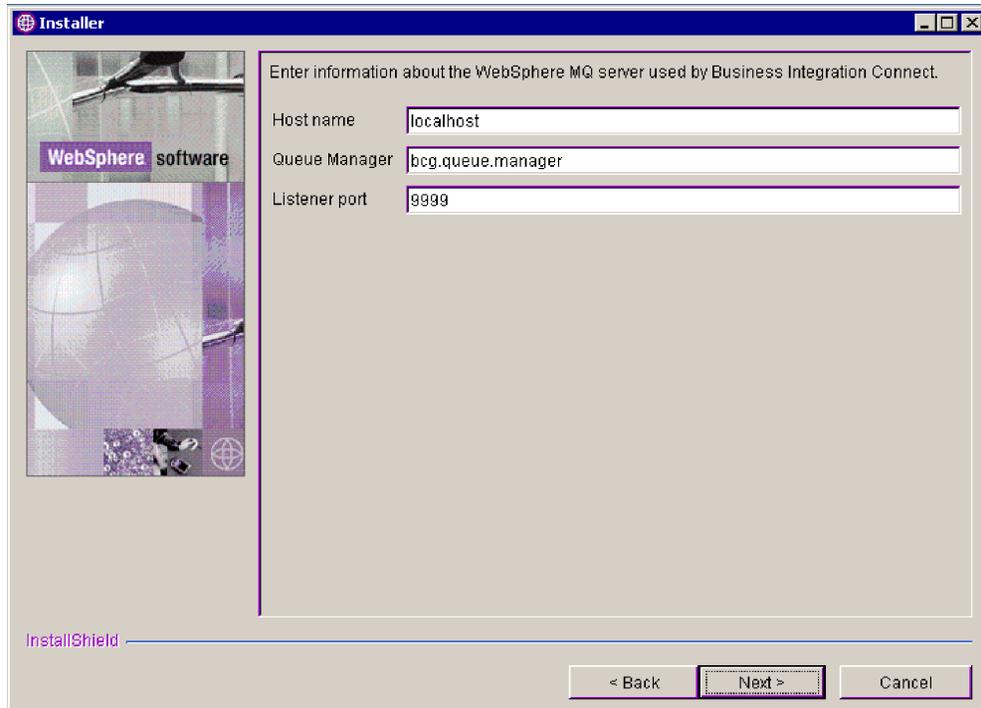


図 37. 「WebSphere MQ Server」画面

WebSphere MQ が現在のマシンに収容されていない場合は、「ホスト名」テキスト・ボックスで、「localhost」を WebSphere MQ が収容されているシステム名に置き換えます。

「キュー・マネージャー」テキスト・ボックスで、デフォルト名を WebSphere MQ を構成するときに使用した名前に置き換えます (55 ページの『WebSphere MQ の構成』を参照)。

「リスナー・ポート」テキスト・ボックスには、リスナーが使用しているポート番号を入力します (55 ページの『WebSphere MQ の構成』を参照)。デフォルトのポートは 9999 です。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

10. 「Windows Service のインストール (Windows Service Installation)」画面が表示されます。Business Integration Connect の機能を Windows サービスとして登録する場合は、「**Windows Service としてインストールする (Install as Windows Service)**」チェック・ボックスを選択します。75 ページの図 38 を参照してください。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

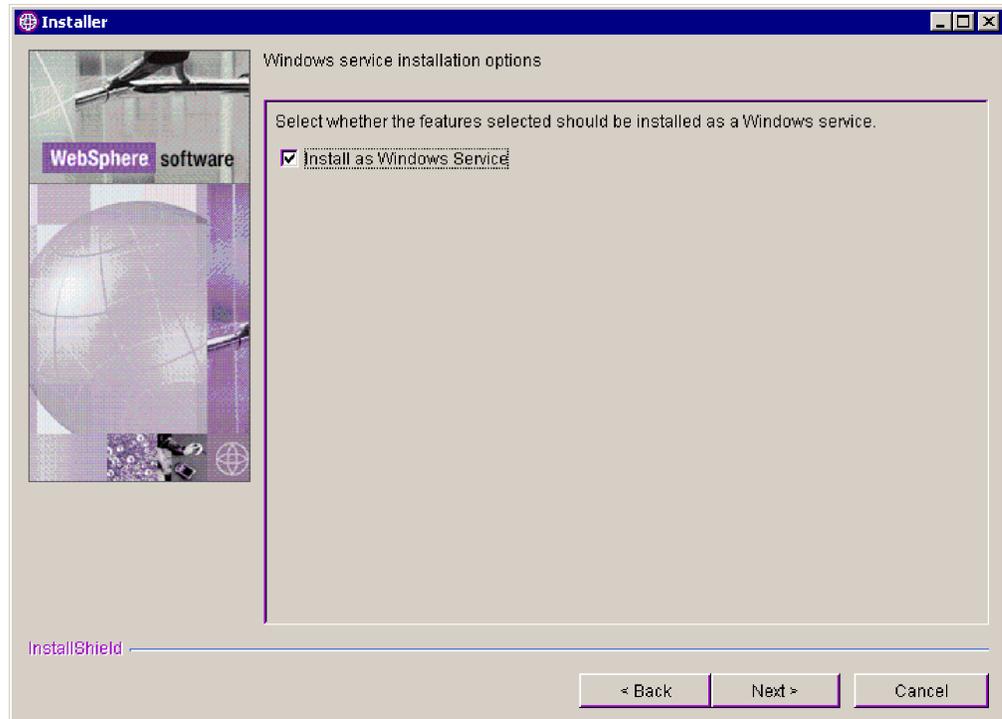


図 38. 「Windows Service のインストール (Windows Service Installation)」画面

11. Community Console のインストールを選択した場合は、「Community Console の構成 (Community Console configuration)」画面を使用して構成します。図 39 を参照してください。

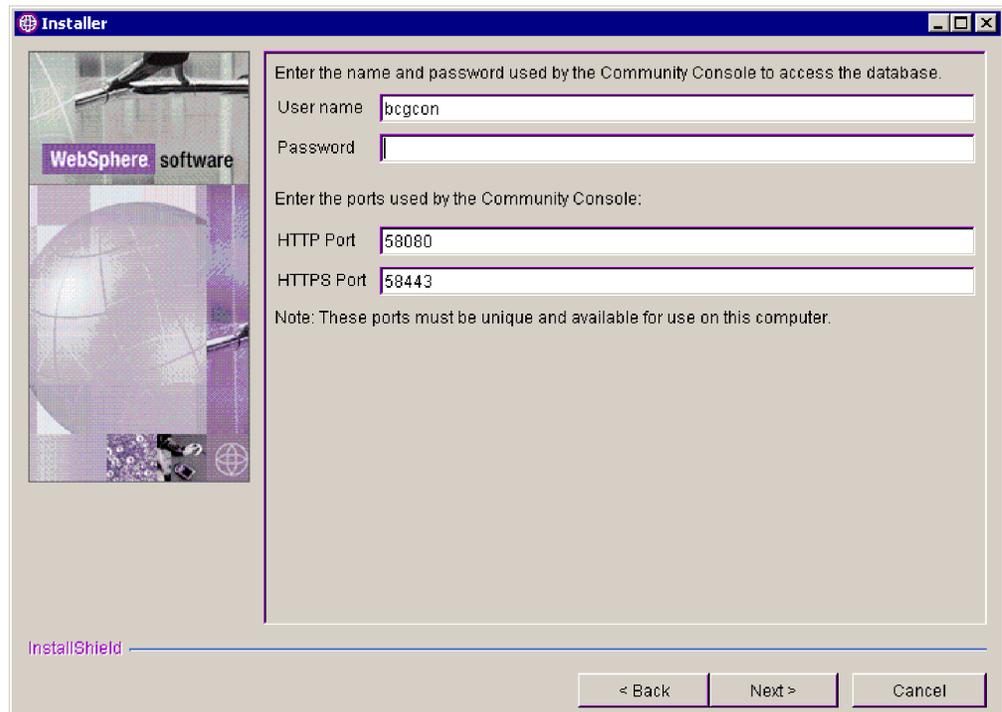


図 39. 「Community Console」画面

「**ユーザー名**」テキスト・ボックスには、Community Console コンポーネントがデータベースにログインするために使用するユーザー ID を入力します。

「**パスワード**」テキスト・ボックスには、ユーザー名に関連したパスワードを入力します。入力したパスワードが正しいことを確認してください。パスワードに誤りがあると、Community Console は機能しません。

「**HTTP ポート (HTTP Port)**」テキスト・ボックスには、コンポーネントがメッセージを listen するポート番号を入力します。Community Console、Receiver、および Document Manager には固有のポート番号が割り当てられ、それらのポートはこのコンピューターで使用可能な状態になっている必要があります。デフォルトのポートは 58080 です。

「**HTTPS ポート (HTTPS Port)**」テキスト・ボックスには、コンポーネントがメッセージを listen するセキュア・ポートの番号を入力します。Community Console、Receiver、および Document Manager には固有のポート番号が割り当てられ、それらのポートはこのコンピューターで使用可能な状態になっている必要があります。デフォルトのポートは 58443 です。

「**次へ**」をクリックして先へ進みます。

**注:** データベース接続が失敗すると、データベース情報画面が表示されます。データベース情報画面の指示を検討するか、データベース資料を参照して、エラー・コードに対応します。

- Receiver コンポーネントまたは Document Manager コンポーネントを選択した場合は、それぞれの構成画面を使用して構成します。これらの画面には、「Community Console の構成 (Community Console Configuration)」画面と同じフィールドがあります。3 つのコンポーネント (Community Console、Receiver、および Document Manager) すべてで、別々の HTTP ポートと HTTPS ポートを使用する必要があります。77 ページの図 40 および 77 ページの図 41 を参照してください。

**注:** 別々のマシンに Receiver と Document Manager をインストールする場合は、Receiver マシンに Document Manager マシンによって解決可能なホスト名を付ける必要があります。

完了したら「**次へ**」をクリックします。

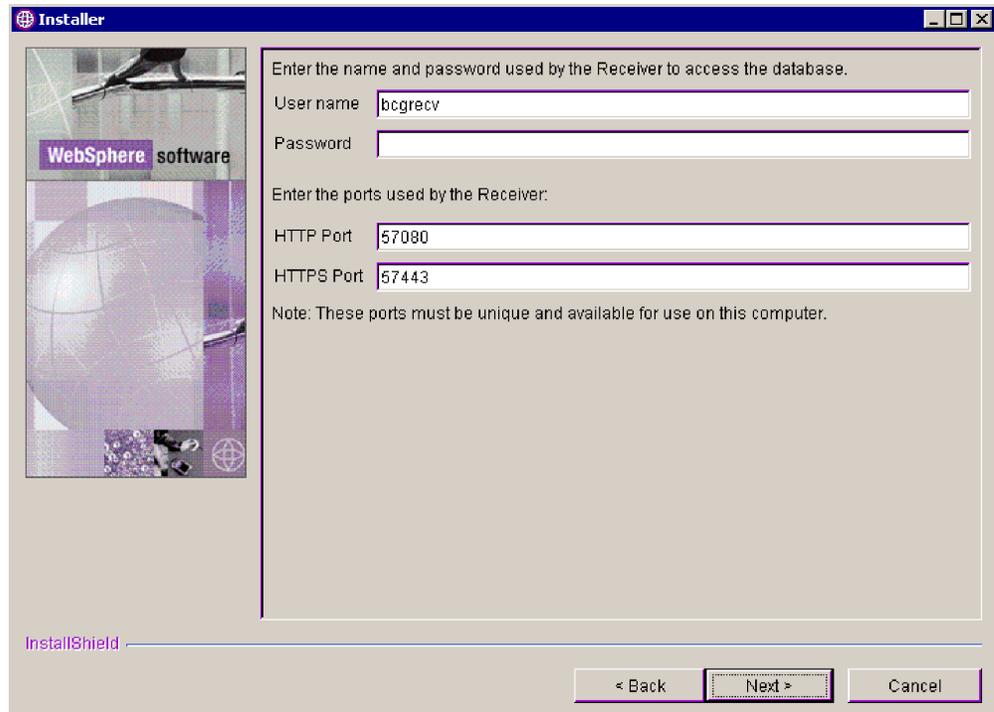


図 40. 「Receiver の構成 (Receiver Configuration)」画面

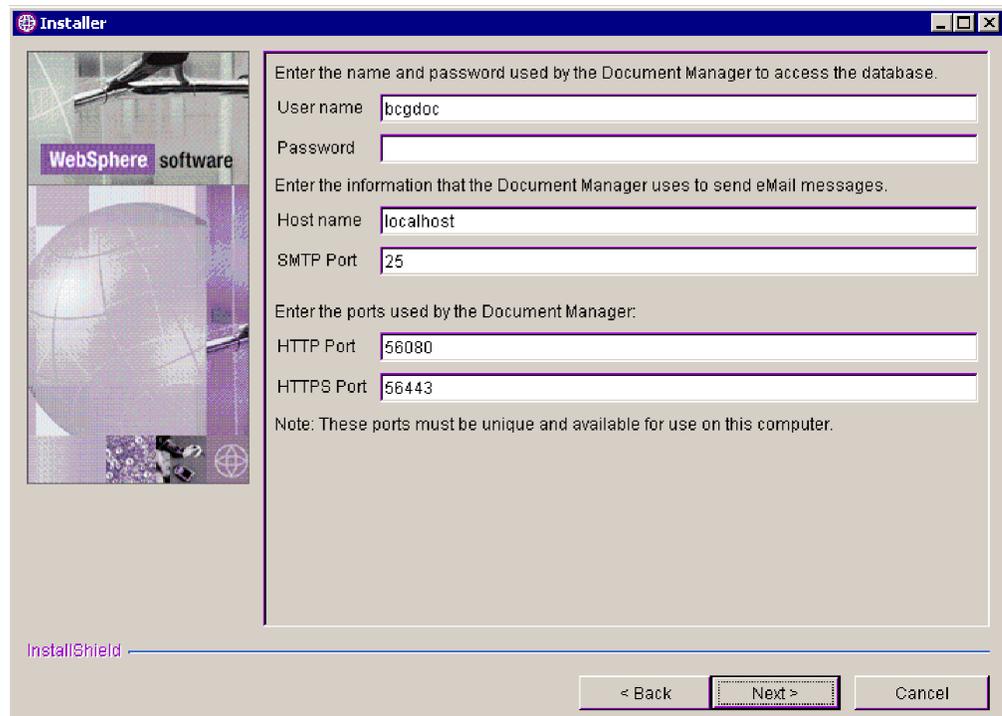


図 41. 「Document Manager の構成 (Document Manager Configuration)」画面

13. 「RosettaNet の構成 (RosettaNet Configuration)」画面 (78 ページの図 42) で、RosettaNet メッセージの連絡先情報を入力します。これらのテキスト・フィールドには値が必要です。正しい値が不明の場合はデフォルト値を使用してくだ

さい。この情報は、RosettaNet を使用している場合に必要となるもので、すべてのインストールで推奨されています。

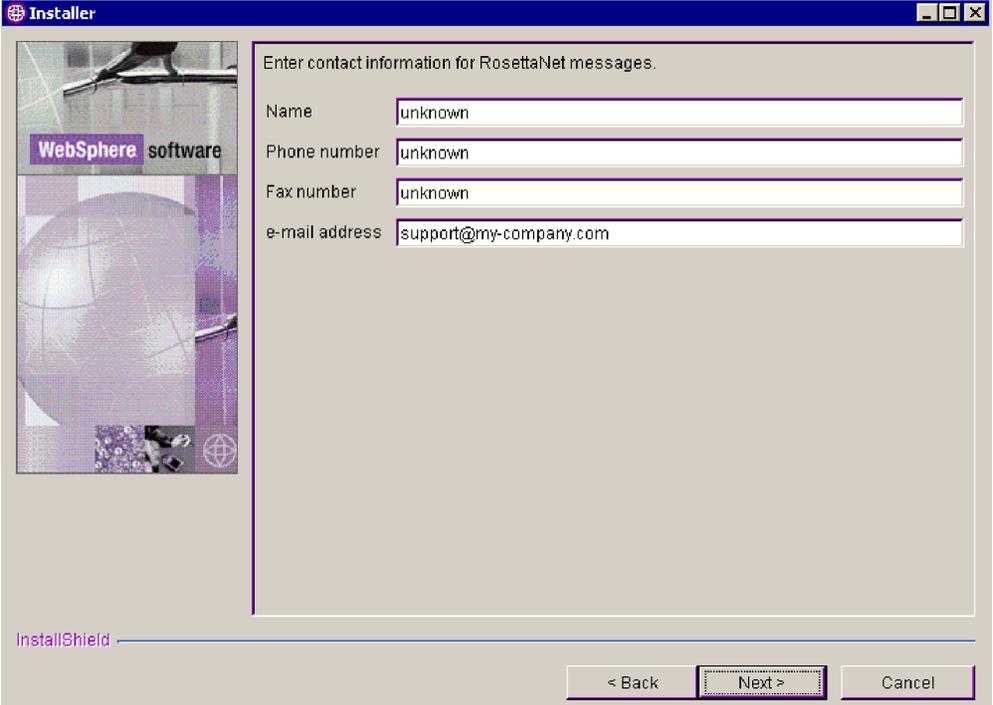


図 42. 「RosettaNet の構成 (RosettaNet Configuration)」画面

「名前」テキスト・ボックスで、RosettaNet の問題が発生した場合の連絡先担当者の名前を入力します。

「電話番号」および「FAX 番号」テキスト・ボックスには、RosettaNet 担当者の電話番号と FAX 番号を入力します。

「E メール・アドレス」テキスト・ボックスには、RosettaNet の連絡先 E メール・アドレスを入力します。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

14. 「アラート通知 (Alert Notification)」画面 (79 ページの図 43) で、Business Integration Connect を構成して、E メールでアラートを送信できるようにします。値が必要です。正しい値が不明の場合はデフォルト値を使用してください。

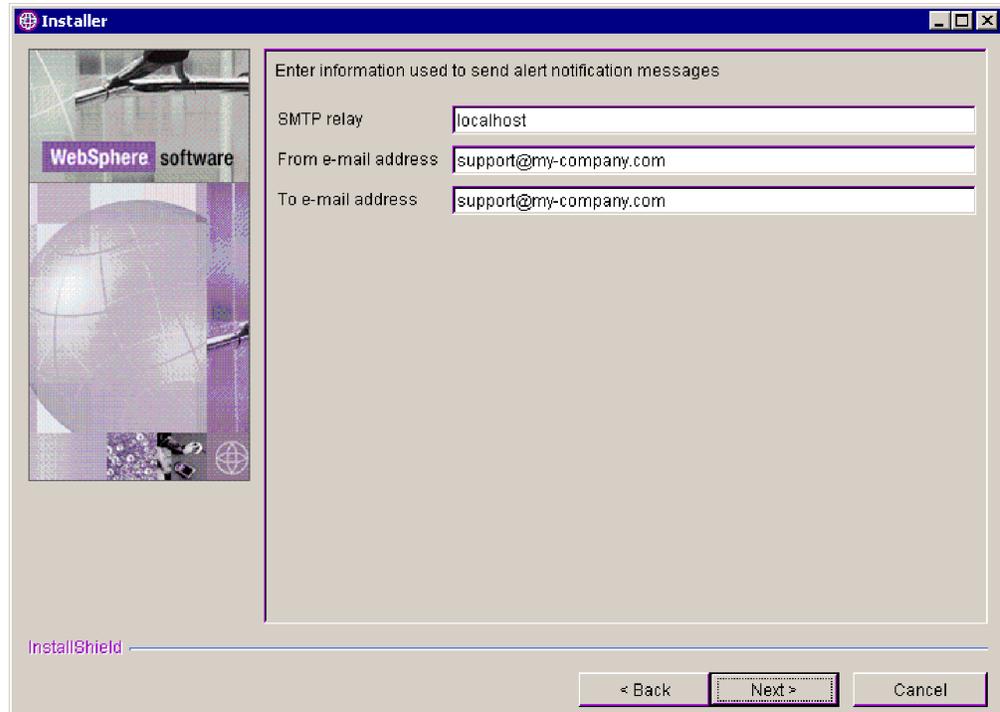


図 43. 「アラート通知 (Alert Notification)」画面

「SMTP リレー」テキスト・ボックスには、SMTP サーバーのロケーションを入力します。

「送信元 E メール・アドレス」テキスト・ボックスで、E メールを送信するときに Business Integration Connect が使用する E メール・アドレスを入力します。

「送信先 E メール・アドレス」テキスト・ボックスで、アラート通知に対応するユーザーが、E メールを送信するときに使用する宛先の E メール・アドレスを入力します。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

15. 「要約」画面では、インストールされるコンポーネントを示す情報を確認します。表示された情報のいずれかに誤りがある場合は、「戻る」をクリックして前の画面に戻ります。「要約」画面の情報がすべて正しい場合は、「次へ」をクリックします。
16. Business Integration Connect インストーラーにより、選択されたコンポーネントがインストールおよび構成されます。このタスクが完了すると、インストーラーで「完了」ボタンが使用可能になります。「完了」をクリックします。
17. `console%was%wbic%config%bcg_console.properties` を開きます。値として、`bcg.co.db.schema=DB2ADMIN` が設定されているかどうかを検証します。
18. `receiver%was%wbic%config%bcg_receiver.properties` を開きます。値として、`bcg.co.db.schema=DB2ADMIN` が設定されているかどうかを検証します。
19. `router%was%wbic%config%bcg.properties` を開きます。値として、`bcg.co.db.schema=DB2ADMIN` が設定されているかどうかを検証します。

Business Integration Connect コンポーネントをインストールする各サーバー上で、この手順を繰り返します。共通コンテンツは、一度しかインストールする必要はありません。ファイル共有システムによって、すべてのコンピューターで使用可能になるためです。

すべての Business Integration Connect コンポーネントのインストールが完了したら、80 ページの『コマンド行によるコンポーネントのインストール』を参照してください。

---

## コマンド行によるコンポーネントのインストール

Business Integration Connect には、コマンド行を使用してコンポーネントをインストールする方法もあります。この機能では、すべてのインストール・オプションの値を提供するオプション・ファイルが必要です。提供されたサンプル ISS ファイルを変更するか、GUI を使用してインストールを実行し、選択項目を記録して、カスタム・オプション・ファイルを作成するかのいずれかを行うことができます。Database Loader のサンプル・ファイルは、CD の Database Loader ディレクトリーまたはアーカイブされていないインストール・イメージにあります。また Business Integration Connect のサンプル・ファイルは、CD のハブ・ディレクトリーまたはアーカイブされていないインストール・イメージにあります。

ファイルの各オプションは別の行に表示されています。また、それらの前には、設定を説明し、オプション例を示すコメントが付いています。サンプル・ファイルのオプション値は、GUI に示されるデフォルト値です。パスワードやホスト名などのいくつかの設定では、ローカル構成に関する情報が必要です。

インストールまたはアンインストールのプログラムを実行しているときに、ユーザー独自のオプション・ファイルを生成することもできます。したがって、このファイルを使用して、インストールおよびアンインストールを繰り返すことができます。詳しくは、次のセクションの 82 ページの『サイレント・インストールの実行』を参照してください。

コマンド行を使用して Database Loader または Business Integration Connect をインストールするには、以下のようにします。

1. Database Loader をインストールする場合は、DB2ADMIN としてログインします。
2. Business Integration Connect をインストールする場合は、管理者としてログインします。
3. コードをインストールするマシン上で、コマンド行を開きます。
4. インストール実行可能プログラムのロケーションに移動します。例えば、次のようになります。

```
cd DBLoader
```

または

```
cd hub
```

5. コマンドを以下のように入力してください。

```
setupWindows -options "<options file name>"
```

<options file name> は、インストーラーが使用するオプション値を含むファイルを示します。

このコマンドを使用すると、インストーラーに標準の GUI インストールに表示されるすべての画面が表示され、それぞれの画面のフィールドすべてには、オプション・ファイルにリストされている値が入力されています。

## オプション・ファイルの生成

ユーザーのインストール・システムに固有の設定を含むオプション・ファイルを生成するには、以下のステップに従います。

1. 管理者としてログインします。
2. コードをインストールするマシン上で、コマンド行を開きます。
3. インストール実行可能プログラムのロケーションに移動します。例えば、次のようになります。

```
cd DBLoader
```

または

```
cd hub
```

4. コマンドを以下のように入力してください。

```
setup -options-record "<options file name>"
```

<options file name> は、インストーラーが使用するオプション値を含むファイルを示します。options-record パラメーターの後にディレクトリー名を指定することもできます。

インストーラーは、GUI を使用して実行されます。インストーラーは、Database Loader または Business Integration Connect をインストールし、指定されたオプション・ファイルをインストール・ディレクトリー (デフォルト値を使用した場合は {WBIC INSTALL DIR}\¥IBM¥WBICConnect¥DBLoader または {WBIC INSTALL DIR}\¥IBM¥WBICConnect¥) に置きます。テキスト・エディターでこのファイルを編集するか、それを変更せずに使用して、製品をもう一度インストールすることができます。または、別のマシンに重複のインストール・システムを作成することもできます。

製品をインストールせずにオプション・ファイルだけを生成するには、options-record パラメーターを、-options-template コマンドに置き換えます。このコマンドは、製品のインストールに必要なすべての記入項目を含んだオプション・ファイルを作成します。ただし、これらの各記入項目は、ユーザーに固有のインストール設定に変更する必要があります。

---

## サイレント・インストールの実行

Database Loader および Business Integration Connect は、GUI やユーザー対話のいずれも使用せずに、インストールおよびアンインストールを行うことができます。サイレント・インストールは、複数システムに同じ設定でコンポーネントをインストールする場合、ソフトウェア配布製品を使用する場合、またはグラフィカル環境が使用できない場合に、特に有効です。

Database Loader または Business Integration Connect のサイレント・インストールを行うには、以下のステップに従います。

1. Database Loader をインストールする場合は、DB2ADMIN としてログインします。
2. Business Integration Connect をインストールする場合は、管理者としてログインします。
3. コードをインストールするマシン上で、コマンド行を開きます。
4. インストール実行可能プログラムのロケーションに移動します。例えば、次のようになります。

```
cd DBLoader
```

または

```
cd hub
```

5. コマンドを以下のように入力してください。

```
setupWindows -options "<options file name>" -silent
```

<options file name> は、インストーラーが使用するオプション値を含むファイルを示します。

インストーラーは、ユーザー対話または GUI なしに動作します。インストールが完了すると、インストーラーは、コマンド・プロンプトに戻ります。

---

## Business Integration Connect のアップグレード

詳細な手順については、42 ページの『Business Integration Connect のアップグレード』を参照してください。

---

## Oracle JDBC ドライバーの更新

何らかの理由で、Oracle のサービス・レベルを変更した場合、例えば、フィックスパックを適用した場合などは、Oracle JDBC ドライバーの互換性を確認する必要があります。必要であれば、このセクションの手順に従って、Oracle JDBC ドライバーを更新してください。

Oracle JDBC ドライバーを置き換えるには、以下のステップを実行します。

同じディレクトリーにある Oracle JDBC ドライバーを置き換えるが、ドライバー・ファイルへの絶対パス名が同じまま残る場合は、次の手順を実行します。

1. Business Integration Connect の Console、Receiver、および Document Manager を停止します。
2. Oracle JDBC ドライバー・ファイル classes12.zip を置き換えます。
3. Business Integration Connect の Console、Receiver、および Document Manager を開始します。

Oracle JDBC ドライバーを変更すると、ドライバー・ファイルへの絶対パス名も変更される場合は、次の手順を実行します。

1. Business Integration Connect の Console、Receiver、および Document Manager を停止します。
2. Console、Receiver、および Document Manager の各コンポーネントごとに、bcgdatabase.jacl を使用して 既存の JDBC データ・ソースを除去します。

JDBC データ・ソースを除去します。bcgdatabase.jacl から情報を呼び出すには、次のコマンドを入力します。

```
./wsadmin.bat -f bcgdatabase.jacl -conntype NONE uninstall [db2 | oracle]<nodeName><serverName>
```

次の値を使用してください：

```
./wsadmin.bat -f bcgdatabase.jacl -conntype NONE uninstall oracle DefaultNode server1
```

3. Console、Receiver、および Document Manager の各コンポーネントについて、bcgdatabase.jacl を呼び出して、JDBC データ・ソースを作成します。

JDBC データ・ソースを作成します。bcgdatabase.jacl から情報を呼び出すには、以下の値とコマンドを使用します。不等号括弧 <> に囲まれた値を、インストール時に指定した値で置き換えることを忘れないでください。

```
./wsadmin.bat -f bcgdatabase.jacl -conntype NONE install<dbType>  
<dbName> <dbHostName> <dbPort> <dbUserId> <dbPassword> <nodeName>  
<serverName> <dbZipFile> <jndiName>
```

4. Oracle オプションを使用してインストールする場合は、dbZipFile が Oracle によって提供されるファイルの絶対パス名となり、このパス名を使用してデータベースに接続します。通常、そのファイル名は、classes12.zip です。

```
./wsadmin.bat -f bcgdatabase.jacl -conntype NONE install oracle <dbName>  
<dbHostName> <dbPort> <dbUserId> <dbPassword> DefaultNode  
server1 <dbZipFile> datasources/OracleDS
```

5. Console、Receiver、および Document Manager を開始します。

---

## Business Integration Connect の開始

Business Integration Connect のインストールが完了すれば、製品を稼働させる準備ができています。Business Integration Connect は 2 つの方法で始動できます。

Business Integration Connect は、サービスとして、またはコマンド・プロンプトから始動することができます。

Business Integration Connect をサービスとして始動するには、次の手順を実行します。

1. 「スタート」 > 「設定」 > 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「サービス」 をクリックします。
2. 「Business Integration Connect」 を右マウス・ボタンでクリックし、「開始」 を選択します。
3. 「IBM WebSphere Application Server V5 - bcgConsole」 を右マウス・ボタンでクリックし、「開始」 を選択します。
4. 「IBM WebSphere Application Server V5 - bcgDocumentMgr」 を右マウス・ボタンでクリックし、「開始」 を選択します。
5. 「IBM WebSphere Application Server V5 - bcgReceiver」 を右マウス・ボタンでクリックし、「開始」 を選択します。

**注:** サーバーを右マウス・ボタンでクリックして「自動 (Automatic)」を選択することにより、これらのサーバーが始動時に動作を開始する設定を選択することもできます。

Business Integration Connect をコマンド・プロンプトから始動するには、次の手順を実行します。

1. 以下のディレクトリーにナビゲートします。  
`{WBIC_INSTALL_DIR}\%IBM%\WBIConnect%\console%\was%\bin`
2. 次のコマンドを入力して、Community Console を開始します。  
`startServer.bat server1`
3. 以下のディレクトリーにナビゲートします。  
`{WBIC_INSTALL_DIR}\%IBM%\WBIConnect%\receiver%\was%\bin`
4. 次のコマンドを入力して、Receiver を開始します。  
`startServer.bat server1`
5. 以下のディレクトリーにナビゲートします。  
`{WBIC_INSTALL_DIR}\%IBM%\WBIConnect%\router%\was%\bin`
6. 次のコマンドを入力して Document Manager を開始します。  
`startServer.bat server1`
7. Web ブラウザーを開いて次の URL を入力します。

非セキュアの場合は、次のようにします。

`http://<hostname>.<domain>:58080/console`

セキュアの場合は、次のようにします。

`https://<hostname>.<domain>:58443/console`

<hostname> および <domain> は、Community Console コンポーネントをホスティングするコンピューターの名前およびロケーションです。

**注:** WBI Connect Community Console では、Cookie のサポートをオンにしてセッション情報を維持する必要があります。Cookie に個人情報が保管されることはなく、ブラウザが閉じられると Cookie も有効期限切れになります。

8. Web ブラウザーに次のアドレスを入力して、次のポートから Document Manager に接続します。

`http://<hostname>.<domain>:56969`

9. Web ブラウザーにウェルカム・ページが表示されます。次の情報を使用して、Business Integration Connect にログインします。

- 「ユーザー名」フィールドには次のように入力します。

hubadmin

- 「パスワード」フィールドには次のように入力します。

Pa55word

- 「会社名」フィールドには次のように入力します。

Operator

「ログイン」をクリックします。

10. 最初にログインするときには、新しいパスワードを作成する必要があります。新規パスワードを入力してから、「検証」テキスト・ボックスにもう一度新規パスワードを入力します。
11. 「保管」をクリックします。システムは、Console の初期入力画面を表示します。

これで、Business Integration Connect へのログインが完了しました。次の操作については「*Getting Started*」ガイドを参照してください。また、インストール・システムのテスト方法については『インストール・システムのテスト』を参照してください。

---

## インストール・システムのテスト

次の手順に従って、Business Integration Connect の稼働中にインストール・システムをテストしてください。

1. ユーザーのログイン・イベントにもとづいたアラートを作成し、アラートの連絡先としてユーザー自身を設定します。アラートの作成と、アラートに連絡先を追加する方法について詳しくは、「*Community Console User's Guide*」の『Managing Alerts』を参照してください。
  - 「アラート所有者」ドロップダウン・リストで、「ハブ・オペレーター (Hub Operator)」を選択します。
  - 「参加者」ドロップダウン・リストで、「ハブ・オペレーター (Hub Operator)」を選択します。
  - 「イベント・タイプ」ドロップダウン・リストで、「情報」を選択します。
  - 「イベント名」ドロップダウン・リストで、「102002 ユーザーのログインは成功しました (102002 User Login was successful)」を選択します。

2. ログアウトし、ハブ管理ユーザーとしてもう一度ログインします。
3. E メールでアラート・メッセージをチェックします。

Business Integration Connect のインストールで問題が発生した場合は、87 ページの『トラブルシューティング』を参照してください。

---

## Business Integration Connect のアンインストール

この手順を使用して、Business Integration Connect または Database Loader をアンインストールします。

1. コンポーネントをアンインストールした後もう一度インストールする場合は、コンポーネントのインストールに使用したオプション・ファイルを保管します。

**注:** コンポーネントをもう一度インストールする計画がある場合は、共通ディレクトリー・ツリーと共に、Console, Receiver ディレクトリーと Document Manager ディレクトリーもバックアップしてください。また、Database Loader アンインストーラーを使用する前に、データベースをバックアップする必要もあります。

2. Business Integration Connect を Windows Service としてインストールした場合は、Business Integration Connect をアンインストールする前に、Receiver、Document Manager、および Console を停止する必要があります。次の手順に従って、Receiver、Document Manager、および Console を停止させます。
  - a. 「スタート」 > 「設定」 > 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「サービス」をクリックします。
  - b. 「IBM WebSphere Application Server V5 - bcgConsole」を右マウス・ボタンでクリックし、「停止」を選択します。
  - c. 「IBM WebSphere Application Server V5 - bcgDocumentMgr」を右マウス・ボタンでクリックし、「停止」を選択します。
  - d. 「IBM WebSphere Application Server V5 - bcgReceiver」を右マウス・ボタンでクリックし、「停止」を選択します。
3. 以下の順序で WebSphere Business Integration Connect サーバーをシャットダウンします。

**注:** これらのステップは、ステップ 2 に従って Windows Service からコンポーネントをシャットダウンしなかった場合にのみ実行する必要があります。

- a. `{WBIC_INSTALL_DIR}\%console%\was\bin` ディレクトリーに移動し、次のコマンドを実行します。

```
stopServer.bat server1
```

- b. `{WBIC_INSTALL_DIR}\%receiver%\was\bin` ディレクトリーに移動し、次のコマンドを実行します。

```
shutdown_bcg.bat
```

- c. `{WBIC_INSTALL_DIR}/router/was/bin` ディレクトリーにナビゲートし、以下のコマンドを実行します。

```
shutdown_bcg.bat
```

4. `_unist` ディレクトリーで、アンインストーラー実行可能プログラムを実行します。

アンインストーラー・ウィザードが始動し、「ようこそ」画面が表示されます。「次へ」をクリックして先へ進みます。

5. **Business Integration Connect** をアンインストールする場合は、「コンポーネント選択」画面でこのシステムから取り外すコンポーネントを選択します。複数のコンポーネントを選択できます。

共通の共用ファイルのアンインストールについては、注意が必要です。アンインストールした後で同じロケーションに再び共通の共用ファイルをインストールしない場合は、プロパティー・ファイルとデータベース内の構成の多くを変更する必要があります。

**注:** **Business Integration Connect** は、各コンポーネントの 1 つ以上のインスタンスを必要とします。コンポーネントの唯一のインスタンスを除去する場合は、別のシステムにコンポーネントをインストールすることが必要になります。例えば、ネットワークを構成する **Document Manager** の唯一のインスタンスを削除する場合は、別のシステムに **Document Manager** をインストールし、同じデータベースとキュー・マネージャーを使用するように構成する必要があります。

「次へ」をクリックして先へ進みます。アンインストーラーの画面に「要約」画面が表示されます。

6. 「要約」画面には、アンインストーラーによって除去されるコンポーネントがリストされます。この情報を確認します。表示された情報のいずれかに誤りがある場合は、「戻る」をクリックして前の画面に戻り、誤りを訂正します。「要約」画面の情報がすべて正しい場合は、「次へ」をクリックします。

**注:** アンインストーラーは、インストール時に作成されたファイルのみ除去します。インストール後に作成されたファイルやフォルダーは一切除去しません。アンインストールの完了後に残りのファイルまたはフォルダーを手動で除去します。

7. アンインストーラーにより、選択されたコンポーネントが除去されます。すべてのコンポーネントが除去されると、アンインストーラーの「完了」ボタンが使用可能になります。「完了」をクリックします。
8. ディレクトリー構造に残っているファイルを確認してからディレクトリー・ツリーを除去します。

---

## トラブルシューティング

Database Loader のインストール中に問題が発生した場合は、`system temp\WBICconnect\logs` ディレクトリーに格納されている Database Loader のログを見て、問題に関する情報を得てください。例えば、`Documents and Settings\db2admin\Local Settings\Temp\WBICconnect\logs` とします。

問題が解決したら、次の手順を実行し、作成されたデータベースを削除します。

1. Database Loader のアンインストーラーを実行し、データベースを削除します。

2. データベースの削除が完了したら、Database Loader ウィザードを再実行します。

Business Integration Connect コンポーネントのインストール中に問題が発生した場合は、以下のインストール・ログを検討します。

```
{WBIC INSTALL DIR}{IBM}{WBICConnect}{console}{logs}
```

```
{WBIC INSTALL DIR}{IBM}{WBICConnect}{receiver}{logs}
```

```
{WBIC INSTALL DIR}{IBM}{WBICConnect}{router}{logs}
```

以下のランタイム・ログも調べる必要があります。

```
{WBIC INSTALL DIR}{IBM}{WBICConnect}{console}{was}{logs}{server1}
```

```
{WBIC INSTALL DIR}{IBM}{WBICConnect}{receiver}{was}{logs}{server1}
```

```
{WBIC INSTALL DIR}{IBM}{WBICConnect}{router}{was}{logs}{server1}
```

---

## 特記事項

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032  
東京都港区六本木 3-2-31  
IBM World Trade Asia Corporation  
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。

IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Burlingame Laboratory Director  
IBM Burlingame Laboratory  
577 Airport Blvd., Suite 800  
Burlingame, CA 94010  
U.S.A

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

#### 著作権使用許諾

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、このサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

Websphere Business Integration Connect には、ICU4J というコードが含まれています。ICU4J のコードは、IBM の「プログラムのご使用条件」に基づきその「適用

除外コンポーネント」の条項に従うことを条件に使用許諾されます。ただし、IBM は以下の条項を明示することを義務付けられています。

著作権および許可に関する注意事項

本「プログラム」は、IBM 社およびその他の著作権により保護されています。

Copyright (c) 1995-2003

All rights reserved.

このソフトウェアおよびその関連文書ファイル (以下「ソフトウェア」といいます) を取得する人には、この「ソフトウェア」の、使用、複製、変更、結合、出版、配布またはソフトウェアの複製を販売する権利を含め、制約なく取引する権利を無償で許可し、また、「ソフトウェア」を与えられた人にも、この権利が与えられます。ただし、上記の著作権表示およびこの許可通知が、すべてのこの「ソフトウェア」の複製に記載され、また上記の著作権表示およびこの許可通知が、関連文書に記載されている場合に限りです。

ソフトウェアは、特定物として現存するままの状態を提供され、第三者の権利の不侵害の保証、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含む、すべての明示もしくは黙示の保証責任または保証条件を負わないものとします。さらに、著作権者またはこの注意事項に含まれている権利の所有者は、このソフトウェアの使用または実行に起因するものであれ、関連するものであれ、契約、過失、不法行為のいずれによるものであれ、使用、データまたは利益の喪失から発生する請求、あるいは特別、直接的、間接的、結果的損害、または他の一切の損害について、何等の責任も負いません。

この通知に記されているもの、および事前の書面による承認がある場合を除き、著作権者の名前を、このソフトウェアの広告、または販売、使用、取引の促進のためにご使用になることはできません。

---

## プログラミング・インターフェース情報

プログラミング・インターフェース情報は、プログラムを使用してアプリケーション・ソフトウェアを作成する際に役立ちます。

一般使用プログラミング・インターフェースにより、お客様はこのプログラム・ツール・サービスを含むアプリケーション・ソフトウェアを書くことができます。

ただし、この情報には、診断、修正、および調整情報が含まれている場合があります。診断、修正、調整情報は、お客様のアプリケーション・ソフトウェアのデバッグ支援のために提供されています。

**警告:** 診断、修正、調整情報は、変更される場合がありますので、プログラミング・インターフェースとしては使用しないでください。

---

## 商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

IBM  
IBM ロゴ  
AIX  
CrossWorlds  
DB2  
DB2 Universal Database  
Lotus  
Lotus Domino  
Lotus Notes  
MQIntegrator  
MQSeries  
Tivoli  
WebSphere

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

MMX、Pentium および ProShare は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。



WebSphere Business Integration Connect Enterprise and Advanced Editions バージョン 4.2.2